

筑波大学博士(言語学)学位請求論文

コントロール現象の統語的・意味的分析
—主文動詞と補文形式の対応関係—

阿久澤 弘陽

2017 年度

目次

第1章 序論.....	1
1.1. 本研究の研究対象と目的.....	1
1.1.1. 英語におけるコントロール.....	1
1.1.2. 他言語におけるコントロール.....	2
1.1.3. 日本語におけるコントロール.....	5
1.1.4. コントロールの定義.....	7
1.1.5. 本研究での研究対象.....	9
1.2. 本研究の構成.....	10
第2章 先行研究の概観と問題の所在.....	13
2.1. はじめに.....	13
2.2. 補文の空主語.....	13
2.3. コントロールと繰り上げ.....	15
2.4. コントロールに関する先行研究.....	19
2.4.1. 変形文法時代の分析.....	19
2.4.2. GB 理論時代の分析.....	21
2.4.3. ミニマリストプログラム時代の分析.....	25
2.4.4. 節のまとめ.....	32
2.5. 日本語におけるコントロールと問題の所在.....	33
2.5.1. 日本語におけるコントロールの統語的環境.....	33
2.5.2. コントロール対非コントロール.....	34
2.5.3. 節のまとめ.....	39
2.6. まとめ.....	40
第3章 コト節補文におけるコントロール.....	42
3.1. はじめに.....	42
3.2. 先行研究でのコントロール現象に関する記述.....	44
3.2.1. Fujii (2006) の記述的一般化.....	44
3.2.2. Fujii (2006) の一般化の問題点.....	47
3.2.3. 節のまとめ.....	50
3.3. 述語の意味分類とコントロール現象.....	50

3.3.1.	コト節補文を選択する述語の意味分類とコントロール性.....	50
3.3.2.	コントロール性に関わる述語の意味.....	55
3.3.3.	主文と補文におけるイベントの非分離性.....	55
3.3.4.	指示・操作性.....	58
3.3.5.	再帰性.....	59
3.3.6.	節のまとめ.....	63
3.4.	理論的含意.....	63
3.4.1.	先行研究の分析.....	64
3.4.2.	提案.....	72
3.5.	まとめ.....	81
第4章	統語的複合動詞と長距離の受け身化.....	83
4.1.	はじめに.....	83
4.2.	統語的複合動詞.....	83
4.3.	先行研究の概観.....	85
4.3.1.	影山 (1993).....	85
4.3.2.	岸本 (2013).....	87
4.3.3.	先行研究の理論的・記述的問題点.....	88
4.3.4.	節のまとめ.....	90
4.4.	現象の整理.....	91
4.4.1.	統語的複合動詞の意味的分類.....	91
4.4.2.	統語的複合動詞と長距離の受け身化.....	92
4.4.3.	節のまとめ.....	93
4.5.	提案.....	93
4.5.1.	再構造化動詞としての統語的複合動詞.....	93
4.5.2.	長距離の受け身化の機能範疇分析.....	95
4.5.3.	統語的複合動詞における V2 の機能動詞的特徴.....	97
4.6.	構造と意味の対応関係.....	100
4.7.	統語的複合動詞におけるコントロール性.....	105
4.8.	まとめ.....	105
第5章	イベント名詞句からの抜き出し.....	107
5.1.	はじめに.....	107

5.1.1.	項転移とコントロール性.....	108
5.1.2.	問題の所在.....	109
5.2.	先行研究.....	110
5.2.1.	Matsumoto (1996a, b) の観察と分析.....	110
5.2.2.	Saito and Hoshi (1998, 2000) の分析.....	112
5.3.	項転移に関するコントロール性以外の制約.....	113
5.3.1.	叙実コントロール述語と項転移.....	113
5.3.2.	指示的表現と項転移.....	115
5.3.3.	節のまとめ.....	116
5.4.	提案.....	116
5.4.1.	前提性と抜き出し.....	116
5.4.2.	前提性と項転移現象.....	118
5.5.	前提性と数量詞遊離.....	118
5.6.	他の現象との関わり：描写二次述部.....	121
5.6.1.	描写二次述部.....	121
5.6.2.	分裂文.....	123
5.6.3.	節のまとめ.....	125
5.7.	理論的含意.....	125
5.7.1.	抜き出しと前提性.....	125
5.7.2.	コントロール性と抜き出し.....	127
5.8.	まとめ.....	128
第 6 章	補部形式の選択と述語の意味.....	129
6.1.	はじめに.....	129
6.2.	先行研究の分析と問題点.....	130
6.2.1.	先行研究.....	130
6.2.2.	先行研究の問題点.....	134
6.3.	二種類の「忘れる」と付加詞の修飾.....	135
6.3.1.	二種類の「忘れる」.....	135
6.3.2.	二種類の「忘れる」と付加詞の修飾の可能性.....	136
6.3.3.	「忘れる」の意味と数量詞遊離.....	137
6.3.4.	「忘れる」の意味とイベント名詞句.....	139

6.3.5. 「忘れる」の意味と補部の形式.....	143
6.4. 他の動詞と補部の形式.....	145
6.5. 理論的説明.....	148
6.6. まとめ.....	150
第7章 結論.....	152
7.1. 本研究のまとめ.....	152
7.2. 本研究の意義.....	156
7.3. 今後の展望.....	158
参考文献.....	160
各章と既発表論文および口頭発表との関係.....	168

第1章 序論

1.1. 本研究の研究对象と目的

本研究では、伝統的に補文コントロール (complement control) と呼ばれる現象を対象に、その周辺の現象も含めて分析することで、コントロールに関与する述語の意味的・統語的な特徴を明らかにすることを目的とする。それとともに、述語の意味と補部形式との対応関係を明示的に示し、述語の意味的特徴から導かれる統語的特徴 (構造) を解明することを目指す。

本章では、まず、コントロール研究の出発点となった英語の典型的な例を確認し、コントロール分析における主な研究課題と、既に得られている言語事実を簡単にまとめる。次に、いくつかの他言語のコントロールに関わる言語事実も確認し、本研究の研究背景を述べ、コントロールの定義を提示する。そして、本研究での主な対象と研究の目的を明確にし、論文全体の構成を示す。

1.1.1. 英語におけるコントロール

本節では、英語において伝統的にコントロールと呼ばれてきた現象を確認し、明らかにされている言語事実を示す。まずは以下の英語の例を見られたい¹。

- (1) a. John_i tried [$\Delta_{i/*j}$ to open the door].
b. John_i persuaded Mary_j [$\Delta_{*i/j/*k}$ to open the door].

上記の(1)は、try と persuade という述語が補文を選択している複文である。補文には顕在的な形で主語が出現していないが、その主語が指しているものは明らかで、(1a)の場合は主文主語の John、(1b)の場合は主文目的語の Mary である。このように、主文内に

¹ 本研究では、下付きのインデックス (i, j, k 等) を、補文の空主語とその先行詞の関係性を標示するために用いる。下付きインデックスで対応する先行詞が文内に存在しない場合は、文外の談話上の先行詞を指す。なお、論文を通じて、補文の非顕在的な主語を Δ で表すこととする。

現れる先行詞と補文の非顕在的主語の指示関係が定まっている現象は、伝統的にコントロールと呼ばれる。なお、(1a)のように主文主語と補文の非顕在的な主語が一致しているものを主語コントロールといい、(1b)のように主文目的語と補文の非顕在的な主語が一致しているものを目的語コントロールという。

こうしたコントロールの環境下では、以下の(2)に見られるように、補文の非顕在的な主語が顕在的代名詞と交替することはない。

- (2) a. *John_i tried [he_i to open the door].
b. *John_i persuaded Mary [she_i to open the door].
cf. John_i imagines that [he_i will open the door].

補文に見られる非顕在的な主語は空主語とも呼ばれる。英語を中心とした伝統的なコントロールの分析（統率束縛（GB）理論のコントロールの分析）では、空主語はその名の通り何も存在しないのではなく、代名詞的であり照応的である空範疇（empty category）の PRO が出現すると考えられてきた（Chomsky 1981, 1982）。

そして、こうしたコントロールに対する分析では、以下の二点が主な研究課題となっている。

- (3) a. 空主語の統語的分布
b. 空主語の解釈の決定方法

伝統的に、空主語は、不定詞節や動名詞節といった非定形補文にしか出現できないとされている。一方、空主語の解釈は、それと距離的に最も近い主文の要素の解釈と一致するとされてきた。

こうした補文の空主語に関する分析は、目には見えないが確かに存在する要素の統語的・意味的特徴の解明と密接に関わっているという点で、言語を生み出す心内メカニズムの解明を目指す生成文法の歴史の中で常に注目を浴びてきた。

1.1.2. 他言語におけるコントロール

コントロールに関わる研究は英語から始まったという経緯から、多くの研究ではコントロールが非定形節に限られるとされている。しかし、既に様々な研究でコントロールが通言語的には非定形節に限られないことが明らかにされている。

Landau (2004, 2006) は、ヘブライ語やバルカン諸語（ギリシア語、ルーマニア語、ブルガリア語、アルバニア語等）では、コントロールされる空主語が定形節にも出現することを指摘している。例えば、バルカン諸語では、非定形節が一部の固定表現を除いて存在せず、英語で非定形節が出現する位置には定形節が出現するが、その場合でも英語のコントロールと似た事実が観察される。

Landau (2004, 2006) によると、コントロールが観察される補文はコントロール仮定法補文 (C(ontrolled)-subjunctive) を選択し、コントロールが観察されない補文は自由仮定法補文 (F(ree)-subjunctive) を選択する。仮定法補文であることは主文述語の後ろに続く特別な要素 (special particle: PRT) によって標示される。

(4) a. コントロール仮定法補文 (C-subjunctive) : コントロール性あり

I Maria_i prospathise [$\Delta_{i/*j}$ na divasi]. (ギリシア語)
 the Mary tried.3sg PRT read.3sg
 ‘Mary tried to read.’

b. 自由仮定法補文 (F-subjunctive) : コントロール性なし

o Yanis_i elpizi [Δ_{ij} na figi]. (ギリシア語)
 the John hopes.3sg PRT wins.3sg
 ‘John_i hopes that he_{ij} will win.’

(Landau 2004: 826-827)

上記の(4ab)はどちらも補文述語が人称・数と一致しているので定形節であると考えられるが、(4a)では空主語の解釈が必ず主文の先行詞の Maria と一致しなければならない。したがって、バルカン諸語では定形節にもコントロールが観察されるとされる。

また、Yang (1984) や Lee (2009) は、韓国語においても定形節でコントロールが認められることを指摘している。

(5) a. John_i-i Bill_j-eykey [$ec_{i/*j/*k}$ ttena-keyss-ta]-ko yaksokha-yess-ta².

J.NOM B.DAT leave-VOL-DC-C promise-PST-DC
 ‘John_i promised Bill that he_i would leave.’

² VOL は Volitional、DC は Declarative、C は Complementizer の略。

- b. John_i-i Bill_j-eykey [ku_i/*j/*k/caki_i/*j/*k-ka ttena-keyss-ta]-ko
 J.NOM B.DAT he /self.NOM leave-VOL-DC-C
 yaksokha-yess-ta.
 promise-PST-DC
 ‘John_i promised Bill that he_i/self_i would leave.’

(Lee 2009: 3)

上記の(5ab)の補文は意志を表すモダリティ要素が出現する定形節であり、どちらも空主語の解釈が主文の先行詞と一致しなければならない。また、(5b)のように顕在的主格主語が出現することも可能であり、その場合にも、顕在的主格主語の解釈は主文の先行詞と必ず一致する。

また、王 (2011) は、中国語でも定形節におけるコントロールが認められることを観察している。

- (6) a. Zhangsan_i dasuan [$\Delta_{i/*j}$ qu bali].
 張三 つもりだ 行く パリ
 「張三はパリに行くつもりだ」
 b. Zhangsan_i mingling lisi_j [$\Delta_{i/j/*k}$ qu bali].
 張三 命じる 李四 行く パリ
 「張三は李四にパリに行くことを命じた」

(王 2011: 5)

中国語は（顕在的）時制辞や述語の屈折変化が存在しない言語なので、補文の定形性は英語のように形態からは見分けられず、多くの研究者が、英語同様、中国語のコントロールの環境は非定形節であるとしてきた。しかし、王 (2011) は、中国語のコントロールは、不定形節のものと定形節のものの二つに分類することができるとしている。

王 (2011) によると、従来画一的に非定形節だとされてきたものは、実は統語的特徴が異なる二種類に分けることができる。例えば、王 (2011) は、以下の(7)では顕在的主語が出現せず、(8)では顕在的主語が出現することから、前者は非定形コントロールだが、後者は定形コントロールであるとしている。

- (7) a. Zhangsan_i kaishi/jixu/jieshu [$\Delta_{i/*j}/*ziji_i$ xuexi riyu].
 張三 始める/続ける/終わる 自分 学習 日本語
 「張三は日本語を勉強し{始めた/続けた/終えた}」
- b. Zhangsan_i neng/hui/keyi [$\Delta_{i/*j}/*ziji_i$ youyong].
 張三 できる 自分 泳ぐ
 「張三は泳ぐことができる」
- (8) a. Zhangsan_i dasuan [$\Delta_{i/*j}/ziji_i$ qu bali].
 張三 つもりだ 自分行く パリ
 「張三は自分がパリに行くつもりだ」
- b. Zhangsan_i mingling lisi_j [$\Delta_{i/*j}/tazij_j$ qu bali].
 張三 命令 李四 彼自身行く パリ
 「張三は李四に彼自身がパリに行くことを命じた」

(王 2011: 6-7)

したがって、中国語の場合も、定形節でコントロールが観察されるということになる。

1.1.3. 日本語におけるコントロール

以上、通言語的にはコントロールが非定形節に限られないことを見てきた。ここで、日本語に目を転じてみると、日本語でコントロールが認められるものには多様な形式が存在することがわかる。

日本語のコントロールに関しても多くの分析が提出されているが、コントロールが特に関与する典型例として挙げられるのは、主文述語が動詞連用形節を選択する場合である。例えば、統語的複合動詞の例がその一つとして挙げられる（影山 1993; Kageyama 1999）。以下の(9)の例を見られたい。

- (9) a. ヒロシ_iは[$\Delta_{i/*j}$ 筑波大学を受験し]直した。
 b. ヒロシ_iは[$\Delta_{i/*j}$ 受験票を持参し]忘れた。

上記の(9)の例では、補文の空主語の解釈は必ず主文主語の「ヒロシ」でなければならない。そして、(9)では補文述語は時制辞を伴っていないので、英語同様、非定形節と考えることができる。

こうしたコントロールの環境は、上記の統語的複合動詞に限られないことが既に多く

の先行研究で指摘されている (Fujii 2006; Hasegawa 1984/85; Nakau 1973; Sakaguchi 1990; Uchibori 2000 等)。例えば以下の(10)のようなコト節を選択する場合である。

- (10) a. ヒロシ_iは[$\Delta_{i/*j}$ 筑波大学を受験すること]を試みた。
 b. ヒロシ_iは[$\Delta_{i/*j}$ 筑波大学を受験したこと]を後悔していない。

上記の(10)の場合、補文述語に明示的な時制辞が現れているので定形節であると考えられるが、補文の空主語は必ず主文主語のヒロシと一致しなければならない³。加えて、コト節であれば、以下の(11)に見られるように、補文の空主語が（再帰）代名詞と交替することができる (Hasegawa 1984/85; Uchibori 2000 等)^{4, 5}。

- (11) a. ヒロシ_iは[自分_{i/*j}が筑波大学を受験すること]を試みた。
 b. ヒロシ_iは[彼自身_{i/*j}が筑波大学を受験したこと]を後悔していない。
 cf.*ヒロシ_iは[自分_{i/*j}が筑波大学を受験し]直した。

³ ただし、Fujii (2006) のように、補文述語の時制辞が非過去・過去で固定されている場合には英語同様に非定形節であると捉えるべきで、これらは「疑似定形節 (pseudo finite clause)」だとする議論もある。この点に関する詳細な議論は第3章を参照されたい。

⁴ 他にも「ようと」節や「ように」節、モーダル名詞述語文等も定形節コントロールに含めることができる。これらの補文内にも顕在的主格主語が出現し得る (竹沢 2016; Uchibori 2000 等)。

- (i) a. ヒロシ_iは[$\Delta_{i/*j}$ 筑波大学を受験しよう]と思った。
 b. ヒロシ_iは[自分_{i/*j}が筑波大学を受験しよう]と思った。
 (ii) a. ヨシコ_iはカオリ_jに[$\Delta_{*i/j/*k}$ 筑波大学を受験するよう]に命令した。
 b. ヨシコ_iはカオリ_jに[彼女自身_{*i/j/*k}が筑波大学を受験するよう]に命令した。
 (iii) a. ヒロシ_iは[$\Delta_{i/*j}$ 筑波大学を受験する]つもりだ。
 b. ヒロシ_iは[自分_{i/*j}が筑波大学を受験する]つもりだ。

こういった環境に見られるコントロールも重要な考察対象である。しかし、「ように」や「ようと」節は、必ずコントロールが観察される節であり、ここには述語の意味とは独立した補文形式の影響が見込まれる。また、モーダル名詞述語文の場合は、他の補部形式と交替が不可能であり、本研究における補部形式の交替に関する分析にそぐわない。したがって、本研究では上記に見られる定形節コントロールは考察対象から除外し、今後の研究に委ねることとする。

⁵ 補文に顕在的な主格主語が出現すると、その要素は焦点解釈を受ける。これは、既に解釈可能なものを音声化することによって語用論的に得られる解釈である。この背景には、Hasegawa (1984/85) や竹沢 (2016) で主張されるように、以下のような語用論的原則が存在すると考えられる。

- (i) 顕在的代名詞類要素回避の原則

特別な語用論的要請がない限り顕在的代名詞類要素を回避せよ (竹沢 2016: 70)

補文に顕在的な主語が出現すると、話者によっては若干容認度が落ちるが、ここで重要な事実は、複合動詞のような連用形節では、補文に顕在的主格主語が決して現れないが、時制辞を伴うような定形節では補文に現れるという対立である。

したがって、日本語のコントロールに関わるデータからは、英語と共通する部分と共通しない部分が存在することがわかる。

また、コントロールが観察される環境は、動詞連用形節やコト節のように述語を埋め込むタイプだけにとどまらない。例えば以下の(12)の例が挙げられる。

- (12) a. ヒロシ_iは[$\Delta_{i/*j}$ 筑波大学の受験]を試みた。
b. ヒロシ_iは[$\Delta_{i/*j}$ 筑波大学への入学]を後悔していない。

(12ab)においては、イベント名詞句の意味上の主語は主文主語であるヒロシと解釈されなければならない。したがって、イベント名詞句を選択した場合でも、通常の補文と同様のコントロールが確認される。こうしたイベント名詞句補部におけるコントロールは積極的に取り上げられてこなかったが、Matsumoto (1996a, b) や Saito and Hoshi (1998, 2000) 等は、イベント名詞句補部もコントロール分析の対象としている

以上、日本語のコントロールには、少なくとも、動詞連用形節補文(統語的複合動詞)、コト節補文、イベント名詞句の三つの環境があることを確認したが、上記の観察が正しいければ、英語のコントロールに対しての分析を日本語にそのまま当てはめることが難しいことがわかる。

1.1.4. コントロールの定義

前節までの議論で、英語は非定形節のみにコントロールが確認されること、しかし、ひとたび他言語に目を向けると定形節にもコントロールと考えられる現象が確認されることを見た。

英語の非定形節に見られるコントロールには、伝統的には空範疇の一つである PRO が出現すると仮定されており、その解釈が主文の要素との一致を要求するという特性、すなわち照応性を備えているとされる。従来はこうした PRO が出現する構文が典型的な「コントロール構文」として扱われてきた。ただ、ひとたび、主文の要素と空主語の解釈が一致するというコントロールの特性に目を向けると、他言語の定形節に見られる空主語と主文の要素の解釈上の一致も、ある種のコントロールとして考えることが可能である。しかし、こうした主文要素と空主語に解釈の一致が見られる環境を、典型的な PRO が出現するとされるコントロール構文と同等に扱えるかは議論が分かれるところである。

本研究では、日本語において様々な構文にまたがる英語のコントロールに似た現象を

統一的に捉えることを目的とする。したがって、補文におけるコントロールを典型的な英語のコントロール構文のみに留めるのではなく、広く補文の空主語と主文の先行詞の解釈が一致する現象も補文コントロールに含めることとする。具体的には、以下の(13)で引用する Stiebels (2007) の定義にしたがう。なお、以下の(13)は義務的コントロール (obligatory control (OC)) の定義とされているが、本質的には補文の空主語の解釈が主文の要素の解釈と一致するということを述べたものであるので、本研究で扱うコントロールと同義である。

(13) Definition of obligatory control (OC)⁶

OC applies to structures in which a predicate P_1 selects an SOA-argument and requires one of its (individual) arguments to be (improperly) included in the set of referents of an argument of the embedded predicate P_2 heading the SOA-argument.

$[X_i P_1 (Y_j) [Z_k P_2 \dots]_{\text{SOA}}]$ with $k \cap \{i, j\} \neq \emptyset$

(Stiebels 2007: 13)

Stiebels (2007) は補文コントロールを類型論的な立場から扱い、主文の要素と補文の空主語の解釈が一致するという、いわゆる「コントロール」の本質に迫ることを目指している。本研究では、上記の Stiebels (2007) の定義にしたがい、主文の要素と補文の空主語の解釈が一致することを「コントロール現象」と呼ぶことにする⁷。コントロール現象という用語は、従来の PRO が想定されるようなコントロール構文も含む。

Stiebels (2007) のコントロール現象の捉え方は、当該の現象における主文述語の意味を捉える上で非常に有益である。実際に、コントロール現象には主文述語の意味も関わっており、通言語的には、統語的環境（補文形式等）だけでなく述語の意味も関与していることが明らかにされている (Landau 2013; Stiebels 2007 等)。コントロール現象は複文現象であり、ある文にコントロール現象が観察されるか否かの決定は、主文述語の意味に大きく依存している。

コントロールと主文述語の意味との間の関係は、日本語のコト節やイベント名詞句にみられるコントロールの例を見るとわかりやすい。

⁶ SOA は state of affairs の略。

⁷ コントロール現象が観察される場合に「コントロール性がある」と表現することもあるが、本研究において、「コントロール現象が観察されること」と「コントロール性があること」は同義である。

- (14) a. ヒロシ_iは[Δ_{ij} 筑波大学を受験すること]を試みた。
 b. ヒロシ_iは[Δ_{ij} 筑波大学を受験すること]を想像している。
- (15) a. ヒロシ_iは[Δ_{ij} 筑波大学の受験]を試みた。
 b. ヒロシ_iは[Δ_{ij} 筑波大学の受験]を想像している。

上記の(14)および(15)の例は、補文およびイベント名詞句を選択する述語だけが異なり、その他の条件が全て同じのミニマルペアである。しかし、補文（補部）の空主語の解釈の可能性は(14a)(15a)と(14b)(15b)でそれぞれ異なっている。(14a)(15a)では、空主語は必ず主文主語のヒロシと一致しなければならないが、(14b)(15b)ではそのような制約は存在せず、空主語がヒロシ以外の誰かを指すことが可能である。これは、主文述語の意味がコントロールに関与していることを示している。先行研究では、コントロール現象に関わる述語について便宜的に意味分類がなされることはあったが、体系的に述語の意味とコントロール現象の対応関係に言及したものはない。

述語の意味という観点から補文構造を考えると、上述の問題に加えて、補部形式の選択に関わる問題も興味深い言語事実として挙げられる。例えば、日本語では以下の(16)に見られるように、同じ述語が複数の補部形式を取りうる。

- (16) a. ヒロシは[筑波大学への入学手続きをすること]を忘れた。
 b. ヒロシは[筑波大学への入学の手続きをし]忘れた。
 c. ヒロシは[筑波大学への入学の手続き]を忘れた。

先行研究では、動詞連用形節（複合動詞の）補文、コト節補文のコントロール現象に関しては多く議論されているが、これらの主文述語の意味と補部形式の選択の間の関係についての議論はない。特に、動詞連用形節を選択することができる動詞は限られており（*ヒロシは[筑波大学への入学手続きをし]伝えた）、そこには明らかに動詞の意味が関わっていると考えられる。したがって、このような補部形式の選択も動詞の意味との関わりから議論するべきである。

上記のような問題意識を持ち、本研究では、伝統的にコントロールと呼ばれてきた現象を統語と意味という二つの観点から分析することを試みる。

1.1.5. 本研究での研究対象

前節までの記述を踏まえて本研究での対象と課題をまとめると以下のようなになる。

(17) 本研究の研究対象

補文（または補部）コントロールに関わる現象

- a. コト節補文
- b. 動詞連用形節補文（複合動詞）
- c. イベント名詞句補部

(18) 本研究での目標と課題

[目標]

コントロール現象に関わる（主文）述語の意味的特徴と補文の統語的特徴を解明する。

[課題]

- a. コト節補文を含む複文にコントロール現象が観察される場合、その主文述語の意味特徴は何か。また、コト節補文の空主語の統語的実態およびその解釈の決定方法はどうなっているか。
- b. コントロール現象が観察される動詞連用形節補文を選択する主文述語の意味的特徴は何か。主文述語の意味によって補文構造に差異が存在するか。また、動詞連用形節に観察される空主語の統語的実態は何か。
- c. コントロール述語がイベント名詞句を選択する場合に、その述語の意味的特徴がどのような統語現象と関連性を持つか。その統語的ふるまいの背後にある述語の意味的特徴は何か。また、コントロール性と統語的ふるまいの関係はいかなるものか。
- d. 補部形式の選択と主文述語の意味にはどのような対応関係があるか。あるとすれば、その選択の背景にはどのようなメカニズムが関わっているか。

本研究では、(17)の研究対象に対して、(18)のような研究目標と課題を設定する。そして、(18)で挙げた課題に対して統語的および意味的な観点から分析を進め、当該の課題を記述的に明らかにするとともに、その理論的な含意を考察する。

1.2. 本研究の構成

本研究は、第1章の序論、第7章の結論、そして第2章から第6章までの本論から構成される。具体的な研究対象および議論・主張の内容は以下の通りである。

第2章では、本研究の前提となるコントロール現象の研究意義を、生成文法の考え方にに基づきながら、繰り上げとの対比で述べる。そして、コントロール現象が、生成文法の枠組みにおいて、その理論的変遷とともにどのように分析されてきたのかを概観し、英語と日本語のコントロール現象の関連議論を整理する。加えて、日本語に見られるコントロールと非コントロールの対立を明確にする。

第3章では、コト節補文をとる述語を対象に分析を試みる。具体的には、Fujii (2006) が提案したコト節コントロール現象に関する一般化の問題点を指摘し、コト節補文のコントロール現象は、より主文述語の意味に着目して捉えるべきであると主張する。そして、そうした主文述語の意味的特徴を捉えるため、Landau (2000) や Grano (2015) などのコントロール述語の意味分類を援用しながら、コト節を選択する述語の意味を分類・整理し、コントロール現象には「イベントの非分離性」「指示・操作性」「再帰性」が関与していると主張する。

理論的な含意としては、コト節補文は定形節であることを示し、王 (2011) にしたがって、補文の空主語の統語的実態は *pro* であると考えるのが妥当であると主張する。そして、コト節補文にみられるコントロール現象は、本質的コントロール (*inherent control*) という観点からコントロール現象に迫った Stiebels (2007) と Gamerschlag (2007) の考え方が有効であることを示す。

第4章では、コントロール現象の典型例である統語的複合動詞を取り上げる。そして、そこに観察される長距離の受け身化に考察を加え、主文述語の意味とコントロール現象の関係、主文述語の意味と補文構造の関係に考察を加える。従来の先行研究では、長距離の受け身化はコントロールと繰り上げの対立から分析がなされてきたが、本章では再構造化の分析と絡めながら、これが Cinque (2006) の再構造化動詞の機能動詞分析から説明できることを示す。

こうした機能動詞分析は、従来コントロール述語とされてきた動詞群との齟齬を生むが、本章では、統語的複合動詞の機能動詞的側面を論じ、統語的複合動詞が繰り上げ構造となっていると分析することの妥当性を検証する。そして、統語的複合動詞に見られるコントロール現象は、補文主語の主文主語位置への繰り上げによってもたらされると主張する。

第5章では、イベント名詞句を選択する述語を対象に、その述語の意味的特徴とコントロール現象に関する議論を展開し、述語の意味が関与する統語現象を分析する。具体的には、項転移現象および数量詞遊離現象という統語現象にコントロール性が関与していることを確認する。そして、コントロール述語を網羅的に観察することで、当該の現

象にはコントロール性以外にも「前提性 (presuppositionality; Diesing 1992)」という概念が関与していることを明らかにする。

こうした項転移や数量詞遊離といった独立した現象に統一的な説明を与えるにあたって、「抜き出し」という概念を用い、述語の意味が抜き出しという統語現象にいかに関与しているかを議論する。加えて、描写二次述部や分裂文などの関連現象も観察し、述語の意味と抜き出しに関する議論の妥当性を高める。

まとめでは、イベント名詞句におけるコントロール性はコト節補文における主文述語の意味に基づいた分析が妥当であることを示し、第3章での記述とイベント名詞句に見られる統語現象の関わりを考察する。

第6章では、コト節補文・動詞連用形節補文・イベント名詞句という三つの補部形式を選択しうる述語を対象に、補部の形式と述語の意味との関係性を議論する。特に、「忘れる」を主な対象として、補文述語への付加詞の修飾という点から意味と補部形式の対応関係を明らかにする。「忘れる」に加えて、複数の補部形式を選択する「始める」「慣れる」などの動詞にも言及し、これらの動詞の意味と補部形式のつながりに関する記述が、再構造化現象 (Cinque 2006; Rizzi 1982; Wurmbrand 2001 等) に対してどのような理論的貢献を果たすかを論じる。

第7章では本研究の結論と残された課題、そして今後の展望を述べる。

第2章 先行研究の概観と問題の所在

2.1. はじめに

本章では、先行研究にしたがって、補文の空主語の存在および空主語が関連する同形異義文である繰り上げとコントロールの相違を確認する。続いて、コントロールに対してなされてきた従来の分析を生成文法の理論の変遷とともに概観する。また、日本語のコントロールの統語的環境を示すとともに、先行研究に基づきながら、コントロールと非コントロールの対立を示す。そして、日本語におけるコントロール現象を扱う上での問題の所在を明らかにする。

2.2. 補文の空主語

生成文法の主たる目的は、表面上の単語の配列の背後にある心内の構造的原理を解明することである。この目的を達成するために、生成文法の初期から注目されてきたのが、以下の(1)に見られるような同形異義文である。

- (1) a. Barnett seemed to understand the formula.
- b. Barnett tried to understand the formula.

(Davis and Dubinsky 2004: 3)

上記の(1ab)は、表面上の単語の配列は、主文述語の *seem* と *try* を除いて全く同じである。生成文法の標準的な分析では、これらの文には、*seem* と *try* の違いによる語彙意味上の差異だけでなく、統語構造とその派生に相違があるとされてきた。*seem* と *try* は、それぞれの語彙意味的な性質から、前者は「命題」という一つの項をとり、後者は、「動作主」と「命題」という二つの項をとる。これを外項と内項という構造的な観点も含めて書き表すと以下の(2)のような表示が得られる。なお、以下の表示の下線部は外項であることを示している。

- (2) a. seem [φ , 命題]
 b. try [動作主, 命題]

seem は外項には何も選択せず、内項に命題を選択する非対格動詞であるのに対し、try は外項に動作主、内項に命題を選択する他動詞である。生成文法では、こうした項構造の差異は統語構造にも影響を与えられと考えられており、伝統的に以下の(3)に見られるような統語的派生の対立が仮定されてきた。

- (3) a. [Barnett_i seemed [t_i to understand the formula]].
 b. [Barnett_i tried [φ_i to understand the formula]].

主文動詞が seem である(3a)の場合は、補文主語が主文に繰り上がることで派生されることが考えられている。一方、主文動詞が try である(3b)であれば、補文には何らかの形で音声的に具現化しない空主語があると仮定され、その空主語が、主文主語と同一解釈であることを要求するとされている。

こうした分析には、生成文法の理論的背景がある。生成文法における統率・束縛理論 (government-binding theory; 以降 GB 理論と表記する) の枠組みでは、言語は一般的原理原則の体系によって構築されており、空主語の存在はその理論構築と密接に関連している。空主語と密接に関わっている原理は、「拡大投射原理 (Extended Projection Principle)」である。拡大投射原理は、GB 理論の中心的な原理の一つで、次のように定義される (Chomsky 1982: 10; 以下の表記は中村・金子・菊地 2001 より引用)。

- (4) 拡大投射原理
 a. 各語彙項目の θ 役割付与の特性は、すべての統語レベル (D 構造、S 構造、LF) で満足されていなければならない。
 b. 節は主語を持つ。

(中村・金子・菊地 2001: 72)

この原理は、語彙項目が持つ意味役割によって統語範疇が決定すると、それが全てのレベルで存在していなければならないこと、また、全ての節は主語を持たなければならないことを規定している。したがって、この原理の帰結として、(3ab)のどちらの補文にも音声化していない空主語が存在しているということが導かれる。

また、空主語は θ 規準 (θ -Criterion) と関連している。これは、意味の単位である意味役割は必ず唯一の統語形式で具現化されることを主張しており、以下のように定義される (Chomsky 1981: 36)。

(5) θ 規準

各項は唯一の θ 役割を持ち、また、各 θ 役割は唯一の項に付与される。

この規準は、項と意味役割の間に必ず一対一の対応関係が存在することを主張している。*seem* の場合は(2a)で示したように外的意味役割を持たないので外項の位置には何も存在していない。したがって、(3a)は補文位置にある主語が主文の主語位置に移動することによって派生され、「主語繰り上げ構文」と呼ばれる。一方で(3b)の場合は、(3a)のように補文主語を主文主語の位置に繰り上げることによって派生することはできない。これは、*try* が(2b)で示したように外的意味役割を持ち、主文の主語位置には既に意味役割が付与されているためである。 θ 規準は意味役割と項との間に一対一の対応関係を求めるので、既に補文動詞の *understand* によって意味役割を与えられている補文主語が、主文の意味役割が与えられる位置に移動すると二つの意味役割を受け取ることになってしまい、このような派生は許されない。したがって、*try* のような動詞の補文の主語位置には、**PRO** と呼ばれる空範疇が存在していると仮定され、この空範疇の解釈は GB 理論の枠組み内の下位理論に当たる「コントロール理論」によって捉えられる。こうした **PRO** の存在が仮定される構文は、主語繰り上げ構文とは区別され、「コントロール構文」と呼ばれている。

以上のように、表面的には同形の構文の背景には異なった統語構造があることが明らかにされており、繰り上げとコントロールの対立は生成文法において重要な意味を持っている。また、コントロールの補文における空主語の存在は、目には見えないが、顕在的な語彙的要素と同様の文法的役割を果たしているので、コントロールは生成文法の理論体系の構築の中心的現象とされてきた。

そこで、以下では、繰り上げ構造とコントロール構造が持つ統語的相違が反映されていると考えられる現象を挙げ、コントロールと繰り上げの構造的差異を明らかにする。

2.3. コントロールと繰り上げ

既に前節で述べたように、以下の二つの文は、表面上は同形だが、統語構造には違いがある。

- (6) a. [Barnett seemed [t_i to understand the formula]].
 b. [Barnett tried [ϕ_i to understand the formula]].

((3)の再掲)

このような統語構造の差異は、様々な経験的言語現象と密接に関わっている。

以下では英語の繰り上げとコントロールに関する具体的な現象を、繰り上げ動詞 *seem* とコントロール動詞 *try* を例に確認し、それと並行する形で、日本語に関する先行研究の知見もまとめる。なお、以下の英語の例は、特に断りが無い限り、Davis and Dubinsky (2004) からの引用である。

まず、繰り上げとコントロールは主語の選択制限に違いが見られる。

- (7) a. The rock seems to be granite.
 b. *The rock tried to be granite.

繰り上げ動詞の場合は(7a)のように *rock* という無生物主語が生起しうるが、コントロール動詞の場合は(7b)で示されるようにこれが不可能である。この主語の選択制限が、繰り上げとコントロールの差異を示す一つの経験的言語事実である。こうした主語の選択制限は、*seem* と *try* の外項の有無を反映しているとされる。

次に、繰り上げとコントロールには主文の主語位置の虚辞の生起可能性に関して違いが観察される。

- (8) a. It seemed to be raining.
 b. There seems to be a unicorn in the garden.
 (9) a. *It tried to be raining.
 b. *There tried to be a unicorn in the garden.

上記の(8)と(9)の対立から明らかなように、繰り上げ動詞の場合には、主文主語の位置に実質的意味を持たない虚辞の *it* および *there* が生起しうるのに対して、コントロール動詞の場合にはそれが不可能である。この虚辞の出現の可否は、繰り上げとコントロールの外項の有無に関する違いを反映している。

繰り上げとコントロールの差異は、補文を受け身化した際に見られる (Rosembaum

1967)。seem のような繰り上げ動詞は補文が受動態であっても補文が能動態の場合と意味が変わらないのに対して、try のようなコントロール動詞は補文が受動態の場合と能動態の場合で意味が変わる。この事実は(10)と(11)に示される通りである。

- (10) a. Barnett seemed to have read the book.
b. The book seemed to have been read by Barnett.
(10a)=(10b)

- (11) a. The doctor tried to examine Tilman.
b. Tilman tried to be examined by the doctor.
(11a)≠(11b)

(10)の主文動詞は seem であり、内項に命題をとり、その命題の蓋然性について言及しているだけであるので、補文の命題が能動態であろうと受動態であろうと本質的な意味の差異は生じない。一方、(11)の主文動詞は try であり、try は内項に命題を選択すると同時に、外項に動作主という意味役割を付与するため、補文の命題が受動態になると意味の差が生まれる。こうした補文における能動態と受動態の意味の違いも、繰り上げとコントロールの違いを示す一つの経験的な言語事実である。

繰り上げとコントロールの対立は、補文にイディオム表現がきたときにも見られる。以下の例は the cat is out of the bag (秘密が漏れる) というイディオムを用いた例である。

- (12) a. The cat seemed to be out of the bag. (OK イディオム解釈)
b. ?The cat tried to be out of the bag. (NO イディオム解釈)

繰り上げの(12a)の場合には「秘密が漏れる」というイディオム解釈が維持されるが、コントロールの(12b)の場合にはそのようなイディオム解釈は得られない。この背景には、イディオムはそれを構成する全ての要素がひとまとまりでなければならないという前提がある。イディオム解釈の有無は、繰り上げの場合には要素のひとまとまり性が維持されるが、コントロールの場合は、主文主語は補文主語とは異なる要素なので、これが維持されないということから説明される。これも繰り上げとコントロールを示す一つの経験的な言語事実である。

以上では、「主語の選択制限」「虚辞の出現」「補文動詞の受け身化」「イディオム表現」を観察することで繰り上げとコントロールの違いが反映されている言語事実を確認し

てきた。しかし、一部の動詞では繰り上げとコントロールで曖昧な場合が存在する (Perlmutter 1970)。例えば、アスペクト動詞がその例として挙げられる。以下の例は *begin* を用いたものである。

- (13) a. The street sweeper began to work, once we replaced the spark plugs.
b. The street sweeper began to work, as soon as he got to the park.
- (14) a. It began to rain.
b. Headway began to be made toward a solution.

上記の(13)では、後続の文から(13a)の *street sweeper* がモノ主語であり、(13b)の *street sweeper* が人主語であることがわかる。特に(13b)では、*begin* が「動作主」という意味役割を *street sweeper* に与えており、したがって *begin* は繰り上げとコントロールの間で曖昧であると考えられる。(14)の例は、虚辞や補文動詞の受け身化の例で、この事実からは、*begin* が繰り上げ動詞であることがわかる¹。

繰り上げとコントロールの対立は、日本語にも認められることが既に多くの先行研究によって指摘されている (影山 1993; 岸本 2009; Koizumi 1995; Matsumoto 1996a; Nishigauchi 1993; Shibatani 1973 等)。ここでは複合動詞の「V かける²」(繰り上げ)と「V 忘れる」(コントロール)を例に、英語と同様の繰り上げとコントロールという差異が確認できることを見る。以下の例は、主語の選択制限、補文動詞の受け身化、イディオム表現の例である³。

- (15) a. 雨が降りかけた。
b. *雨が降り忘れた。
- (16) a. ヒロシが先生に叱られかけた。= 先生がヒロシを叱りかけた。
b. ヒロシが先生に叱られ忘れた。≠ 先生がヒロシを叱り忘れた。
- (17) a. ミイラとりがミイラになりかけた。(OK イディオム解釈)
b. ミイラとりがミイラになり忘れた。(NO イディオム解釈)

¹ ただし、Newmeyer (1975) では、*begin* は繰り上げとコントロールで曖昧な動詞ではなく、繰り上げ動詞であると主張されている。

² 起動相のアスペクト「V かける」であり、「～に話しかける」に見られるような方向を表す「V かける」ではない。ちなみに、影山 (1993) では前者が統語的複合動詞で後者が語彙的複合動詞であることが示されている。

³ 虚辞は日本語には存在しないので対象としない。

上記の(15)から(17)の事実から、「V かける」と「V 忘れる」は繰り上げとコントロールで対立しており、英語と並行的な分析が可能であるとされている。また、英語の *begin* と同様に、アスペクト動詞「始める」は繰り上げとコントロールで曖昧である (Shibatani 1973)。

(18) a. 雨が降り始めた。

b. ヒロシが先生に叱られ始めた。= 先生がヒロシを叱り始めた。

c. ミイラとりがミイラになり始めた。(OK イディオム解釈)

(19) ヒロシが本を読み始めたがっている。

上記の(18)の例からは「始める」が繰り上げ動詞であることがわかるが、(19)では、「たい」という人主語を外項に要求する述語に埋め込まれていることから、「始める」がコントロール動詞であることもわかる。

以上、表面上同形であっても、繰り上げとコントロールという統語的派生に違いが見られることを英語のデータを中心に確認してきた。そして、日本語の複合動詞を取り上げ、この繰り上げとコントロールの対立は日本語においても観察されることを示した。

2.4. コントロールに関する先行研究

コントロール研究の主な目的は、空主語が統語的にどの位置に出現可能かという分布の問題と、その空主語がどのような解釈になるか、またその解釈がどのように決定されるかという解釈に関わる問題の二点を明らかにすることである。本節では、コントロールに関する先行研究を概観し、コントロール補文の空主語の分布ならびにその解釈に対する分析を確認する。コントロールの分析は主に英語を中心として発展してきたので、英語を中心的なデータとして分析した先行研究を、生成文法の理論の変遷とともに順を追って整理する。

2.4.1. 変形文法時代の分析

コントロールは生成文法の歴史において、その初期から現在に至るまで多くの言語学者の興味を引いてきた。コントロール研究の萌芽は、既に Chomsky (1965) に見られる。そうした背景の中で、コントロールを主な対象として分析を加えた初期の論考の一つとして、Rosenbaum (1967) を挙げることができる。

Rosenbaum (1967) は、コントロールは同一名詞句削除分析 (Equivalent Noun Phrase Deletion; または Equi NP Deletion) と呼ばれる変形規則によって派生されるとしている。この変形規則は、補文の同一主語を削除するものである。具体的には、以下のような派生の過程をたどる。

(20) the doctor condescended [_S [_{NP} the doctor] examine John]

↓ (Complementizer Insertion)

the doctor condescended [_S for [_{NP} the doctor] to examine John]

↓ (Equi NP Deletion)

the doctor condescended [_S for to examine John]

↓ (Complementizer Deletion)

the doctor condescended [_S to examine John]

(Davis and Dubinsky 2004: 24)

Rosenbaum (1967) は、補文主語をコントロールするコントローラーは、最小距離規則 (Minimal Distance Principle: MDP) によって決定されるとしている。これは、主文の主語に最も距離的に近い名詞句をコントローラーとすることを規定しており、この MDP により、以下の二つのコントローラーが決められる。

(21) a. They_i tempted John_j [Δ_{*ij} to leave early].

b. We_i forced John_j [Δ_{*ij} to ignore his work].

(Rosenbaum 1967: 16)

(21ab)はともに John という補文主語に最も近い要素がコントローラーとなっていることがわかる。しかし、この MDP には promise という例外が存在する。

(22) I promised John [$\Delta_{i/*j}$ to bring the money]

(Rosenbaum 1967: 68)

(22)のように、主文の述語が promise の場合、最も距離的に近い名詞句は主文の目的語 John であるが、実際には、コントローラーは主文の主語 I になる。Rosenbaum (1967) は、これは promise の語彙的な特徴による例外であるとしている。

2.4.2. GB 理論時代の分析

GB 理論の時代に入ると、Rosenbaum (1967) の同一名詞句削除規則は破棄され、代わりに、補文の位置には PRO (pronominal anaphor) という空範疇が存在しているという分析が行われるようになった。この背後には、補文に主文の要素と全く同一の主語が存在すると仮定することによって引き起こされる経験的問題が多かったという事実や、PRO が照応形と代名詞の双方に似た特徴を持つという事実があった。空範疇は [±anaphoric]、[±pronominal] という二つの素性の組み合わせで分類され、PRO は [+anaphoric]、[+pronominal] という素性を持つとされる。そして、PRO は照応的であり代名詞的であるという矛盾した特性を持つ点で、他の空範疇である pro、痕跡、変項 (wh 痕跡) とは区別される (Chomsky 1981, 1982)。

表 1 空範疇の分類

	+pronominal	-pronominal
+anaphoric	PRO	NP 痕跡
-anaphoric	pro	変項 (wh 痕跡)

そして、この空範疇の指示内容は、以下の束縛理論 (binding theory) によって決定される。

(23) 束縛理論

- A 照応形[+a]は、その統率範疇⁴の中で束縛される。
- B 代名詞類[+p]は、その統率範疇の中で自由である。
- C 指示表現[-a, -p]は、自由である。

この束縛理論に基づくと、空範疇 PRO は、[+a, +p]という素性を持っているので、束縛原理 A および B にしたがわなければならない。束縛原理 A は、その統率範疇の中で束縛されなければならないと規定しており、束縛原理 B はその統率範疇内で束縛されてはならないと規定しているので、PRO は相矛盾した条件を満たさなければならないこ

⁴ 統率範疇は以下のように定義される。

(i) α が β の統率範疇であるのは、 α が β と β の統率要素とを含む最小範疇で、 α =NP または S である場合、かつ、その場合に限られる。(Chomsky 1981: 188, 211)

とになる。この矛盾を回避するために、Chomsky (1981) は、PRO は統率範疇内には生じない、すなわち、統率されない位置に生じるとしている。この PRO が統率されない位置にのみ生じるという条件は、束縛理論の帰結として得られるため、これを PRO の定理 (PRO theorem) と呼ぶ (Chomsky 1981: 89-90)。

(24) PRO の定理

PRO は統率されてはならない。

束縛理論における統率子は、N、V、A、P と Agr を持つ Infl であり、統率されない主語位置としては、不定詞節や動名詞節の主語位置が挙げることができる。したがって、PRO は不定詞節や動名詞節の主語位置には生じることができるが、定形節の主語位置や目的語位置には生じることができない (Chomsky 1981)。

(25) a. John tried [PRO to go].

b. [PRO to cross the river] would be dangerous.

c. It is unclear [what [PRO to do]].

(26) a. *John hit PRO.

b. *John is afraid of PRO.

c. *PRO saw Mary.

d. *John said that PRO was innocent.

e. *John believed [PRO to have left].

f. *[For [PRO to win]] would be nice.

(中村・金子・菊池 2001: 125-126)

以上の原理は PRO の分布を決定するものであるが、PRO の解釈はコントロール理論に基づいている。これによると、PRO はそれと一番近い名詞句をコントローラーとする。コントロール理論は以下の(27ab)におけるコントローラーを正確に予測することができる。

(27) a. John_i tried [PRO_i to open the door].

b. John_i persuaded Mary_j [PRO_{*ij} to open the door].

上記の GB 理論の枠組みにおける分析とは対照的に、Williams (1980) はコントロールを叙述 (predication) で捉えている。Williams (1980) の重要な観察は、PRO は常に一番近い名詞句をコントローラーとするわけではないということである。Williams (1980) は、PRO はその指示解釈によって、義務的コントロール (obligatory control: OC) と非義務的コントロール (non obligatory control: NOC) の二つに分類されるとしている。以下の(28)の例が義務的コントロール、(29)が非義務的コントロールの例である。

- (28) a. John_i promised Bill [PRO_i to leave].
 b. John_i persuaded Bill_j [PRO_{*i/j} to leave].
 c. John_i tried [PRO_i to leave].
 d. John_i died [PRO_i waiting for a bus].
- (29) a. [PRO to leave] would be John's pleasure.
 b. [For John to leave] would be my pleasure.
 c. [PRO to leave] would be a pleasure.

(Williams 1980: 208-209)

上記の(28)(29)はどちらも PRO という非顕在的主語が出現しているが、(28)(29)ではその構造的位置と性質が明らかに異なる。Williams (1980) によると、義務的コントロールとは以下の特性を持つもので、非義務的コントロールとはその特性を持たないものとされる (Williams 1980: 209)。

- (30) a. 語彙的NPはPROの位置に現れない。
 b. 先行詞はコントロールされるPROに先行する。
 c. 先行詞はコントロールされるPROをc統御する。
 d. 先行詞は意味役割的または文法的に唯一的に決定される。
 e. 必ず先行詞が存在する。

上記の(30)は的確に(28)と(29)の対立を捉えている。(30)からわかる事実の一つは、義務的コントロールは、必ず PRO をコントロールする先行詞が PRO を c 統御できる範囲に必要なのに対して、非義務的コントロールではそれが必要とされていないということである。つまり、非義務的コントロールは一番近い名詞句をコントローラーとするわけではない。この事実は以下の(31)の例からも示される。

(31) a. John_i told Mary_j that it would be important [PRO_{i/j/arb} to leave early].

b. John_i told Mary_j that it would be appropriate [PRO_{i+j} to leave together].

(Williams 1980: 217-218)

(31a)の PRO の解釈としては、John、Mary、または任意の誰かの三つの可能性がありうる。(31b)の PRO の解釈は、補文の together に示されるように、John と Mary の両方となる。ここでの PRO の解釈は明らかに最も近い名詞句を先行詞としていない。これらの例が示しているのは、コントロールには義務的なものと非義務的なものが存在するということである。

こうした二者の違いを捉えるため、Williams (1980) はコントロールを叙述(predication)で捉え、義務的コントロールには先行詞と PRO を含む文の間に叙述関係が結ばれるのに対して、非義務的コントロールではそのような叙述関係が存在しないとしている。具体的には、以下の(32)に見られるように、PRO を含む文自体が述語の位置に現れ、それと主語が叙述関係によって結ばれる。

(32) John_i promised Bill [PRO to leave]_i.

Williams (1980) の叙述という概念を用いた分析は、Rosenbaum (1967) の最小距離規則(MDP) 同様、PRO の解釈を決定するため、理論において重要な意味を持っている。叙述を用いた補文主語の解釈と先行詞の関係は、叙述関係が局所的でなければならない、すなわち、先行詞と述語（またはその述語を含む別の述語、つまり主文の VP）が相互統御の関係になければならないということから導かれる。

以上、GB 理論の枠組みにおける束縛理論とコントロール理論を用いた分析と、Williams (1980) の叙述分析を概観した。また、こうした分析とは趣が異なるものとしては、Bouchard (1984) が挙げられる。Bouchard (1984) は、コントロールには義務的コントロールと非義務的コントロールという対立があるという Williams (1980) の観察を踏まえて、Chomsky (1981, 1982) の主張に対して、PRO は照応詞的でもあり代名詞的でもあると主張している。Bouchard (1984) によれば、義務的コントロールの PRO は照応的 PRO で、非義務的コントロールの PRO は代名詞的 PRO となる。この分析によれば、PRO の指示解釈は他の空範疇と同様に束縛原理によって決まるため、コントロール理論という装置は特に必要なくなる。

2.4.3. ミニマリストプログラム時代の分析

本節ではミニマリストプログラム時代におけるコントロールの分析を概観する。

2.4.3.1. 格に基づく分析

GB 理論の枠組み内での束縛理論やコントロール理論に基づく PRO の分析は、ミニマリストプログラムの時代になると再考を余儀なくされた。これは、統率という概念が破棄されることによって PRO が統率されてはならないという PRO の定理が成立しなくなったためである。また、PRO は名詞句でありながら音声形式を持っていないので格を持たないと規定されており⁵、例外処理がなされてきた。これは、仮に PRO が格を持つこととなると、格付与子に統率され、PRO の定理に反してしまうからである。

こうした状況の中で、Chomsky and Lasnik (1993)、Chomsky (1995)、Martin (1996, 2001) は、PRO の分布を格から導こうと新たな提案を行った。彼らは、PRO は抽象的なゼロ格 (null case) を持つとすることで、他の名詞句との平行性を捉えた。ただし、顕在的な名詞句はゼロ格を持つことはできない。そして、このゼロ格は非定形節の主要部 Infl によって認可されるとし、PRO はゼロ格のみを持てるのであって、主格、対格、与格等の格を持つことはできないと主張した。こうした分析をとると、以下の(33)および(34)が非文であることが説明できるようになる。

- (33) a. *Kerry attempted Bill to study physics.
b. *Kerry persuaded Sarah Bill to study physics.
c. *It is not easy Bill to study physics.

- (34) a. *Pam believes [PRO solved the problem].
b. *Sarah saw PRO.
c. *Sarah saw [pictures of PRO].

(Martin 2001: 144)

(33)の to 不定詞はゼロ格を付与するが、顕在的な主語 Bill はゼロ格を持つことができないため非文となる。(34)では、PRO が定形節の主格を付与される位置や対格を付与される位置に出現しているが、PRO は主格や対格を持つことができないのでこれらの文は

⁵ 音声形式を持つ名詞句は格を持たなければならないことは、格理論の中心的原理である格フィルター (Case filter) によって定められている。

排除される。

しかし、Martin (2001) は、Chomsky and Lasnik (1993) や Chomsky (1995) の分析では以下の例外的格付与構文や繰り上げ構文における文法性が正しく捉えられないことを指摘している。

- (35) a. Naomi tried [PRO to solve the problem].
b. *Naomi believes [PRO to have solved the problem].
- (36) a. Naomi believes [her to have solved the problem].
b. She seems [to Kim to have solved the problem].

(Martin 2001: 145)

(35ab)では、どちらも to 不定詞を従えているので PRO を認可できるはずだが、例外的格付与構文の(35b)では PRO が認可できない。また、(36)では to 不定詞節に顕在的主語が現れてしまっている。Martin (2001) はこの問題を解決するために、Stowell (1982) の提案にしたがい、例外的格付与構文や繰り上げ構文の to はコントロール補文の to とは異なるとしている。Martin (2001) によると、コントロール補文の to は非現実 (irrealis) イベントや未来といった時制的解釈を持つ。一方、例外的格付与構文や繰り上げ構文の場合の to は常に主文と補文の時間的解釈が一致しなければならないため、時制的解釈を持っていない。したがって、コントロールの場合には to が[+tense, -finite]という素性を持つのに対し、例外的格付与や繰り上げの場合は[-tense, -finite]という素性を持ち、ゼロ格は前者によってのみ認可されると主張した。Martin (2001) は、to 不定詞の時制的特徴を捉えることで、コントロールのゼロ格分析をより精密なものとしたのである。

2.4.3.2. 移動分析

前節のゼロ格を用いた分析は、Hornstein (1999, 2003) によって批判されている。これは、ゼロ格を用いた分析が結局のところ PRO にゼロ格という特別な格を与えただけであり、なぜ PRO のみがゼロ格を持つことができ、なぜ非定形節のみがゼロ格を認可できるのかが原理的に説明できていないためである。

こうしたコントロールのゼロ格分析の問題を鑑みて、Hornstein (1999, 2003) は移動による分析を提案している。Hornstein (1999, 2003)は、Williams (1980) の主張にしたがい、コントロールには義務的なものと非義務的なものがあるとし、義務的コントロールにおける空主語に PRO という非顕在的な要素を仮定するのではなく、空主語は NP 痕跡と

同様に扱うことができ、そこには移動が関与していると主張している。GB 理論の枠組み内では、コントロールを移動と捉えることはできなかったが、これは、項が二重に意味役割を与えられることが θ 規準で禁止されていたためである。コントロール構文では、主文と補文の述語が両方主語に意味役割を与えるため、仮にコントロールを移動として捉えてしまうと、元位置と移動後の位置で二つの意味役割を受け取ってしまうことになる。これは θ 規準の明確な違反である。Hornstein (1999, 2003) はこの θ 規準を破棄し、意味役割は述語によって与えられ、名詞句によって照合されるとし、意味役割は素性の照合であると考えた。Hornstein (1999, 2003) によると、コントロール構文は以下のような派生をたどる。

- (37) a. [VP John leave]
 b. [IP John to [VP ~~John~~ leave]]
 c. [VP John hope [IP ~~John~~ to [VP ~~John~~ leave]]]
 d. [IP John [VP ~~John~~ hope [IP ~~John~~ to [VP ~~John~~ leave]]]]

まず、John が leave と併合し、動詞の θ 役割を照合する。そして John は補文の[Spec, IP]位置に IP の D 素性を照合するために移動する。しかし、この位置は格が付与される位置ではないので、John の格はここでは付与されない。John は再び[Spec, VP]に移動し hope の外的 θ 素性を照合する。この時点で John は leaver と hopper という二つの意味役割を持つことになる。そして、再び John は[Spec, IP]の位置に移動し、ここで IP の D 素性を照合し、主格を付与される (Hornstein 1999: 79-80)。したがって、Hornstein (1999, 2003) の分析ではコントロールは移動と同様に捉えられることになる。ただし、NP が θ' 位置に移動する seem のような繰り上げ述語とは、NP の移動先が θ 位置であるという点で異なる。これは以下の(38)に示される通りである。

(38) a. John seems to leave.

[_{IP} John [_{VP} (John) seem [_{IP} (John) to [_{VP} (John) leave]]]].

↑

θ

b. John hopes to leave.

[_{IP} John [_{VP} (John) hope [_{IP} (John) to [_{VP} (John) leave]]]].

↑

↑

θ

θ

こうした移動分析をとることによって、コントロールの空主語を NP 痕跡と同様のものと捉えることができるようになり、PRO という特殊な空範疇を立てる必要がなくなる。また、GB 理論ではコントローラーの決定のために、コントロール理論というモジュールを立てていたが、これも A 移動の局所性によって説明できるようになるため、説明装置が一つ減ることになり望ましい。

しかし、最近の研究ではこのようなコントロールの移動分析はいくつかの観点から問題点が指摘されており、やはり、コントロールと繰り上げは別物として考えるべきであると批判されている (Bobaljik and Landau 2009; Culicover and Jackendoff 2001, 2006; Jackendoff and Culicover 2003; Landau 2003 等)。本研究でも、日本語のコントロール現象を全て移動分析で捉えるのは難しいと考える。

2.4.3.3. 一致分析

Landau (2004, 2006) は、PRO は通言語的に存在しており、繰り上げとコントロールは根本的に異なったものであると主張している。Landau (2004, 2006) は、PRO が存在する証拠の一つとして、言語によっては空範疇の PRO が格付与されていると考えなければ捉えられない経験的な言語事実があることを挙げている (Cecchetto and Oniga 2004; Landau 2003, 2004, 2006, 2013; Sigurðsson 1991 等)。これは、格一致 (case concord) という現象をもつ言語によって確かめることができる。格一致は同一節内で起こらなければならない、述語、強勢代名詞、再帰代名詞、遊離数量詞、数詞などが格によって屈折することを用いて、PRO が通常の格を持ちうることを示すことができる。

(39) a. ロシア語

Ona poprosila ego ne ezdit' tuda odnomu zavtra.
she.NOM asked him.ACC not to-go there alone.DAT tomorrow
'She asked him not to go there alone tomorrow'

b. アイスランド語

Ólaf hafði ekki gaman af að vanta einan í veisluna.
Olaf.NOM had not pleasure of to lack alone.ACC to party.the
'Olaf didn't find it pleasurable to be absent alone from the party'

(Landau 2013: 74)

ロシア語では、コントローラーである *ego* (*him*) は対格標示されているが、補文の二次述部として働く *odnomu* (*alone*) は与格標示されている。アイスランド語では *Ólaf* は主格標示されているが、補文の一次述語 *einan* (*alone*) は対格標示されている。これらの格がそれぞれ独立しているという事実は、補文の *PRO* に格が与えられている証拠となる。

こうした言語事実を基に、Landau (2004, 2006) は、*PRO* は格を持つという立場に立つが、ゼロ格分析とは異なり、*PRO* の分布は補文の *INFL* と *COMP* の主要部にある時制素性[T]と一致素性[Agr]の照合から導かれるとしている⁶。ここでの T 素性は意味的な時制のことを指している。[+T]であれば、これは意味的な時制があることを示し、[-T]であれば意味的な時制が存在しない（または照応的 (*anaphoric*) である）ということを示す。この時制の有無は主文と補文の時間のミスマッチの可否によって決められる。

(40) a. *Yesterday, John managed to visit Bob tomorrow.

b. Yesterday, John preferred to visit Bob tomorrow.

(Landau 2006: 160)

(40a)では、主文と補文で *yesterday* と *tomorrow* が出現するという時制のミスマッチが許されないが、(40b)ではこれが許される。これらは明らかに主文動詞の *manage* と *prefer* の違いに起因するものである。選択関係は局所的なものであるから、主文の述語と補文の時制の選択は CP の主要部である C を介して行われ、C が[T]素性を持つ I を主要部と

⁶ Landau (2004, 2006) のシステムは、Chomsky (2000, 2001) の統語的一致操作 (Agree) に基づいている。

する IP を選択する。IP 主要部の T は、選択的(selected)な場合と自由(free or independent)な場合がある。自由な場合は、補文の主要部 C は T 素性を持っていない。時制が選択的な場合は、照応時制(anaphoric tense)と依存時制(dependent tense)にさらに分けられる。照応時制とは主文の時制と補文の時制が一致していなければならないものであり、依存時制とは主文の時制に依存していなければならないが、必ずしも一致している必要はないものである。主文述語と Infl および Comp の T 素性の関係は以下のようにまとめられる。

(41) Specifying [T] on embedded I⁰/C⁰

- a. anaphoric tense ⇒ [-T] on I⁰/C⁰
- b. dependent tense ⇒ [+T] on I⁰/C⁰
- c. independent tense ⇒ [+T] on I⁰, ∅ on C⁰

(Landau 2004: 839)

そして、主文述語と C および I の選択・照合関係は以下のようにまとめられる。

(42) The syntax of selected tense

V ... [CP C_[±T] [IP I_[±T] VP]]

selection checking

[T] is interpretable on I⁰

[T] is uninterpretable on C⁰

(Landau 2004: 839)

一方、[Agr]とは、伝統的な分析と同様に、統語的な一致のことを指している。述語が屈折変化しない非定形補文の場合には[-Agr]となり、定形補文の場合には[+Agr]となり、これはInflに組み込まれている素性である。さらに、Landau (2004) は、主要部Cの[Agr]素性は補文時制に依存しており、補文が依存時制の場合には[+Agr]または[Agr]に関しては未指定という指定を持つ一方で、補文が照応時制および独立時制の場合には主要部Cの[Agr]は未指定であると仮定している。

Landau (2004, 2006) は、こうした補文の[T]素性および[Agr]素性は補文の主語の指示的素性(referential feature=R)とも照合関係が存在するとしている。語彙的主語およびproとPROの間には指示関係において違いがあることを前提に、前者には[+R]素性、後

者には[-R]素性があるとしており、これと以下のR-付与規則 (R-assignment rule) を用いて、補文の[T]と[Agr]との対応関係を規定している。

(43) R 付与規則 (R-assignment rule)

- For $X^0_{[\alpha T, \beta Agr]} \in \{I^0, C^0, \dots\}$:
- a. $\phi \rightarrow [+R]/X^0 __$, if $\alpha=\beta= '+'$
 - b. $\phi \rightarrow [-R]/\text{elsewhere}$

このルールは、Infl と Comp が[+T, +Agr]の指定を持つときは、[+R]が与えられ、それ以外の組み合わせ、すなわち[+T, -Agr]/[-T, +Agr]/[-T, -Agr]の場合には[-R]が与えられるということを規定している。Infl と Comp が[+T, +Agr]を持つときは[+R]が与えられるので、語彙的主語または pro と照合する。Infl と Comp が[-T]および[-Agr]で指定される場合はPRO と照合することになる。

Landau (2004, 2006) のこうした一致のメカニズムで最も重要な主張は、コントロールは[T]および[Agr]のどちらかが欠けた時に得られるということである。これは定形補文でも[-T]であればコントロール構文になりうることを示唆しており、実際にバルカン諸語ではこのような現象が見られることを観察している。バルカン諸語は、一部のイディオム的な表現を除いて非定形補文を持っておらず、その代わりに仮定法補文(subjunctive clause)が用いられる。仮定法補文の補文述語は、形態的には直接法補文(indicative clause)の述語と同様に屈折しており、定形節である。バルカン諸語の仮定法補文はコントロール仮定法補文(C(ontrolled)-subjunctive)と自由仮定法補文(F(ree)-subjunctive)に分けられ、前者はコントロールの特徴を示すのに対し、後者はコントロールの特徴を示さず、非コントロールであると考えられる。

(44) a. コントロール仮定法補文 (C-subjunctive) : コントロール性あり⁷

- I Maria_i prospathise [$\Delta_i/*_j$ na divasi]. (ギリシア語)
 the Mary tried.3sg PRT read.3sg
 ‘Mary tried to read.’

⁷ 補文内の PRT は仮定法補文であることを標示する special particle であるとされる。

- b. 自由仮定法補文(F-subjunctive) : コントロール性なし

o Yanis_i elpizi [Δ_{ij} na figi]. (ギリシア語)

the John hopes.3sg PRT wins.3sg

‘John_i hopes that he_{ij} will win.’

(Landau 2004: 826-827)

そして、このコントロール対非コントロールの対立は、補文時制の有無と並行的であることがわかる。すなわち、前者の補文は[-T]素性を持つのにに対し、後者の補文は[+T]素性を持つ。これは、以下の(45)の例から確かめられる。

- (45) a. コントロール仮定法補文 (C-subjunctive)

***tora**, o Yanis kseri/arxizi [Δ na kolimbai **avrio**].

now the John knows-how/begins PRT swim.3sg **tomorrow**

‘Now, John knows how/begins to swim tomorrow.’

- b. 自由仮定法補文 (F-subjunctive)

tora, o Yanis elpizi/theli [Δ na figi **avrio**].

now the John hopes/wants PRT leave.3sg **tomorrow**

‘Now, John hopes/wants to leave tomorrow.’

(Landau 2004: 831)

(45a)のコントロール仮定法補文では、主文の **tora (now)** と補文の **avrio (tomorrow)** という異なった時間が指定できないが、自由仮定法補文ではそれが可能である。これはコントロール仮定法補文が自らの時制領域を持たないのに対して、自由仮定法補文がこれを持つということを示している。Landau (2004, 2006) の分析はこうした定形補文コントロールを適切に捉えることができる。コントロール仮定法補文は[-T, +Agr]なので[-R]素性を持つ PRO と照合し、自由仮定法補文は[+T, +Agr]なので、[+R]素性を持つ語彙的主語または pro と照合する。

2.4.4. 節のまとめ

コントロールは生成文法の初期の段階から多くの研究者の興味を引いてきた。コントロールに関する包括的な分析は Rosenbaum (1967) の同一名詞句削除分析から始まり、GB 理論時代には、束縛理論とコントロール理論による PRO を用いた分析がなされた。

そして、ミニマリストプログラム時代になるとゼロ格を用いた分析 (Chomsky and Lasnik 1993; Chomsky 1995; Martin 1996, 2001) が行われるようになった。生成文法においては、コントロールは PRO を用いた分析が主流になっているが、これを PRO ではなく NP 痕跡と同様に捉えて、移動に還元した移動分析 (Hornstein 1999, 2003) も存在する。また、通言語的に定形補文コントロールが見られることから、T と Agr に基づいた一致分析 (Landau 2004, 2006) も提出されている。これらは全て、コントロールの空主語の分布とその解釈を正確に捉えることを目的とし、それを様々な角度から扱ってきたものである。

2.5. 日本語におけるコントロールと問題の所在

本節では、日本語におけるコントロールの統語的環境を確認し、コントロールと非コントロールの対立を明確にする。

2.5.1. 日本語におけるコントロールの統語的環境

前節では英語のデータを中心にコントロールに関する分析や提案を概観してきたが、本節では、日本語のコントロールに関わる現象を見ることで、日本語が英語のコントロールの分析では捉えにくい問題をはらんでいることを示す。

英語でコントロールが認められるのは補文述語の屈折が見られない非定形補文に限られる。こうした非定形補文に対応する日本語のコントロールとしては、以下の(46)で挙げられるような統語的複合動詞の動詞連用形節が挙げられる。

- (46) a. ランナー_iが[$\Delta_{i/*j}$ 走り]終えた。
b. ランナー_iが[$\Delta_{i/*j}$ ゼッケンを付け]直した。

こうした例は、補文述語が連用形であり時制の形態が出現していないので、英語の非定形補文と似た統語的環境であると言える。実際に、(46)に見られるように、補文主語の解釈は必ず主文主語の解釈と一致していなければならない、コントロールが関わっていると考えられる。

こうした統語的複合動詞の場合のコントロールとは別に、日本語にはコントロールが認められる定形節と考えられる補文がある。例えばコト節補文がその例として挙げられる。

- (47) a. ランナー_iは[Δ_{ij} 最後まで走りきること]を試みた。
 b. ランナー_iは[Δ_{ij} 最後まで走りきること]を決心した。

これらのコト節補文では時制の形態素「る」が出現しており、これは統語的複合動詞の場合とは異なり定形節に近い性質を持つと考えられる。しかし、(47)の例から明らかに、この場合においてもコントロールが認められる。

また、こうしたコントロールは、補文だけではなく、補部にイベント名詞句が選択された場合にも認められる。

- (48) a. 犯人_iは[Δ_{ij} 牢獄からの脱出]を試みた。
 b. 犯人_iは[Δ_{ij} 牢獄からの脱出]を決心した。

特に、コト節補文の場合とイベント名詞句補部の場合は、統語的複合動詞の場合と比べその生産性が高く、また、ほとんど全てのコントロール述語がその両方の形式を選択することができる。

2.5.2. コントロール対非コントロール

前節では、コントロールの統語的環境、すなわち、統語的複合動詞の動詞連用形節補文、コト節補文、イベント名詞句補部を挙げた。本節では、非定形節と考えられる連用形節補文と補文ではないイベント名詞句補部を一旦横におき、コト節補文を観察してみる。そうすると、形式は同じでも主文述語によってコントロールと考えられるものと考えられないものが存在することがわかる。

- (49) a. ヒロシ_iは[Δ_{ij} 牢獄から脱獄すること]を試みた。
 b. ヒロシ_iは[Δ_{ij} 牢獄から脱獄すること]を望んでいる。

(49a)では補文主語は必ず主文主語と一致しなければならないが、(49b)では補文主語が主文主語ではない談話上の誰かを指していても構わない。Fujii (2006) は、英語の義務的コントロールと非義務的コントロールを区別するテストを用いて、コト節のコントロールと非コントロールの対立を明確に示している。以下では Fujii (2006) の議論に基づいて、コントロールと非コントロールを確認するテストを確認する。

第一点目は、空主語が長距離の先行詞と同一の解釈になることができるか、という点

である。コントロール述語であれば、補文の空主語の解釈が二つの節境界を越える位置にある先行詞と一致することはない。一方、非コントロール述語であればそれが可能である。言い換えると、コントロール述語の場合には、空主語が長距離の先行詞の解釈と一致することはできないが、非コントロール述語の場合には長距離の先行詞と解釈が一致しても問題ない、ということである。

- (50) a. 監督は[彼らに[Δ お互いを批判し合うこと]を決心して]欲しかった。
b. *彼らは[監督に[Δ お互いを批判し合うこと]を決心して]欲しかった。
- (51) a. 監督は[彼らに[Δ お互いを批判し合うこと]を想像して]欲しかった。
b. 彼らは[監督に[Δ お互いを批判し合うこと]を想像して]欲しかった。
- (52) a. 夫は[妻に[Δ 自宅で出産すること]を決心して]欲しかった。
b. *妻は[夫に[Δ 自宅で出産すること]を決心して]欲しかった。
- (53) a. 夫は[妻に[Δ 自宅で出産すること]を想像して]欲しかった。
b. 妻は[夫に[Δ 自宅で出産すること]を想像して]欲しかった。

(50)(51)は「お互いを V 合う」という構文が補文に出現しており、この場合の主語は複数主語でなければならない。そのため、コントロール述語であれば、「彼ら」という複数主語が節境界を一つだけ越えた位置にななければならない。「決心する」を用いた(50ab)の対立は、当該の述語がコントロール述語であることを示しているが、(51)の「想像する」の場合にはそれがコントロール述語ではないことを示している。またこのような対立は、(52)(53)のように「出産する」という述語を用いた場合にも確認することができる。以下の(54)に見られるように、「出産する」の主語には語彙的に[+女性]の指定を持つ述語がこななければならない。

- (54) a. *夫が出産した。
b. 妻が出産した。

この事実に基づいて(52)と(53)の対立を確認すると、(52b)の場合は「妻」が節境界を二つ越えた位置にあるので非文になる一方、(53b)では「妻」が節境界を二つ越えた位置にあっても問題ない。したがって、「決心する」と「想像する」では、コントロールと非コントロールで対立が見られることがわかる。

第二点目は、先行詞と空主語の間の c 統御関係に関するものである。コントロール述

語の場合、先行詞は空主語を c 統御していなければならないが、非コントロール述語の場合にはそのような制約は存在しない。

- (55) a. *[彼らの監督]は[Δ お互いを批判し合うこと]を決心した。
b. [彼らの監督]は[Δ お互いを批判し合うこと]を想像している。
- (56) a. *[私の妻の父親]は[Δ 自宅で出産すること]を決心した。
b. [私の妻の父親]は[Δ 自宅で出産すること]を想像している。

(55)(56)では、先行詞が名詞句内に埋め込まれているので、当該の先行詞は補文の空主語を c 統御することができない。そのような環境下で(55ab)(56ab)での対立を見ると、「決心する」と「想像する」がコントロールと非コントロールで対立をなしていることがわかる。

第三点目は、VP 削除の環境下での空主語の解釈である。コントロール述語と非コントロール述語の対立は、VP 削除の環境でも観察できる。コントロール述語の場合の補文の空主語のコントローラーは必ず局所的でなければならない、先行文の先行詞はコントローラーになることはできない。

- (57) a. ヒロシ_iは[Δ_i 自分のペースで仕事を続けること]を決心したし、部長_jも [~~Δ_{i/j} 自分のペースで仕事を続けること~~]を決心した だ。
- b. ヒロシ_iは[Δ_i 自分のペースで仕事を続けること]を想像したし、部長_jも [~~Δ_{i/j} 自分のペースで仕事を続けること~~]を想像した だ。

したがって、ここでも「決心する」と「想像する」が、コントロールと非コントロールで対立していることがわかる。

第四点目は、束縛変項 (bound variable) に関するものである。義務的コントロールの特徴の一つは、空主語が束縛変項として捉えられるということである。非コントロールでは、束縛変項である場合とそうでない場合が可能であり、束縛変項読み (bound variable reading) が可能であると同時に、厳密照応読み (strict reading) も可能である。これを確かめるために、(58)のような文脈下での(59)の例文を考えてみよう (Landau 2013: 30)。

- (58) a. Peter claimed that he (Peter) won, Jane claimed that she (Jane) won and Roy claimed that he (Roy) won.
 b. Peter, Jane and Roy claimed that Peter won the game.
- (59) a. Only Peter_i claimed [Δ_i to be the winner].
 b. Only Peter_i claimed [that he_i was the winner].
- (60) a. Bound variable reading: Peter = Only x [x claimed x is the winner]
 b. Strict reading : Peter = Only x [x claimed Peter is the winner]

(58)の二つの文脈は(59ab)に対して異なった真偽値を与える。(59a)は(58a)の文脈では偽であるが、(58b)の文脈では真である。一方、(59b)は曖昧である。束縛変項読みであれば(59a)と同様に(58a)の文脈では偽、(58b)の文脈では真となるが、厳密照応読みであれば、(58a)の文脈では真、(58b)の文脈では偽となる。この二つの読みの可能性は(60ab)に示されている通りである。

これを日本語にも当てはめて考えてみると、以下のようなになる。まず、以下の「約束する」と「話す」のミニマルペアを見られたい。

- (61) a. ヨウコ_iだけが社長と[Δ_i 大阪に行くこと]を約束した。
 b. ヨウコ_iだけが社長と[Δ_i 大阪に行くこと]を話した。

(Fujii 2006: 45-46)

(61a)は束縛変項読みしかできないのに対し、(61b)は束縛変項読みに加え厳密照応読みも可能であり曖昧である。それぞれに以下の文脈を設定すると、それぞれの真偽値が異なることがわかる。

- (62) a. ヨウコとヒロシとカオリのそれぞれが自分が大阪に行くということを約束した。
 b. ヨウコとヒロシとカオリがヨウコが大阪に行くということを約束した。
- (63) a. ヨウコとヒロシとカオリのそれぞれが自分が大阪に行くことを話した。
 b. ヨウコとヒロシとカオリがヨウコが大阪に行くことを話した。

(61a)の「ヨウコだけが社長と大阪に行くことを約束した」の場合、(62a)の状況であれ

ば偽となり、(62b)の状況であれば真となる。(61b)の場合は、(63ab)のどちらの状況でも真となりうる。したがって、この対立からも形式的には同じコト節補文を選択する場合にコントロールと非コントロールに分けられることがわかる。

第五点目は、事象関与 (de-re) 読みと自省 (de-se) 読みによるものである。義務的コントロールは非コントロールと異なり、自省読みしか許さないとされている (Chierchia 1990; Higginbotham 1992; Hornstein 1999, 2003; Landau 2000 等)。事象関与読みとは、意識的であるかないかにかかわらないある対象に当てはまる信念のことで、自省読みとは自己認識的な信念のことである。例えば、太郎が、退職する人物を自分とは知らずに選んだという状況であるとして、以下の(64)の例を見られたい。

(64) a. 太郎_iが[Δ_i 退職すること]を想像した。

b. #太郎_iが[Δ_i 退職すること]を決心した。

(Fujii 2006: 48)

(64a)は事象関与読みも自省読みも可能で、事象関与読みであれば設定された状況下でも問題無いのに対し、(64b)は自省読みしかできないので、この状況下では不自然である。これは、(64b)であれば、補文イベントの動作主が自分であると認識していなければならないためである。

以上、コト節のみを対象に、同じ形式であってもコントロールと非コントロールの対立が見られることを見たが、イベント名詞句でも同様のことが観察できる。

(65) 長距離の先行詞

a. 彼らは[監督に[Δ お互いのチームメイトの批判]を{*決心して/想像して}]欲しかった。

b. 妻は[夫に[Δ 自宅での出産]を{*決心して/想像して}]欲しかった。

(66) c 統御

a. [彼らの監督]は[Δ お互いのチームメイトの批判]を{*決心した/想像している}。

b. [娘の夫]は[Δ 自宅での出産]を{*決心した/想像している}。

(67) 削除

- a. ヒロシは[Δ 自分のペースでの仕事の継続]を決心したし、カオリもだ。
→後続文の仕事の継続の主語は「カオリ」
- b. ヒロシは[Δ 自分のペースでの仕事の継続]を想像したし、カオリもだ。
→後続文の仕事の継続の主語は「ヒロシ」または「カオリ」

(68) 束縛変項読み

- a. ヒロシだけが部長と[Δ 大阪への出張]を約束した。
(OK 束縛変項読み/ NO 厳密照応読み)
- b. ヒロシだけが部長と[Δ 大阪への出張]を話した。
(OK 束縛変項読み/ OK 厳密照応読み)

(69) 自省 (de-se) 読み

- a. ヒロシは[Δ 退職]を決心した。
(NO 事象関与 (de-re) 読み/ OK 自省 (de-se) 読み)
- b. ヒロシは[Δ 退職]を想像した。
(OK 事象関与 (de-re) 読み/ OK 自省 (de-se) 読み)

以上、長距離の先行詞、c 統御、VP 削除、束縛変項、自省読みを見ることで、日本語のコト節およびイベント名詞句補部は、形式は同じであっても主文述語によってコントロールと非コントロールに分類できることがわかった。

2.5.3. 節のまとめ

日本語は、非定形節・定形節の両方、そしてイベント名詞句にコントロール現象が観察されることを見てきた。こうした事実は、非定形節に限られるとされてきた英語のコントロール分析が日本語にはそのまま適応しにくいことを示している。

また、日本語の場合は、定形節補文またはイベント名詞句補部の場合に、コントロール現象が観察される場合とされない場合があり、同形でコントロールと非コントロールの差異が見られることも確認した。これは明らかに、コントロール現象に関して主文述語の意味が関与していることを示している。英語を中心としたコントロールの分析では、補文における定形・非定形の対立が重要で、主文述語の意味が重視されることはなかったが、日本語においては、主文述語の意味的特徴とコントロール現象との間の関係を捉える必要がある。

2.6. まとめ

生成文法の主たる目的は、言語形式の背景にある心内のメカニズムを明らかにすることにある。そのような目的の中で重視されるのが、「目には見えない違い」である。コントロールは同形意義文の繰り上げとの構造的対立、また、補文の空主語の解釈を扱うという点において、生成文法の初期から注目を浴びてきた。本章では、生成文法の初期の段階から、最新のミニマリスト・プログラムに至るまで、コントロールがどのように分析されてきたのかを概観し、同時に日本語のコントロールの環境を示した。

最後に、本章の先行研究のまとめから得られるコントロールに関する基本的な知見と、日本語に観察されるコントロール現象に対して言及を加えたい。

コントロールには、通言語的に、構造関係・主文述語の意味的特性・補文形式など様々な要因が複雑に絡み合っていることが明らかにされている。コントロールの分析は英語のデータを中心に分析が展開され、その分析の方法は理論の変遷とともに変化してきた。しかし、記述的な事実として変わらない事実は、コントロールはイベントが二つ以上認められるときに現れる問題であり、定形・非定形、時制の有無、主文述語の意味などがコントロールにおいて重要な役割を果たすとされてきたということである。英語においては定形・非定形の差異が重要で、主文述語の意味に焦点が当たることが少ないが、通言語的な視点に立てば、補文形式が同じでありながらコントロールと非コントロールで対立が見られることがあるので、主文述語の意味は明らかにコントロールに関与している (Landau 2013; Stiebels 2007)。

英語から日本語のコントロールに目を転じてみると、少なくとも動詞連用形節補文という環境、コト節補文という環境、そしてイベント名詞句補部という構造的環境がコントロールと関係していることがわかる。既に述べたように、英語を中心とした分析では、コントロールは非定形節に限られるもので、日本語の定形節の特徴を持つコト節補文はコントロール現象の射程には入らない。しかし、コト節補文にも英語のコントロールと並行的な事実が観察されることは事実であるので、この事実に関して、どのような分析が可能であるかを考察する必要がある。

また、日本語のコントロール現象を扱うにあたっては、補文形式選択も興味深い問題となる。例えば、動詞連用形節補文においては、それを選択することができる述語は限られているが、コト節補文とイベント名詞句補部においてはそのような制限はない。こうした問題には、主文述語の意味が深く関わっていると考えられる。言い換えると、コントロールの環境の一つである連用形節選択の問題にも主文述語の意味が関与しているということになる。日本語のコントロールも英語同様、古典的な分析である Nakau

(1973)をはじめとして、様々な論考においてその統語的環境が明らかにされてきたが、その多くは、動詞連用形節、コト節、イベント名詞句を独立させて扱ってきた。また、コントロールを決定づける要因である主節の述語の意味とコントロールとの間の関係に関してはほとんど言及がされてこなかったと言ってよい。

本研究では、こうした状況を踏まえ、主文述語の意味に着目しながらコントロール現象を観察し、コントロールと述語の意味の関係、補文形式の選択と述語の意味の関係、そしてコントロールを生み出す統語的メカニズムを解明していく。

第3章 コト節補文におけるコントロール

3.1. はじめに

本章では、日本語のコト節補文におけるコントロール現象について考察を加えていく。具体的な日本語の例に入る前に、まず、以下に挙げられる英語の不定詞補文の例を見たい。なお、補文内の Δ は補文の空主語の標示として用いている。

- (1) a. John_i tried [$\Delta_{i/*j}$ to open the door].
- b. John_i persuaded Mary_j [$\Delta_{*i/j/*k}$ to open the door].

上記の(1)では、補文に見られる空主語と主文主語または目的語の間に意味解釈上の一致が観察される。そして、そういった空主語と主文の先行詞との一致関係が観察される環境は、基本的に補文述語が屈折していない非定形節に限られるとされている。

日本語においても、補文述語に明示的な時制形態が出てこない場合を、補文の空主語と主文要素の間に一致が見られる環境の典型例として挙げることができる。

- (2) a. ヒロシは[$\Delta_{i/*j}$ 本を読み]続けている。
- b. ヒロシは[$\Delta_{i/*j}$ 部屋の鍵をかけ]忘れた。

(2)の補文述語は動詞連用形であり、それに直接主文動詞が後接している複合動詞の例である。そして、この場合、補文の空主語の解釈は主文主語の「ヒロシ」でなければならない。こうした動詞連用形節補文は、英語の非定形節と共通点が多いと考えられ、このような環境下で主文の先行詞と補文の空主語の解釈が一致することは、伝統的にコントロールと呼ばれる。

しかし、日本語は英語とは異なり、補文述語に明示的な時制形態が出現していても、コントロールと並行的なイベントが観察される場合が存在する。例えば、以下の(3)では「登る」や「受験する」といった述語に「こと」という形式名詞が後節することで補文を形成するような例である。

- (3) a. ヒロシ_iは[Δ_{ij} 富士山に登ること]を試みた。
 b. ヒロシ_iは[Δ_{ij} 筑波大学を受験すること]を想像している。

(3a)では「試みる」という述語がコト節を選択しており、(3b)では「想像する」という述語がコト節を選択している。そしてこれらの補文の空主語の解釈は、(3a)が主文の主語「ヒロシ」と一致していなければならない一方で、(3b)ではヒロシ以外の誰かを指しているとも構わない。これは、「出産する」という述語および「お互い」という相互代名詞を用いた例で確認することができる¹。

- (4) a. 監督は[彼らに[Δ 思い切ってお互いを批判し合うこと]を試みて]欲しかった。
 b. *彼らは[監督に[Δ 思い切ってお互いを批判し合うこと]を試みて]欲しかった。
 (5) a. 監督は[彼らに[Δ 思い切ってお互いを批判し合うこと]を想像して]欲しかった。
 b. 彼らは[監督に[Δ 思い切ってお互いを批判し合うこと]を想像して]欲しかった。
 (6) a. 夫は[妻に[Δ 自宅で出産することを]を試みて]欲しかった。
 b. *妻は[夫に[Δ 自宅で出産することを]を試みて]欲しかった。
 (7) a. 夫は[妻に[Δ 自宅で出産することを]を想像して]欲しかった。
 b. 妻は[夫に[Δ 自宅で出産することを]を想像して]欲しかった。

したがって、(4)(5)の例から明らかなように、「試みる」の場合は補文の空主語が主文の先行詞と一致していなければならないことがわかるが、(6)(7)の例からは、「想像する」が、そうした一致を求めないことがわかる。

そして、コト節補文を選択する「試みる」は、主文主語に選択制限を課すことや、補文のコト節に対格を付与することから繰り上げタイプではなくコントロールタイプである²。

上記の事実から、コト節補文には英語の非定形節補文におけるコントロールと似た現象が観察されることがわかるが、コト節補文におけるコントロールは、従来英語でコン

¹ 本章では、基本的に補文主語と先行詞の距離を問題とするテストのみを扱い、その他のテストに関しては割愛するが、距離を問題とするテスト以外のものでも、コントロール・非コントロールの対立が明確に出ることを付記しておく。コントロールと非コントロールを分類するテストの詳細に関しては第2章を参照されたい。

² 繰り上げとコントロールの間の対立に関する議論は第2章を参照されたい。

トロール構文と呼ばれてきたものとは若干性質が異なる。そこで、第一章で既に指摘したように、本研究では、以下の Stiebels (2007) の定義にしたがい、英語のコントロールと日本語のコト節補文におけるコントロールを並行的に扱うことにする。

(8) Definition of obligatory control (OC)

OC applies to structures in which a predicate P_1 selects an SOA-argument and requires one of its (individual) arguments to be (improperly) included in the set of referents of an argument of the embedded predicate P_2 heading the SOA-argument³.

$[X_i P_1 (Y_j) [Z_k P_2 \dots]_{\text{SOA}}]$ with $k \cap \{i, j\} \neq \emptyset$

(Stiebels 2007: 13)

以下、上記の(8)を満たすものを「コントロール現象」と呼ぶ⁴。そして、コト節補文を分析の対象として、その環境に見られるコントロール現象に対して、記述と理論の双方の観点から分析を試みる。具体的には、コントロールの生じる環境、そのメカニズムについて考察する。

3.2. 先行研究でのコントロール現象に関する記述

コト節補文を選択する述語を対象とし、それをコントロール現象の観点から分析した論考は多数存在する(井上 1976; Fujii 2006; Hasegawa 1984/85; Nakau 1973; Uchibori 2000; 王 2011 等)。本節では、その中でも、網羅的にコト節補文を分析した Fujii (2006) の記述的観察に焦点を当てて、コト節補文におけるコントロール現象に関する Fujii (2006) の重要な指摘を概観する。

3.2.1. Fujii (2006) の記述的一般化

Fujii (2006) は、コントロール現象と補文時制の間に有意な関係が観察されるとしている。Fujii (2006) での記述的一般化を要約すると以下のような。

- (9) ある文がコントロール性を生じるのであれば、補文の述語はルカタで固定されている⁵。

³ SOA は state of affairs の略。また、Stiebels (2007) では義務的コントロール (obligatory control) の定義となっているが、本研究でのコントロールに対応するものと考えて問題ない。

⁴ 以下、コントロール現象が観察される文や主文述語に見られる「主文要素と補文主語一致の性質」を指して「コントロール性」という用語を用いることがある。

⁵ Fujii (2006) はこれを「時制交替の一般化 (Tense alternation generalization)」と呼んでいる。Fujii

上記の(9)の一般化は、補文述語の時制に関わる形態に注目した一般化である⁶。つまり、あるコト節補文を選択する複文において、コントロール現象が観察されるのであれば、コト節補文に現れる補文述語の時制の形態はルかタのどちらかで固定されているということである。これは以下のような記述的観察に基づいている。

まず、主文述語が「想像する」の場合である。当該の述語が非コントロール述語であることは、(10)の事実からわかる。

- (10) a. 父親は[娘が[Δ 出産することを]想像した]と思った。
b. 娘は[父親が[Δ 出産することを]想像した]と思った。
c. 監督は[彼らが[Δ お互いを殴り合うこと]を想像した]と思った。
d. 彼らは[監督が[Δ お互いを殴り合うこと]を想像した]と思った。

(10b)では Δ の最も近くにある先行詞は「父親」であり、これは補文述語「出産する」の主語になれない。しかし、(10b)の文は容認可能である。この事実は Δ が二つ上の節の「娘」を先行詞としてとることができるということを示している。これはすなわち長距離の先行詞をとることが可能であるということであり、この場合にはコントロール現象が観察されないということを意味している。これと同様のことが(10d)からも分かる。(10d)では補文に「お互い」という複数主語を先行詞に要求する相互代名詞が現れているが、一番近い先行詞は「監督」という単数主語である。それにもかかわらず(10d)が容認可能であるという事実は、ここでも Δ の解釈に対する長距離の先行詞が認められるということである。上記の事実から、「想像する」がコントロール述語ではないことがわかる。

次に、(11)の「決心する」を用いた例と、(12)の「後悔する」を用いた例を見てみよう。

(2006) の記述では、現在時制形態 (present tense form) と過去時制形態 (past tense form) の交替となっているが、本研究では、これらを「ル」と「タ」で代表させる。これは、Fujii (2006) とほぼ同様の主張を展開している藤井 (2016) の記述に基づいたものである。ここでの「ル」「タ」は述語における非過去・過去の時制形態を指すこととする。Fujii (2006) の時制交替の一般化の理論的な説明を含めた詳細については、理論的含意の節を参照されたい。

⁶ 既に Nakau (1973) でも同様の事実が示唆されている。

- (11) a. 父親は[娘が[Δ 出産することを]決心した]と思っている。
 b. *娘は[父親が[Δ 出産することを]決心した]と思っている。
 c. 監督は[彼らが[Δ お互いを殴り合うこと]を決心した]と思っている。
 d. *彼らは[監督が[Δ お互いを殴り合うこと]を決心した]と思っている。
- (12) a. 父親は[娘が[Δ 出産することを]後悔している]と思っている。
 b. *娘は[父親が[Δ 出産したことを]後悔している]と思っている。
 c. 監督は[彼らが[Δ お互いを殴り合ったこと]を後悔している]と思っている。
 d. *彼らは[監督が[Δ お互いを殴り合ったこと]を後悔している]と思っている。

主文述語が「決心する」である(11a)では、補文主語に最も近い先行詞は「娘」であり、(11b)では「父親」である。そして後者の場合、文は容認不可能である。この対立は、「決心する」の場合には Δ が二つ上の節にある「娘」を先行詞としてとることができないことを表している。また、(11cd)の対立からも、Δ が文内にある「彼ら」を先行詞とすることができないこと、すなわち、長距離の先行詞をとることができないことがわかる。したがって、これらの事実は「決心する」がコントロール述語であることを示している。同様の観察事実が「後悔する」の(12)の例からも得られ、「後悔する」も「決心する」と同様にコントロール述語であるということになる。

Fujii (2006) は、こうしたコントロール対非コントロールの対立には、以下のような補文述語のルとタの選択が関与しているとしている。

- (13) a. 太郎は[Δ 納豆を食べ{る/た}こと]を想像した。
 b. 太郎は[Δ 納豆を食べ{る/*た}こと]を決心した。
 c. 太郎は[Δ 納豆を食べ{*る/た}こと]を後悔した。

上記の(13)の例が示しているのは、「決心する」の補文述語は必ずル形でなければならない、また「後悔する」の補文述語はタ形でなければならないということである。一方で「想像する」の場合は、補文述語がルでもタでも問題ない。ルとタの交替可能性とコントロール性との関係を表にまとめると以下のようなになる。

表 1 補文述語のルタ交替とコントロール性の関係

補文述語の形式	ルタ交替可能	ル固定	タ固定
コントロール性	なし	あり	あり
例	想像する	決心する	後悔する

Fujii (2006) は上記の観察に基づいて、ある文にコントロール現象が観察されるのであれば、補文述語の時制形式がル形とタ形で交替しないという(9)の一般化を提出したのである。

3.2.2. Fujii (2006) の一般化の問題点

前節では Fujii (2006) の記述と、そこから導かれた一般化について述べた。Fujii の一般化を以下に再掲する。

(14) ある文がコントロール性を生じるのであれば、補文の述語はルカタで固定されている。

((9)の再掲)

本研究では、この Fujii (2006) の一般化を便宜的に「ルタ交替の一般化」と読むことにするが、この一般化に対しては問題点がいくつか挙げられる。本節ではその問題点を挙げ、整理する。

まず、当該の一般化には例外が存在する。補文述語の時制形態がルとタで交替するにもかかわらず、コントロール性を生じる述語が存在する。Fujii (2006) では「後悔する」が補文述語の時制の形態がタ固定の例として挙げられている。確かに、「後悔する」の場合、補文述語の時制形態がタ固定の場合が多いが、ル形が出現できないわけではない。これは、以下の(15)の例で確認できる。

- (15) a. ヒロシは[Δ カオリの父であること]を後悔している。
b. 社長は[Δ 新事業を立ち上げたこと]を後悔している。

このような「後悔する」と同様のふるまいをする述語には、「自白する」「自供する」「反省する」「自覚する」「打ち明ける」などが挙げられる^{7, 8}。

⁷ ただし、「自白する」「自覚する」等は、補文に静的なイベントを選択する場合に、補文の空主

以上のように、Fujii (2006) のルタ交替の一般化という記述的一般化には例外が存在する。また、ルタ交替の一般化には、上記のような例外を抱えているという問題点の他に、捉えられない事実がいくつかあるという問題点が存在する。

一つ目の捉えられない事実としては、補文の時制形態がル形で固定されているにもかかわらず、コントロール現象が認められない述語が存在するという点である。例えば「決定する」という例がその一つとして挙げられる⁹。

(16) 娘は[Δ 自宅で出産{する/*した}こと]を決定した。

(17) a. 父親は[娘が[Δ 自宅で出産すること]を決定した]と思った。

b. 娘は[父親が[Δ 自宅で出産すること]を決定した]と思った。

c. 監督は[彼らが[Δ お互いを殴り合うこと]を決定した]と思った。

d. 彼らは[監督が[Δ お互いを殴り合うこと]を決定した]と思った。

上記の(16)で示されるように、「決定する」は補文述語の時制形式がル形で固定されている。この「決定する」の場合、(17b)や(17d)が容認可能であることから、コントロール現象は観察されない。そのため、「決定する」は非コントロール述語ということになる。Fujii (2006) の一般化は、こうした「補文述語の形式がルとタで交替しないがコントロール性を生じない述語」が存在することを否定しないが、明らかに一般化が捉えられる範囲を狭めている。補文述語の形式が固定されているが非コントロール述語であるものは、他にも、「決める」「延期する」「提案する」「予告する」「予測する」「予想する」などが挙げられ、その数は多い。この「決定する」の例からも明らかなように、Fujii (2006) の一般化は、「コントロールと補文述語の時制形態には一定の関連性があり、その関連

語が主文主語と何らかの形で関係しているという条件さえ満たせば、補文に主文主語とは異なる主語も出現可能な場合があるようである。

(i) *犯人は[(仲間が)殺人を犯したこと]を{自白した/自覚した}。

(ii) a. 犯人は[(犯人が使った凶器が)包丁であること]を{自白した/自覚した}。

b. *犯人は[(仲間が使った凶器が)包丁であること]を{自白した/自覚した}。

このような事実は「後悔する」等には観察されない。上記の(ii)の事実から、「自白する」「自覚する」等の述語は別扱いできる可能性もある。しかし、本研究では、補文が動的なイベントである場合には「後悔する」と同様のふるまいをすることを重視し、「自白する」「自覚する」を「後悔する」と同じグループに分類しておく。

⁸ ル形の場合、静的述語に限られるという制約があるが、形式上は補文述語がル形でも問題ないことに注目されたい。「後悔する」の補文述語がル形を伴った場合に静的述語（または静的イベント）に限られるというのは、「後悔する」という語彙が、補文イベントが「過去、または現在の確定イベントでなければならない」という意味的な制約を課しているからだと考えられる。

⁹ Fujii (2006)、藤井 (2016) は、ルタ交替の一般化はあくまでもコントロール現象の必要条件であるとし、「決定する」等の述語にコントロール現象が観察されないことに関しては、例外処理をしている。分析の詳細は Fujii (2006) を参照。

性とは、ある文にコントロール現象が観察されるのであればその時制形態はルとタで自由に交替しない」ということを述べているに留まっているのである。すなわち、Fujii (2006) の一般化は、ある文がコントロールか否かを予測できる一般化ではないということになる。

こうした予測可能性に関する問題は、補文の述語形式のルとタが明確な形で確認できない時に問題となる。例えば、イベント名詞句を補部を選択する場合である。コントロール述語は、命題を補部を選択することができるため、コト節という形式で別の述語を埋め込むことが可能だが、これは、命題は動詞によって表されなければならないという形態的な制約が存在するということを意味しない。具体的には、イベント名詞句という形で命題を表すことも可能である。例えば以下の(18)の例であるが、「想像する」「決心する」「後悔する」は全てイベント名詞句を補部を選択することが可能である。

- (18) a. ヒロシは[ボランティア活動への参加]を想像している。
b. ヒロシは[イタリアのチームへの移籍]を決心した。
c. ヒロシは[選挙への出馬]を後悔している。

そして、重要なのは、こうしたイベント名詞句を選択した際にもコントロールと非コントロールの区別が残っているということである。

- (19) a. 父親は[娘に[Δ 無免許の病院での出産]]を想像して]欲しかった。
b. 娘は[父親に[Δ 無免許の病院での出産]]を想像して]欲しかった。
c. 監督は[彼らに[Δ お互いのチームメイトの批判]]を想像して]欲しかった。
d. 彼らは[監督に[Δ お互いのチームメイトの批判]]を想像して]欲しかった。
(20) a. 父親は[娘に[Δ 無免許の病院での出産]]を決心して]欲しかった。
b. *娘は[父親に[Δ 無免許の病院での出産]]を決心して]欲しかった。
c. 監督は[彼らに[Δ お互いのチームメイトの批判]]を決心して]欲しかった。
d. *彼らは[監督に[Δ お互いのチームメイトの批判]]を決心して]欲しかった。
(21) a. 父親は[娘に[Δ 無免許の病院での出産]]を後悔して]欲しかった。
b. *娘は[父親に[Δ 無免許の病院での出産]]を後悔して]欲しかった。
c. 監督は[彼らに[Δ お互いのチームメイトの批判]]を後悔して]欲しかった。
d. *彼らは[監督に[Δ お互いのチームメイトの批判]]を後悔して]欲しかった。

上記の(19)から(21)の例からは、「想像する」が非コントロール述語であり「決心する」

や「後悔する」がコントロール述語であるという節の場合に見られた対立が、イベント名詞句補部でも維持されていることがわかる。こうしたイベント名詞句を選択する場合に見られるコントロール現象は、形態的に明示的な形でルタが現れないので、ルタ交替の一般化では捉えきれない。

3.2.3. 節のまとめ

本節では Fujii (2006) のコントロール現象に関する記述的側面に焦点を当てて、コト節を選択する述語とコントロール現象の間の関係を概観した。Fujii (2006) は、「ある文がコントロール性を生じるのであれば、補文の述語はルカタで固定されている」という記述的一般化を提出した。しかし、この一般化には補文述語の時制形態がルとタで交替するのにもかかわらずコントロールが観察される場合が存在するという例外がある。

また、この一般化はあくまでも「コントロールと時制形態の交替可能性には関連がある」ということを述べるに留まっている。したがって、補文述語の時制形態がルで固定されているが非コントロール述語として捉えられるものの存在を排除しない。この点は一般化の及ぶ範囲を狭めてしまっている。さらに、ルタ交替が関与しないイベント名詞句補部においても、コト節補文に観察されるコントロールと非コントロールの対立が見られるという事実も Fujii (2006) の一般化では捉えきれない。

3.3. 述語の意味分類とコントロール現象

前節での議論を踏まえて、本研究では、コントロール性は補文述語のルタ交替という形態的特徴ではなく、主文述語の意味に着目した形で捉えるべきであると考え。実際に、コントロール性は述語の性質によって決まっており、通言語的に述語の意味から予測可能であるとされている (Landau 2013; Stiebels 2007)。そこで、本節では、コト節を選択する述語を意味分類し、その意味とコントロール現象との間の関係を整理し、コントロールに関わる本質的な意味について考察する。

3.3.1. コト節補文を選択する述語の意味分類とコントロール性

Landau (2000) およびその分類を援用している Grano (2015) では、英語においてコントロールが認められる主文述語を以下のような意味カテゴリーに分類している (詳細は Landau 2000: 38 を参照)。

- (22) a. Implicatives (含意) : dare, manage, make sure, bother, remember, get, see fit, 等
- b. Aspectual (アスペクト) : begin, start, continue, finish, stop, resume, 等

- c. Modal (モーダル) : have, need, may, should, is able, must, 等
- d. Factives (叙実) : glad, sad, regret, like, dislike, hate, loath, surprised, shocked, 等
- e. Propositional (命題) : believe, think, suppose, imagine, say, claim, assert, 等
- f. Desideratives (願望) : want, prefer, yearn, arrange, hope, afraid, refuse, agree, 等
- g. Interrogatives (疑問) : wonder, ask, find out, interrogate, inquire, contemplate, 等

含意タイプは、補文の真偽値が主文の述語に依存しているもの (Karttunen 1971) であり、叙実タイプは、補文のイベントが真であることを前提としているものである (Kiparsky and Kiparsky 1970)。命題タイプは補文の真偽決定可能なもののことを指し (= (23))、補文時制は状態や総称時制と並行的なものとされる。

(23) John claimed to have solved the problem, which was true/false.

(Landau 2000: 37)

願望タイプは意図的であり、非現実 (Irrealis) の補文を選択する述語である。これらの述語が選択する補文は、願望・意図・指示などを表す内容である、非客観的な事実の描写 (non-objective description of reality) となっている。Grano (2015) では、上記の Landau (2000) の分析に Try (試行) タイプが加えられている。

本節ではこれを日本語のコト節補文を選択する主文述語の意味に援用する¹⁰。ただし、Interrogatives (疑問) タイプはコト節補文を選択しないのでここでは除外する。

試行タイプは、「試みる」「企図する」等が当たると考えられる。アスペクトタイプには「始める」「続ける」等が当たると考えて問題ないだろう。含意タイプには「忘れる」「成功する」等が当たり、叙実タイプには「後悔する」「気づく」等が当たる。含意や叙実といった英語と同様の意味カテゴリーを日本語に認めても問題ないことは、以下の (24) と (25) の例から判断できる。含意タイプは、主文述語が否定された場合、補文内容も否定されるが、叙実述語の場合は、主文述語が否定されてもその補文内容は否定されない。

¹⁰ Landau (2000) および Grano (2015) による述語分類が、語彙意味論的に有意義な分類方法であるかについてはより慎重な議論が求められる。しかし、彼らの分類はコントロール現象を説明するにあたっては有効な分類であるので、ここでは便宜的に彼らの分類を日本語のコト節補文を選択する述語の意味分類に援用する。

(24) 含意タイプ

- a. ヒロシは逃げ出したリスを捕獲することに成功した。
→ヒロシはリスを捕獲した。
- b. ヒロシは逃げ出したリスを捕獲することに成功しなかった。
→ヒロシはリスを捕獲しなかった。

(25) 叙実タイプ

- a. ヒロシは浮気をしたことを後悔している。
→ヒロシは浮気をした。
- b. ヒロシは浮気をしたことを後悔していない。
→ヒロシは浮気をした。

モーダルタイプは、「ことができる」のような固定表現を除けば、「可能だ」が挙げられる¹¹。願望タイプと命題タイプに関しては、日本語では英語ほど明確な区別ができないので、願望・命題タイプの補文は非現実 (Irrealis) を表すという共通点を重視して、非現実タイプとしてまとめておく。

以下の(26)が、日本語のコト節補文を選択する述語の意味分類とそれに対応する述語の例である。

- (26) a. 試行タイプ (Try) : 試みる、企図する、等
- b. 含意タイプ (Implicative) : 忘れる (含意)¹²、失敗する、成功する、避ける、辞退する、強制する、強いる、等
 - c. アスペクトタイプ (Aspectual) : 始める、続ける、終える、やめる、開始する、中止する、継続する、終了する、等
 - d. モーダルタイプ (Modal) : 可能だ、等
 - e. 叙実タイプ (Factive) : 後悔する、自白する、自覚する、自供する、打ち明ける、反省する、報告する、報道する、知らせる、告知する、伝える、忘れる (叙実)、白状する、気づく、喜ぶ、悲しむ、驚く、認める、黙認する、等

¹¹ 「ことができる」は、固定化した表現で、複文ではなく単文として捉えられるので、ここでは他のコト節を選択する述語とは性質が異なるものと考えて除外する。

¹² 「忘れる」は叙実と含意で曖昧な動詞である。「忘れる」の曖昧性に関する議論は第6章を参照されたい。

- f. 非現実タイプ (Irrealis) : 決心する、決意する、心に決める、望む、期待する、願う、求める、命じる、頼む、予定する、決定する、決める、提案する、勧める、考える、想像する、等

上記の分類をもとに、これらの述語をコントロール、非コントロールで分類すると、以下のようになる。

[コントロール述語]

(27) 試行タイプ (Try) 「試みる」

- a. *娘は[父親が[Δ 自宅で出産すること]を試みた]と思っている。
- b. *彼らは[監督が[Δ お互いを胴上げし合うこと]を試みた]と思っている。

(28) 含意タイプ (Implicative) 「成功する」

- a. *娘は[父親が[Δ 自宅で出産すること]に成功した]と思っている。
- b. *彼らは[監督が[Δ お互いを推薦し合うこと]に成功した]と思っている。

(29) アスペクトタイプ (Aspectual) 「続ける」

- a. *娘は[父親が[Δ 自宅で出産すること]を何年も続けた]と思っている。
- b. *彼らは[監督が[Δ お互いを尊重し合うこと]を続けている]と思っている。

(30) モーダルタイプ (Modal) 「可能だ」

- a. *娘は[父親が[Δ 出産すること]が可能だ]と思っている。
- b. *彼らは[監督が[Δ お互いを尊重し合うこと]が可能だ]と思っている。

(31) 叙実タイプ (Factive) 「後悔する」

- a. *娘は[父親に[Δ 自宅で出産したこと]を後悔して]欲しかった。
- b. *彼らは[監督に[Δ お互いを殴り合ったこと]を後悔して]欲しかった。

(32) 非現実 (Irrealis) 「決心する」

- a. *娘は[父親に[Δ 自宅で出産すること]を決心して]欲しかった。
- b. *彼らは[監督に[Δ お互いを褒め合うこと]を決心して]欲しかった。

[非コントロール述語]

(33) 叙実タイプ (Factive) 「黙認する」

- a. 娘は[父親が[Δ 自宅で出産したこと]を黙認する]と思っている。
- b. 彼らは[監督が[Δ 不必要にお互いを批判し合ったこと]を黙認する]と思っている。

(34) 非現実タイプ (Irrealis) 「決定する」

- a. 娘は[父親が[Δ 自宅で出産すること]を決定した]と思っている。
- b. 彼らは[監督が[Δ お互いを批判し合うこと]を決定した]と思っている。

表 2 (非)コントロール述語と意味タイプ

コト節を選択する述語		
述語の意味	コントロール	非コントロール
試行	試みる、企図する、等	
含意	忘れる（含意）、失敗する、成功する、避ける、辞退する、強制する、強いる、等	
アспект	始める、続ける、終わる、やめる、開始する、中止する、継続する、終了する、等	
モーダル	可能だ、等	
叙実	後悔する、自白する、自覚する、自供する、打ち明ける、反省する、等	報告する、報道する、知らせる、告知する、伝える、忘れる（叙実）、白状する、気づく、喜ぶ、悲しむ、驚く、認める、黙認する、等
非現実	決心する、決意する、心に決める、命じる、勧める、頼む等	望む、期待する、願う、求める、予定する、決定する、決める、提案する、考える、想像する、等

上記の記述が正しければ、以下のような意味とコントロール現象との対応関係が得られることになる。

- (35) a. 「試行」「含意」「アспект」「モーダル」タイプの述語はコントロール述語である。
- b. 「叙実」「非現実」タイプの述語はコントロールと非コントロールの両方存在する。

次節では、(35)で得られたコントロール現象に関与する述語の意味記述から、コント

ロール性に関わる本質的な意味について考察を加える。

3.3.2. コントロール性に関わる述語の意味

本節では、前節の(35)で得られた記述を基に、述語の意味とコントロール性の関係について考察を加える。コントロール性に関与する述語の意味として、具体的には、イベントの非分離性、指示・操作性、再帰性が関わっていると論じる。

3.3.3. 主文と補文におけるイベントの非分離性

本節では、必ずコントロール性を生じる「試行」「アスペクト」「含意」「モーダル」タイプの述語に関して考察を加えていく。

まず、アスペクトタイプは、その名の通りイベントの局面に関する述語である。すなわち、アスペクトタイプの述語は、コト節補文のイベントの局面に言及をしている。「試行」タイプも、典型的なアスペクトタイプとは若干性質が異なるものの、補文で表されるイベントの起動の局面に言及していると考えれば、これもアスペクトタイプの一つとして考えることが可能である。したがって、アスペクトタイプおよび試行タイプの述語は、補文のイベントの局面に言及しているという点で共通しており、当該の述語が補文を選択した際には、複文でありながら、単一イベントの発生を意味する。これはすなわち、アスペクトタイプの述語および試行タイプの述語がコト節補文を選択した際には、主文と補文のイベントが切り離される関係にはないことを意味している。

含意タイプに関しても、アスペクト・試行タイプと同様のことが言える。含意動詞とは、補文の真偽値が主文述語に依存しているものであり、主文と補文は論理的に依存関係にある。こうした依存関係により、含意動詞の場合にも、アスペクト・試行タイプと同様に、複文でありながら単一イベントの発生を意味していると捉えることができる。したがって、含意タイプの場合も主文と補文のイベントは分離不可能である。

モーダルタイプの述語も、イベントという観点から考えると、上記の必ずコントロールになるタイプの述語と同様に、複文でありながら単一イベントを表している。日本語では「可能だ」がコト節補文を選択するモーダルタイプの述語として挙げられるが、「可能だ」の場合は、補文は主文の経験者の所有する能力であり、補文は主文主語と所有関係にある。すなわち、「可能だ」における補文で表されているイベントは、主文主語が所有している能力であるため、主文と補文のイベントは互いに切り離される関係にはない。

上記のことから、本研究では、単一イベントの発生を意味するという性質を「イベントの非分離性」と呼び、主文と補文のイベントが依存関係にある場合にコントロール現

象が観察されると主張する¹³。こうしたイベントの非分離性は、時間副詞・場所句・描写二次述部を用いたテストで確かめることができる。

まず、主文と補文のイベントが分離不可能であるということは、各々のイベントが時空間を共有していることを意味している。時間に関しては、主文と補文が独立した時間副詞を伴うことができるか否かで確認できる（藤井 2016; Fujii 2012; Nakau 1973 等）。

- (36) a. *昨日ヒロシは[Δ 明日富士山に登ること]を試みた。
b. *昨日社長は[Δ 明日部下に会うこと]に成功した。
c. *昨日ヒロシは[Δ 明日自転車で出勤すること]を続けた。
- (37) a. 昨日ヒロシは[Δ 明日大量の株を購入すること]を黙認した。
b. 昨日ヒロシは[Δ 来年は筑波大学を受験すること]を決定した。

¹³ イベントの非分離性がコントロール現象に関与していることは、Dubinsky and Hamano (2010) でも示唆されている。Dubinsky and Hamano (2010) は、Landau (2000) が観察したコントロールにおける EC (Exhaustive Control) と PC (Partial Control) という分類に、イベントの観点から考察を加えている。EC と PC とは、コントロール構文における補文主語と主文の先行詞との一致関係に関わる概念である。EC は主文の先行詞が補文の主語と完全に一致していなければならないものだが、PC は主文の先行詞が補文の主語と部分的に一致していればよいものである（以下の(i-b)における補文の空主語の $i+$ の表記は、空主語の解釈が先行詞と完全に一致していなくてもよいことを意味している）。

- (i) a. *The chair_i tried [Δ_i to gather at 6]. (EC)
b. The chair_i wanted [Δ_{i+} to gather at 6]. (PC)

(i)の主文主語は chair という単数主語であり、補文述語は主語位置に複数主体を要求する gather である。したがって、EC のように主文の先行詞と補文の空主語の完全一致を求めるものは非文となるが、PC であれば容認される。これは(i-a)と(i-b)の対立に示される通りである。そして、Landau (2000) は、以下のような時間副詞を用いて、EC と PC の対立は補文の時制と関係していると主張している。

- (ii) a. *Yesterday, John managed to solve the problem tomorrow. (EC)
b. Yesterday, John wanted to solve the problem tomorrow. (PC)

これに対して、Dubinsky and Hamano (2010) は名詞の場合にも同様の差異が見られることを観察し、EC と PC の差異は、イベントの分離性の観点から説明されるべきだとしている。

- (iii) a. *John's attempt to meet at noon.
b. John's desire to meet at noon. (Dubinsky and Hamano 2010: 203)

イベントの分離性（非分離性）とは、補文のイベントが主文のイベントとは独立しているか、つまり、自律性を持っているか否かである。try（またはその対応する名詞形の attempt）というイベントは補文のイベントから切り離すことはできないが、want（またはその名詞形の desire）というイベントは補文のイベントから切り離すことができる。これは try がアスペクト的な意味を持っており、補文の局面に言及しているのに対し、want は経験主体の感情に言及しているだけで、補文のイベントとは依存関係にないからである。日本語のコト節補文においてこの EC および PC の対立が言語的に有意な差として認められるかは今後の研究に委ねたい（PC と似た概念としては Uchibori (2000) のセミコントロール (semi control) がある）。本研究では、Dubinsky and Hamano (2010) が EC の原理の説明に用いたイベントの分離可能性を、日本語のコト節コントロール現象におけるコントロールと非コントロールの対立の説明原理に援用する。

上記の(36)と(37)の対立からわかるのは、「試みる」「成功する」「続ける」という述語が、主文と補文で別々の時間を指定できないのに対し、「黙認する」「決定する」であれば、それが可能であるということである。そして、(36)のような述語であれば、主文と補文で述語が二つ存在する複文であるが、イベントとしては一つであるのに対し、(37)の述語であれば、イベントが二つ存在している、ということになる。

時間副詞と同様の事実が、場所句でも確認することができる。

(38) a. *ヒロシは職場では[Δ 自宅で息子に電話すること]を試みた。

b. *ヒロシは職場では[Δ 教会で式を挙げること]に成功した。

c. *ヒロシは職場では[Δ 自宅で愛人に会うこと]を続けた。

(39) a. ヒロシは職場では[Δ 自宅で大量の株を購入すること]を黙認した。

b. ヒロシは職場では[Δ 教会で式を挙げること]を決定した。

この場合も時間副詞同様、「試みる」「成功する」「続ける」の場合には、主文と補文で二つの異なった場所を指定することはできないが、「黙認する」「決定する」の場合にはこれが可能である。この場所句の事実も前者は主文と補文のイベントが分離不可能であるのに対し、後者はそれが可能であるということを示している。そして、このイベントの分離性の差異は、コントロールと非コントロールの対立と並行的である。

次に、主文主語の状態と補文主語の状態に関する点である。主文と補文が別々のイベントについて言及しているのであれば、主文主語の状態と補文主語の状態が異なっても問題はないはずである。これは主語の状態を描写する描写二次述部によって測ることができる。主文と補文のイベントが独立した分離可能なものであるならば、主文主語と補文主語に別々の二次述部を修飾させても問題ないことを予測し、分離不可能であるならばそれが不可能であることを予測する。そして、実際にこれは予測通りの結果となる。

(40) a. *ヒロシは泥酔状態で[Δ 素面でプロポーズすること]を試みた。

b. *ヒロシは裸の状態で[Δ ジーンズ姿で出勤すること]に成功した。

c. *ヒロシは荷物を抱えた状態で[Δ 手ぶらで恋人と会うこと]を続けた。

(41) a. ヒロシは泥酔状態のままで[Δ 素面でプロポーズすること]を黙認した。

b. ヒロシは裸の状態で[Δ ジーンズ姿で出勤すること]を決定した。

(40)の「試みる」「成功する」「続ける」では異なった二次述部が共起できないという事

実は、(41)の「黙認する」「決定する」とは異なり、主文と補文のイベントが分離不可能であることを示している。この差異もコントロールと非コントロールの対立と並行的である。

上記の事実を踏まえて、本研究では、コントロール現象に対して以下の一般化が可能であると主張する。

(42) 主文イベントと補文イベントが分離不可能な場合にコントロール性が生じる。

上記の(42)の一般化は、補文時制ではなく主文述語の意味に基づいている点で、Fujii (2006) の時制交替の一般化とは異なることに注意されたい。

3.3.4. 指示・操作性

前節では「試行」「含意」「アスペクト」「モーダル」タイプの述語を対象に、イベントの非分離性がコントロール現象に関与しているとした。しかし、これだけで全てのコントロール現象を説明可能なわけではない。本節では、非現実 (Irrealis) タイプの一部の述語は、述語が語彙的に持つ「指示・操作性 (directive/manipulative)」という意味的特徴によってコントロール性を生じていると主張する。

指示・操作性とは、主文主語が主文目的語に働きかけ、コト節補文の命題内容を遂行させることを指し、目的語コントロール現象を見せる述語がこの意味的特徴を持つ。例えば以下のような述語が挙げられる。基本的には、補文のコト節がヨウニ節と交替可能な述語群である。

(43) 命じる、命令する、勧める、頼む、依頼する、等

(44) a. 警察は容疑者に署まで出向くように{命じた/命令した}。

b. ヒロシは息子に筑波大学を受験するように勧めた。

c. 社長は秘書にコピー機を買うように{頼んだ/依頼した}。

上記の述語は、以下の例に見られるように、前節で見たようなイベントの非分離性という特徴は備えていない¹⁴。

¹⁴ イベントの非分離性の性質を測るために用いたテストである描写二次述部はここでは用いない。これは、描写二次述部が（被影響目的語である場合を除いて）主語指向性を持つために、ここでの目的語コントロール現象においては有効なテストとはならないという独立した理由による。描写二次述部の統語的・意味的制約は竹沢 (2001)、Koizumi (1994) 等を参照されたい。

(45) [時間副詞の不一致]

- a. 昨日警察は容疑者に[Δ 明日署まで出向くこと]を{命じた/命令した}。
- b. 昨日ヒロシは息子に[Δ 来年筑波大学を受験すること]を勧めた。
- c. 昨日社長は秘書に[Δ 明日コピー機を買うこと]を{頼んだ/依頼した}。

(46) [場所句の不一致]

- a. 警察は電話越しで容疑者に[Δ 直接署で話すこと]を{命じた/命令した}。
- b. ヒロシは自宅で息子に[Δ 図書館で勉強すること]を勧めた。
- c. 社長は出先で秘書に[Δ 社長室で書類をコピーすること]を{頼んだ/依頼した}。

そこで、本研究では、主文述語が指示・操作性という意味的特徴を持つ場合にはコントロール現象が観察されると主張する。

- (47) 主文イベントで表されている行為が主文目的語に対して指示・操作的である場合に、コントロール性が生じる。

前節でのイベントの非分離性と同様に、指示・操作性も主文述語の意味的な特徴である。

3.3.5. 再帰性

上記では、イベントの非分離性および指示・操作性がコントロール現象に関与していることを明らかにしてきたが、この分類に収まらないにもかかわらずコントロール性を生じる述語が存在する。このタイプの述語は、叙実タイプと非現実タイプの述語が挙げられ、二つの意味カテゴリーにまたがっている。例えば以下の述語群が挙げられる。

(48) a. 叙実タイプ

後悔する、自白する、自覚する、自供する、打ち明ける、反省する、等

b. 非現実タイプ

決心する、決意する、心に決める、等

上記の述語は、イベントの非分離性を測るテストからは主文と補文のイベントが分離できないことが判断でき、ヨウニ節とも交替不可能であるので、前節までの議論だけではこれらの述語に見られるコントロール性を説明することができない。

(49) [時間副詞の不一致]

- a. 明日ヒロシは[Δ 昨日後輩に夕食をおごったこと]を後悔するだろう。
- b. 昨日ヒロシは[Δ 明日後輩に夕食をおごること]を決心した。

(50) [場所句の不一致]

- a. ヒロシは布団の中で[Δ 公衆の面前でプロポーズしたこと]を後悔している。
- b. ヒロシは布団の中で[Δ 公衆の面前でプロポーズすること]を決心した。

(51) [描写二次述部の不一致]

- a. ヒロシは下着姿の状態で[Δ ジーンズ姿で出勤したこと]を後悔している。
- b. ヒロシは厚着の状態で[Δ 薄着で外を歩くこと]を決心した。

当該の述語のコントロール性に関しては、王 (2011) の主張が示唆的であると考える。王 (2011) は、コト節を選択する述語のコントロール性は、補文に非顕在的な照応的名詞句が現れることによって導かれているとし、これは分離不可能所有構文と並行的であると主張している。王 (2011) は、分離不可能所有構文に見られる非顕在的な再帰代名詞の証拠として、以下のような例を挙げている。

- (52) a. 太郎_iは[Δ_{i/*j} 目]を閉じた。
b. 太郎_iは[Δ_{i/*j} 手]を挙げた。
c. 太郎_iは[Δ_{i/*j} 顔]を洗った。

(王 2011: 87、一部表記を変更)

上記の(52)の例では、「閉じる」「挙げる」「洗う」が「目」「手」「顔」といった分離不可能な身体部位を選択することによって再帰的になり、解釈としては「主語の {目/手/顔}」となるというわけである。これと同様のことがコト節でも起こっているというのが王 (2011) の主張である。すなわち、一部の述語は分離不可能所有構文に見られるような再帰性によって主文主語と補文主語の解釈が一致しなければならないということになる。

しかし、既に仁田 (1982) によって指摘されているように、王 (2011) が挙げている「閉じる」「挙げる」「洗う」は、これらの語彙自体が再帰性を備えているわけではない。これらの述語はあくまでも、目的語に分離不可能な要素が現れたときに再帰性を得る。仁田 (1982) はこれを、他動詞の「再帰用法」と名付けており、これは、「履く」「着る」「浴びる」などのような「再帰動詞」とは異なるものであることを明らかにしている。

これらの述語の違いは、「閉じる」「挙げる」「洗う」の動作が向かう先は必ずしも主語に限られないのに対し、「履く」「着る」「浴びる」などは、必ず動作の向かう先が主語に限られるという事実からわかる¹⁵。

- (53) a. ヒロシは本を閉じた。
 b. ヒロシはいくつかの可能性を挙げた。
 c. ヒロシはシーツを洗った。
- (54) a. ヒロシはジーンズを履いた。(他人に履かせたという解釈は不可能)
 b. ヒロシはシャツを着た。(他人に着させたという解釈は不可能)
 c. ヒロシはシャワーを浴びた。(他人に浴びせたという解釈は不可能)

仁田 (1982) は、再帰性は、動作が自分に帰ってくるという点で自動詞的であり、他動的な表現が自動的な表現になっているとし、これは直接受動文の形成に影響を与えるとしている。つまり、再帰動詞は直接受動文を作れないのに対し、再帰用法を持つ動詞は、再帰的に用いられていなければ直接受動文を作ることが可能ということである。これは以下の(55)から(57)の事実を示される通りである。

- (55) a. *目が閉じられた。
 b. *手が挙げられた。
 c. *顔が洗われた。
- (56) a. 本が閉じられた。
 b. いくつかの可能性が挙げられた。
 c. シーツが洗われた。
- (57) a. *ジーンズが履かれた。
 b. *シャツが着られた。
 c. *シャワーが浴びられた。

¹⁵身体部位を必ず目的語に選択し、語彙的に再帰性を備えている再帰動詞としては、「食いしばる」「痛める」「害す」等が挙げられる。これらの述語は必ず動作が主語に向かなければならない。

- (i) a. ヒロシ_iは[$\Delta_{i/*j}$ 歯]を食いしばった。
 b. ヒロシ_iは[$\Delta_{i/*j}$ 心]を痛めた。
 c. ヒロシ_iは[$\Delta_{i/*j}$ 気分]を害している。

本研究では、本質的な部分では王 (2011) の示唆に賛成するが、「後悔する」や「決心する」は、王 (2011) が並行的であるとして挙げている再帰用法的なものではなく、語彙的に再帰性が決まっている再帰動詞であると主張する。つまり、「後悔する」「決心する」などに見られるコントロール現象は、再帰動詞と並行的であり、語彙的に再帰性を備えているためにコントロール性が生じると考える。これをまとめると、以下の通りとなる。

(58) 主文述語が語彙的に再帰性を備えている場合はコントロール性が生じる。

ここでの主張は、「後悔する」や「決心する」が再帰動詞であるとしているので、当該の述語は通常の再帰動詞と同様のふるまいをすると考えられる。仁田 (1982) で既に指摘されているように、再帰動詞の特徴の一つは直接受動の可否である。したがって、「後悔する」や「決心する」は直接受動文にできないことを予測するが、実際にその予測は正しい。

(59) a. ヒロシは[高い腕時計を買ったこと]を後悔している。

b. *[高い腕時計を買ったこと]が (ヒロシによって) 後悔されている。

(60) a. ヒロシは[アメリカに留学すること]を決心した。

b. *[アメリカに留学すること]が (ヒロシによって) 決心された。

これと対照的に、イベントの非分離性によってコントロール性を生じる述語、指示・操作的な述語、非コントロール述語は問題なく直接受動文の形を作ることができる¹⁶。

(61) a. [ロケットを打ち上げること]が試みられた。

b. [取引先の会社の社長と会うこと]は避けられた。

c. [毎朝ジョギングすること]が続けられた。

(62) [署まで出向くこと]が命じられた。

(63) a. [危険ドラッグを販売すること]が黙認されている。

b. [海外に進出すること]が決定された。

また、イベントが分離可能でありながらコントロール性を生む述語は、「自白する」「自

¹⁶ モーダルタイプの述語は除く。

覚する」のように「自」という再帰的要素を伴うことが多い¹⁷。

(64) a. ヒロシ_iは今になって[Δ_i母親に嘘をついたこと]を自白した。

b. ヒロシ_iは今になって[Δ_i株で大損したこと]を自覚した。

こうした再帰性も、イベントの非分離性・指示・操作性と同様に、述語の持つ語彙的な性質である¹⁸。

3.3.6. 節のまとめ

本節では、コト節補文に観察されるコントロール現象に関して、主文述語の意味に着目しながら考察を加えた。本節の主張は以下の通りである。

(65) コト節補文を選択する述語のコントロール性が生じる条件

- a. 述語が語彙的に主文と補文のイベントが非分離であることを要求する場合
- b. 述語が語彙的に指示・操作性を備えている場合
- c. 述語が語彙的に再帰性を備えている場合

上記の(65)は、補文主語が主文の先行詞と一致することで括られてきたコト節補文のコントロール現象が、主文述語の三つの意味的な特徴からの帰結であることを示している。

3.4. 理論的含意

本節では、前節までの記述が、日本語のコト節補文に関するコントロール現象に対する分析に対してどのような示唆を与えるのかを考察する。

コントロール現象を分析するにあたっての伝統的に設定されてきた根本的な課題は

¹⁷ 「自白」は再帰性によってコントロール性を備えていると考えられるが、類義語である「告白する」は再帰性を備えていない。そして、「告白する」は受け身化が可能である（Nakau 1973: 102）。

(i) [秘密が漏れた（という）こと]は（太郎によって）告白された。

¹⁸ 「後悔する」「決心する」等の述語が再帰性を備えているという議論が妥当性を高めるためには、直接受動文以外の独立した言語事実も再帰性を支持するということが示されなければならない。しかし、述語の再帰性をテストする有効なテストは直接受動文を除いて存在しない。ただ、ここで捉えたい事実は、「後悔する」や「決心する」が、それと類義語である「悔やむ」や「決める」とは異なり、自分の行為に対してのみ言及可能であるという点であり、その点では再帰性という概念は有効であると考えられる。本研究では、再帰性という説明方法が最終解とは考えないが、イベントの非分離性でも指示・操作性でも説明できないコントロール性の語彙意味的な特徴を捉えるためには、現時点では再帰性以外ないと考える。

以下の二点である。

(66) コントロール構文における問題設定

- a. 空主語 Δ の分布の問題：見えない主語が出現しうる環境
- b. 空主語 Δ の解釈の問題：見えない主語の解釈の決定方法

それでは、日本語のコト節補文におけるコントロール現象は上記の問題設定に関してどのような理論的含意を与えるだろうか。

英語の場合、空主語の出現は述語が屈折しない位置、すなわち、不定詞節や動名詞節といった非定形節に限られる。しかし、日本語のコト節補文に見られるコントロールの場合は、英語にはない複雑な問題をはらんでいる。なぜなら、日本語の場合には、コト節補文の述語には時制の形態が現れており、英語の非定形節とは補文の統語的性質が異なりうるという問題を抱えているからである。また、日本語は **pro** 脱落 (**pro drop**) 言語であるために、空主語が **PRO** なのか、それとも **pro** なのかが判断しにくいという問題も存在する。

そこで本節では、日本語のコト節補文における空主語の統語的実態、コト節の統語的ステータスおよびその解釈の決定方法に関して考察を加える。以下では、日本語のコト節補文のコントロール現象を扱った先行研究の分析を概観し、その問題点および捉えられない点を指摘しながら、本章での記述が理論的にどのような含意を持つかを検証する。

3.4.1. 先行研究の分析

本節では、コト節補文に観察されるコントロール現象に関して、統語的観点から分析を加えた研究を取り上げ、その問題点を指摘する。

3.4.1.1. 補文の種類と定形性

日本語の補文は、大きく分けて補文標識を伴うものと伴わないものの二種類に分けられる (井上 1976; Nakau 1973 等)。この分類には補文述語の時制辞の有無が関わっている。以下の(67)を参照されたい。

- (67) a. ヒロシは[花に話しかけ]続けた。
b. ヒロシは[花に話しかけること]を続けた。

(67a)は補文標識を伴わない補文で、時制辞が存在しない。(67b)は「こと」という補文

標識を伴うもので、時制辞が存在する。補文述語の時制辞の有無は主格主語の出現と関わっている。Takezawa (1987) および竹沢 (1998) は、主格の付与は時制辞 T によってなされるとしており、T が存在しない環境では主格主語が出現しないことが明らかにされている。

(68) a. ジョンは[[メアリーの横顔]がとても美しい]と思った。

b. ジョンは[[メアリーの横顔]をととても美しい]と思った。

(69) a. *ジョンは[[メアリーの横顔]がとても美しく]思った。

b. ジョンは[[メアリーの横顔]をととても美しく]思った。

(Takezawa 1987: 73-74)

(68)と(69)の対立は、形容詞述語の「美しい」と「美しく」に見られる時制辞の有無によるものである。(68a)では「美しい」に時制辞が存在するため、「メアリーの横顔が」という主格主語を認可できるが、(69a)では形容詞述語「美しい」の連用形「美しく」には時制辞が存在しないため、主格主語を認可することができない。

こうした時制辞と主格主語との関係は、日本語の補文の種類と密接に関わっている。実際に補文標識を伴う場合と伴わない場合での主格主語の出現の可能性を見てみると、動詞連用形節では補文述語に時制辞が認められないため、顕在的主格主語の出現が許されないのに対して(=70)、コト節では顕在的主格主語の出現が許される(=71) (Hasegawa 1984/85; Uchibori 2000 等)。

(70) a. *首相は改めて[彼自身が今回の不祥事を説明し]直した。

b. *学長はすっかり[自分が式典に出席し]忘れた。

(71) a. 首相は改めて[彼自身が今回の不祥事を説明すること]を試みた。

b. 学長は[自分が式典に出席すること]を決心した。

補文述語のル形が、統語的・意味的に完全な時制辞として機能しているかについては議論が分かれるところであるが、主格主語を認可することができる「ル」は、少なくとも統語的には完全な時制辞の役割を果たしていると考えるのが妥当である。したがって、(70)に見られる補文標識を伴わない動詞連用形節は非定形節で、「こと」という補文標識を伴うコト節補文は定形節であると考えべきである。

3.4.1.2. Uchibori (2000) の分析

前節ではコト節補文内には顕在的主格主語が出現することを確認し、コト節は定形節であるとした。こうした事実は既に Uchibori (2000) でも指摘されている。

Uchibori は、「こと」を伴う補文を仮定法補文 (Subjunctive complement) と捉え、補文の時制辞と空主語の解釈について考察を加えている。彼女は、コト節補文には顕在的主語が出現することに加えて、補文主語の解釈が主文の先行詞と厳密に一致しなくても構わない場合があることを観察した。例えば以下の(72)のような例である (Uchibori 2000: 89-94)。

(72) [コンテキスト]

花子は太郎とケイコと次郎が所属する会社の課長である。花子は彼女自身でボストンに出張したかった。しかし結局、花子は太郎とケイコと次郎に出張させることにした。

花子_iがケイコ_jに[[彼女_jを含む3人]がボストンに出張すること]を求めた。

(72)では補文主語が「彼女を含む3人」という複数主語であり、補文の目的語の「ケイコ」という単数主語とは完全に一致していないが問題なく許容される。Uchibori は他にも、「ひとりひとりで」という副詞を用いて主文主語と補文主語が完全一致しなくても構わない場合があることを確認している。

(73) 花子_iがケイコ_jに[Δ ひとりひとりでボストンに出張すること]を命じた。

「ひとりひとり」は主語が複数であることを要求するので、(73)が容認可能であるという事実は主文目的語と補文主語が完全に一致しないことを表している。Uchibori はこうした主文の先行詞と補文主語の解釈が完全一致しないコントロールのことをセミコントロール (semi-control) と呼んでいる。

空主語の統語的ステータスに関して、Uchibori は空主語の解釈によってその性質が異なるとしている。彼女の分析によれば、主文の先行詞と補文主語の解釈が完全一致しない場合には pro であり、主文の先行詞と補文主語の解釈が完全一致する場合には PRO となる。空主語が PRO でもあるという主張は、コト節補文には PRO Gate 効果 (Higginbotham 1980) が観察されるという事実に基づいたものである (Uchibori 2000: 112-118)。

(74) PRO Gate 効果: [XP PRO_i...そいつ_i...ことを/よう(に(と))...Op_i

(75) a. ?*[[t それ_iをしそうもない] 誰_j] が [Δ_j どこでそいつ_jの友人を批判すること]_i を実は計画したの?

b. [Δ_j どこでそいつ_jの友人を批判すること]_i が [[t それ_iをしそうもない] 誰_j] によって実は計画されたの?

(75a)は、弱交差効果 (Weak Cross Over effect) により非文になり、(75b)は、(74)に示す PRO Gate 効果の配列と一致するので、補文の空主語は PRO である、というわけである¹⁹。したがって、Uchibori は、コト節補文の空主語は、語彙的主語/pro でも PRO でもありうると結論づけている。すなわち、語彙的主語、pro、PRO は同じ統語的環境に出てくるということになる。語彙的主語/pro および PRO は、前者は補文の時制 T によって認可されるとしているが、後者は補文時制 T の[-past]素性により認可されると主張している。

こうした Uchibori の分析は、補文時制が T[-past]である場合にはそれがコントロール述語であることを予測する。実際に、補文にル形しか現れない場合にはコントロール現象が観察され、タ形が許される場合は非コントロールとなることが多い。これは Fujii (2006) の観察とも通底している。しかし、例えば、以下の(76)の「決定する」における非コントロール性は問題となりうる。

(76) その委員会_iは[Δ_{ij} 学生と話し合うこと]を決定した。

(76)のような例での補文述語のル形を別扱いすることも可能かもしれないが、少なくとも、Uchibori の T[-past]が PRO を認可するという主張が、「決定する」などに見られる非コントロール性をどのように捉えるのかは不明である。

上記の事実に加えて、こうした時制に基づく分析は、既に Fujii (2006) のコントロール現象に関する記述的一般化に対する反論で指摘したように、顕在的な時制を持たないイベント名詞句補部の場合に観察されるコントロール現象を扱えない。

¹⁹ 弱交差効果 (WCO effect) とは、(i-a)に示すように、Op(erator)が A'位置にあり、代名詞とその変数が相互 c 統御することなく代名詞が束縛される変数として解釈されると非文になるという現象である。ここに PRO が現れると PRO-gate 効果によって文は容認される (以下の例は Landau (2013: 187) より引用)。

- (i) a. WCO: *Op_i [pronoun_i] t_i
b. PRO-gate: Op_i [PRO_i pronoun_i] t_i
(ii) a. [PRO_j/ His_i getting his_i car fixed] upset John.
b. Who_i did [PRO_i/??his_i getting his car fixed] upset t_i?

また、(74)(75)で挙げられている PRO Gate 効果を見せるとする例文も、Uchibori 自身が指摘するように判定が難しく、PRO が存在する証拠として挙げるには弱い。

3.4.1.3. Fujii (2006) の分析

Fujii (2006) は、ルタ交替とコントロール性についての観察から、「時制交替の一般化 (Tense alternation generalization)」を提出し(=(77))、構造格の付与と T[+finite]に関する規定をしている(=(78))。

(77) 時制交替の一般化 (Tense alternation generalization)

ある環境 E において、ある時制従属節の T が[+past]と[-past]で交替することができなければ、その T は E において[-finite]をもつ。

(78) T[+finite]のみが構造格を付与する。

(Fujii 2006: 58, 60)

Fujii はルタ交替が起きないコト節を「疑似定形節 (pseudo finite clause)」と呼んでいる。すなわち、コト節補文は一見定形節のように見えるが、実は英語の非定形節と同様に捉えられるべきであるという主張である。そして、コト節補文に見られるコントロール現象は、この疑似定形節から補文主語が主文に移動することから説明されると論じている。これは Hornstein (1999, 2003) の移動分析に基づいたもので、実際に Fujii は、補文の空主語は PRO ではなく、痕跡 t であるという主張を展開している。

(79) a. ジョンが[Δ 選挙に立候補すること]を決心した。

b. [_{VP} John_i [_{VP} [_{CP} [_{TP} t_i T[-fin]] こと] 決心する]_v]



疑似定形節の T は格付与能力を持たないので、補文主語は格をもらうために主文の格が付与される位置に移動する。非コントロールの場合は、補文主語が補文内で格を付与されるので主文に移動する動機はない。

しかし、既に確認したように、コト節補文には顕在的主格主語が出現する。Fujii は、このようなコト節内の主格主語をデフォルト格 (default case) であるとしているが、それ以上の説明は加えていない。仮にデフォルト格が可能であるとする、なぜ主文位置に格のために移動しなければならないのか、また、仮にデフォルト格で補文の主語が補文の主語位置に留まったとして、なぜその場合にも補文主語は必ず主文の要素と解釈が

一致しなければならないのかは明らかでない。

3.4.1.4. Landau (2004, 2006) の定形コントロール分析

日本語のコト節補文コントロールに対して分析を加えた研究ではないが、定形節コントロールという観点からコントロール現象を捉え直した研究として、Landau (2004, 2006) もある。

Landau の一連の研究では、英語のみならず、非定形補文を持たないバルカン諸語についてのコントロールの観察がなされている。pro 脱落言語であるバルカン諸語では、非定形補文の代わりに仮定法補文が存在する。バルカン諸語の仮定法補文はコントロール仮定法補文 (C(ontrolled)-subjunctive) と自由仮定法補文 (F(ree)-subjunctive) に分けられ、前者はコントロールの特徴を示すのに対し、後者はコントロールの特徴を示さず、非コントロールである。

(80) a. コントロール仮定法補文 (C-subjunctive) : コントロール性あり²⁰

I Maria_i prospathise [$\Delta_{i/*j}$ na divasi]. (ギリシア語)

the Mary tried.3sg PRT read.3sg

‘Mary tried to read.’

b. 自由仮定法補文 (F-subjunctive) : コントロール性なし

o Yanisi elpizi [Δ_{ij} na figi]. (ギリシア語)

the John hopes.3sg PRT wins.3sg

‘John_i hopes that he_{ij} will win.’

(Landau 2004: 826-827)

Landau は、こうした定形節におけるコントロールが通言語的に存在することを観察し、非定形節とコントロールを結びつけ、そこに PRO を仮定するという従来の分析方法を破棄する。代案として、Landau は、補文の時制[±T]と一致[±Agr]の二つの素性をたて、この素性の組み合わせによってコントロール性を通言語的に説明することを試みている。これは、素性の交差分類に基づいた説明で、[+T, +Agr]の場合にのみ非コントロールとなり、T と Agr のどちらか一方が欠けたときにはコントロールになるという主張である。T の有無は、補文が独自の時間領域を持っているか否かで判断され、これは時間副詞によってテストされる。以下の(81)の時間副詞を用いた例を見られたい。

²⁰ 補文内の PRT は仮定法補文であることを標示する special particle であるとされる。

(81) a. コントロール仮定法補文 (C-subjunctive)

***tora**, o Yanis kseri/arxizi [Δ na kolimbai **avrio**]. (ギリシア語)
now the John knows-how/begins PRT swim.3sg **tomorrow**
 ‘Now, John knows how/begins to swim tomorrow.’

b. 自由仮定法補文 (F-subjunctive)

tora, o Yanis elpizi/theli [Δ na figi **avrio**]. (ギリシア語)
now the John hopes/wants PRT leave.3sg **tomorrow**
 ‘Now, John hopes/wants to leave tomorrow.’

(Landau 2004: 831)

(81a)は主文と補文が別々の時間指定を受けると非文になることを示しているが、(81b)は主文と補文の別々の時間指定が可能であることを示している。この事実から、(81a)のコントロール仮定法補文は独自の時間領域を持たないのに対し、(81b)の自由仮定法補文は独自の時間領域を持つと判断される。したがって、前者はコントロール、後者は非コントロールになるというわけである。

Landau はこうした時制の特徴と一致の両方を視野に入れて考えることで、コントロールの環境が通言語的に明らかにできると主張している。こうした時制と一致を用いた分類と、その空主語の統語的ステータスは以下の表のようにまとめられる。

表 3 時制素性・一致素性によるコントロールの分類

	+T	-T
+Agr	非コントロール (語彙的主語/pro)	コントロール (PRO)
-Agr	コントロール (PRO)	コントロール (PRO)

補文時制の選択は、コントロール述語の意味から予測され、補文時制は主文述語と C を介して選択関係にある。

Landau は、補文の時制には独立時制 (independent tense) と選択時制 (selected tense) があり、さらに選択時制は、照応時制 (anaphoric tense)²¹と、依存時制 (dependent tense) に分けられるとしている。独立時制とは補文が独自の時間領域を持つことであり、照応時制とは主文と補文のイベントが時間的に一致していなければならないことである。一

²¹ 照応時制は無時制 (no tense) とも呼ばれる。

方、依存時制とは、補文は時間領域を持つが、それが主文述語に依存し時間的な前後関係が決定されているものである。補文の時制が独立時制または依存時制の場合は、その補文が独自の時制領域を持つことになるが、補文の時制が照応時制の場合にはその補文は独自の時制領域を持たないということになる。

ここで、日本語に目を転じ、Landau 流の分析が日本語のコト節補文を選択する述語にも可能であるかを考えてみよう。主文述語と補文時制の間に関係性が見られることは、既に多くの先行研究で指摘されているところであり、本研究でも、既に、コントロール現象と主文述語の意味との関係を捉える段階で指摘した（藤井 2016; Fujii 2012; Nakau 1973; Ohso 1976; Sakaguchi 1990 等）。日本語を例にコト節補文の時制的特徴を見てみると、以下の(82)から(84)のように、独立時制、選択時制の照応時制、選択時制の依存時制の全てが確認できることがわかる。

(82) [独立時制]

- a. 昨日ヒロシは母親に[Δ 来年大学院に進むこと]を伝えた。
- b. 明日ヒロシは母親に[Δ 去年大学院に進んだこと]を伝えるだろう。

(83) [選択時制]：照応時制

- a. *昨日ヒロシは[Δ 明日富士山に登ること]を試みた。
- b. *明日ヒロシは[Δ 昨日富士山に登ったこと]を試みるだろう。

(84) [選択時制]：依存時制

- a. 昨日ヒロシは[Δ 来年は筑波大学を受験すること]を決めた。
- b. *明日ヒロシは[Δ 去年筑波大学を受験したこと]を決めるだろう。

上記の補文時制の三つの分類は、補文の述語形態のル形およびタ形と結びついている。

日本語には述語に形態的な一致が認められないが、仮に、Landau の Agr 素性が日本語の定形性[±finite]に当たると仮定する。すると、照応時制を選択すると考えられる述語は PRO を選択することとなり、コントロール性を生じることが予測できる。これは本研究でのイベント非分離性という概念で括られる述語に当てはまる。しかし、指示・操作性、再帰性という概念で括られた述語は、補文時制・定形性の両方の存在が認められるので非コントロールであることを予測してしまう。したがって、Landau の分析は日本語のコト節補文におけるコントロール現象には適用できない²²。

²² バルカン諸語における定形節コントロールと日本語のコト節補文に見られるコントロール現象を並行的に扱うことに対する問題点は他にも存在する。

一つ目の問題点としては、バルカン諸語のコントロール仮定法補文には顕在的主語が基本的

3.4.1.5. 節のまとめ

本節では、コト節補文のコントロール現象に関して、特に、Uchibori (2000) と Fujii (2006) を取り上げ、それぞれの分析方法とその問題点を指摘した。Uchibori (2000) は、コト節が定形節であることを認めながら、補文主語に PRO が仮定できるような理論を構築した。これは、PRO という空範疇を仮定する点で、英語のコントロール分析と共通する一方、定形節にも PRO が認められるという点で英語における分析とは異なる。Fujii (2006) は、コト節は非定型節であり、コントロール現象は補文主語が主文主語に繰り上がることによって説明可能であるとした。これは、日本語のコト節を英語のコントロール分析と完全に並行的に扱おうとした分析である。本節ではそのどちらにも問題点が存在することを指摘した。

日本語の分析ではないが、定形節におけるコントロール現象を分析したものとして Landau (2004, 2006) も取り上げた。Landau (2004, 2006) は、PRO を単に非定形節のみに認めるのではなく、時制と一致の素性を立て、この二つのどちらかが欠けた時に PRO が認められ、コントロール現象が観察されると論じた。これは通言語的な観点からコントロール現象を捉えようとした試みであるが、この分析が日本語には適用できないことを見た。

3.4.2. 提案

本節では、王 (2011) のコト節補文に関する分析がコト節補文のコントロール現象を説明する上で優れていると考え、王 (2011) の分析に基づいてコト節補文の空主語の統語的実態を論じる。そして、Stiebels (2007) および Gamerschlag (2007) の本質的コントロール (inherent control) と構造的コントロール (structural control) の対立から、本研究での記述がコントロール研究の中どのように位置づけられるかを考察する。

また、多くの先行研究で指摘されてきた補文述語の時制形態の選択とコントロール現

には出現しないという点である。これは、日本語のコト節補文には顕在的主語が出現する点と異なる。

二つ目の問題点は、バルカン諸語のコントロール仮定法補文の単文として認定されるのに対し、日本語のコト節補文を伴う複文は単文とは認められないという点である。Grano (2015) は、ギリシア語のコントロール仮定法補文における補文述語の形態は非過去時制と同形態であるが、統語的に時制が存在するとは認められないと主張し、コントロール仮定法補文は時制を欠いていると主張している。そして、当該の仮定法補文が再構造化して単文化していることを、否定極性表現やスコープといったテストを用いて示している。日本語のコト節補文を含んだ複文は単文とは考えにくく、この点でもバルカン諸語の定形節コントロールと日本語のコト節補文におけるコントロールは異なる。

象との間の関係性は、Landau (2004, 2006) における時制の分類に基づけば、主文述語の意味から無理なく説明できることを示す。

3.4.2.1. 照応的 pro

王 (2011) は、日本語のコト節は定形節であるとした上で、補文の空主語の解釈が一致するメカニズムを pro の特性から説明を試みている。

GB 理論では、PRO は[+pronominal][+anaphoric]という二つの相矛盾した特性を持っているとされ、この特性のために統率されない位置に出現するとされてきた。しかし、Bouchard (1984) は、義務的コントロールと非義務的コントロールの対立に基づいて、PRO は PRO[+anaphoric]と PRO[+pronominal]に分けられると論じている。前者は局所的にコントロールされるもので、後者は局所的にコントロールされなくてもよいものである。Hornstein (1999, 2003) は、Bouchard (1984) と同様の立場をとり、義務的コントロールの PRO は照応的空範疇であり、非義務的コントロールの PRO は代名詞的 PRO であると主張している。すなわち、PRO には照応的 PRO と代名詞的 PRO が存在する、ということである。

さらに Huang (1989) では、pro にもコントロールされるものとされないものが存在するとされ、王 (2011) はこの主張に基づいて、pro も照応的 pro と代名詞的 pro に分けられると主張している。そして、この照応的 pro は分離不可能所有構文と並行的で、再帰代名詞の非頭在的な形であるとした。すなわち、コト節のコントロール性は、コントロール述語がもつ再帰性によって補文の主語位置に照応的 pro を要求することから導かれるということである。そして、代名詞的 pro や照応的 pro の解釈決定は束縛理論に従うとしている。

本研究では、pro を代名詞的なものと照応的なものの二つに分けるという王 (2011) の分析が、コト節補文におけるコントロール現象を説明するのに最も適切であると考えられる。以下の(85)が王 (2011) の主張の簡単なまとめである。

(85) コト節補文の空主語の統語的実態

- a. コントロール現象有り：照応的 pro
 - 再帰代名詞の空範疇
 - コントロール述語が補文の主語位置に要求する
- b. コントロール現象無し：代名詞的 pro
 - 代名詞の空範疇
 - 非コントロール述語が補文の主語位置に要求する

しかし、上記の(85)の規定では、非コントロール述語の場合には顕在的な再帰代名詞が出現しないことを予測してしまい、これは正しくない。(86)は非コントロール述語の「伝える」を用いた例であるが、補文主語の位置には再帰代名詞と代名詞の両方が出現可能である。

(86) ヒロシは[{自分が/彼自身が/彼が}会議に出席すること]を伝えた。

また、王 (2011) は、コントロール現象が観察される場合には補文の空主語の位置に照応的 pro が要求されると規定したのみであり、どのような述語が照応的 pro を要求するかには言及していない。

そこで、本研究では、照応的であることを保証する[+a(naphoric)]という素性を仮定する。そして、コト節補文に見られる空主語はコントロール現象の有無にかかわらず pro であり、主文述語の意味によって[+a(naphoric)]が付与される場合にはコントロール現象が観察されると考える。以下の(87)が本研究の主張である。

(87) コト節補文の空主語は pro である。ただし、主文述語が以下の a から c の意味的特徴を持つ場合は、pro に[+a(naphoric)]が付与され、主文の先行要素と解釈上一致する。

- a. 述語が主文と補文のイベントが非分離であることを要求する場合
- b. 述語が語彙的に指示・操作性を備えている場合
- c. 述語が語彙的に再帰性を備えている場合

以上、本節では、コト節補文の空主語の統語的実態は、王 (2011) が主張するように pro であり、コントロール現象が観察される場合には、pro が照応的になると論じた。

3.4.2.2. 本質的・構造的コントロール

本研究では、述語の意味がコト節補文に観察されるコントロール現象に関与していると論じた。以下に前述のコントロール現象に関わる述語の意味を再掲する。

(88) コト節補文を選択する述語のコントロール性が生じる条件

- a. 述語が語彙的に主文と補文のイベントが非分離であることを要求する場合
- b. 述語が語彙的に指示・操作性を備えている場合
- c. 述語が語彙的に再帰性を備えている場合

(再掲 (65))

こうした述語の意味とコントロール現象との間の関係は、英語を主な観察対象とする限り見えてこないため、伝統的なコントロール分析では考慮されることが少なかった。また、管見の限り、日本語のコントロール現象分析でも考慮に入れてこられなかった。

そこで、本節では、(88)の記述がコントロール現象の分析においてどのような位置づけを占めるのかを、述語の意味からコントロール現象に迫った Stiebels (2007) および Gamerschlag (2007) の観察・分析を基に考察する。

Stiebels (2007) は、補文コントロールを類型論的な立場から捉え、コントロールは構造的に決定するものと主文述語の意味によって決定するものの二種類に分けられると論じている。そして、それぞれを構造的コントロール (structural control) と本質的コントロール (inherent control) と名付けている。前者は構造的な理由でコントロール現象が観察されるものであり、後者は語彙意味的な理由でコントロール現象が観察されるものである。例えば、Stiebels (2007) は、ドイツ語の *hoffen* (hope) と *ermutigen* (encourage) の例を挙げ、前者は構造的に、後者は意味的にコントロール性が決定されるとしている。

(89) a. Maria_i hofft, [$\Delta_{i/*j}$ im Lotto zu gewinnen]²³.

Mary hopes in.the lottery to win.INF

‘Mary hopes to win in the lottery’

b. Maria hofft, [daß ihr Sohn im Lotto gewinnt].

Mary hopes that her son in.the lottery wins

‘Mary hopes that her son will win in the lottery’

²³ INF は Infinitive の略。

- (90) a. Maria_i ermutigt ihren Sohn_j [$\Delta_{*i/j/*k}$ am Rennen teilzunehmen].
 Mary encourages her son at.the race participate.INF
 ‘Mary encourages her son to participate in the race’
- b. ??Maria_i ermutigt ihren Sohn_j (da-zu) [daß er_{j/*k} am Rennen teilnimmt]
 Mary encourages her son there-to that he at.the race participates
 ‘Mary encourages her son to participate in the race’

(Stiebels 2007: 13-14)

上記の(89ab)の対立からわかるように、*hoffen (hope)* は、不定形節と定形節の両方を選択することが可能であるが、前者を選択したときのみコントロール性が生じる。一方、(90)からは、*ermutigen (encourage)* も *hoffen (hope)* と同様に不定形と定形の二種類の補文形式を選択することができるにもかかわらず、*hoffen (hope)* とは異なり、定形節を選択した場合にもコントロール性が生じていることがわかる。Stiebels (2007) はこのような事実に基づいて、主文述語が *hoffen (hope)* である複文に観察されるコントロール現象は構造的コントロールであるのに対し、主文述語が *ermutigen (encourage)* の場合は本質的コントロールであると論じている。そして、Stiebels (2007) は、本質的コントロールは言語によるコントロール・非コントロールのバリエーションが少なく、コントロール現象は主文述語の意味とある程度相関関係があると述べている。

Stiebels (2007) では例として挙げられていないが、こうした主文述語の意味とコントロール現象の間の関係性は英語にも観察される。例えば以下の *repent* が一つの例として挙げられる。

- (91) John_i repented that [$\{*I/*you/he_i/*j/*she/*they\}$ was extravagant].

repent は *that* 節をとることから、英語を対象としたコントロール研究ではコントロール分析の対象にはならないが、補文主語は必ず主文主語と一致しなければならないという制約が存在する²⁴。

英語の *repent* のみならず、定形節補文をとりながら、主文主語と補文主語が必ず一致しなければならない述語として、イタリア語の再帰動詞 *pentirsi* (後悔する) を挙げることもできる。

²⁴ 出水孝典氏（個人談話）による指摘。

- (92) a. Io_i mi pento che [Δ_i ho mangiato la torta].
 I me regret that have eaten the cake
 「私はケーキを食べたことを後悔している」
- b. *Io mi pento che [Gianni ha manigato la torta].
 I me regret that Gianni have eaten the cake
 「私はジャンニがケーキを食べたことを後悔している」

また、韓国語のコントロール現象を詳細に観察している Gamerschlag (2007) は、韓国語の名詞化された補文に観察されるコントロール現象は、主文述語の意味によって決定づけられているとしている。例えば、同じ名詞化補文を選択した場合でも、hwuhoyhata (regret) と kitayha (expect) ではコントロール性に関して差異が見られることを指摘している。前者の場合はコントロール現象が観察されるが、後者は観察されない²⁵。

- (93) a. *Chelswu-nun [ku-uy atul-i ku il-ul ha-n kes-ul]
 C.-TOP he-GEN son-NOM that thing-ACC do-PAST.REL NML-ACC
 hwuhoyhay-ss-ta.
 regret-PAST-DECL
 ‘Chelswu regretted that his son did that.’ (intended)
- b. John-un [Mary-ka nayil o-l kes-ul]
 John-TOP Mary-NOM tomorrow come-FUT.REL NML-ACC
 kitayha-n-ta.
 expect-PRES-DECL
 ‘John expects Mary to come tomorrow.’

(Gamerschlag 2007: 88)

(93) 韓国語のこうした補文節は定形節であることが明らかにされており (Lee 2009 等)、日本語のコト節補文に見られるコントロール現象は、韓国語と並行的に扱えると考えられる²⁶。

²⁵ グロスにおける略語の意味は次の通りである。

DECL declarative clause ender
 FUT.REL future tense plus relativizer
 NML nominalization
 PAST.REL past tense plus relativizer

²⁶ Gamerschlag (2007) は名詞化補文においてコントロール現象が観察される主文述語として、他にも、「始める」「続ける」等のアスペクト述語等を挙げており、その大部分は日本語のものと

興味深いことに、韓国語の hwuhoyhata (regret) は日本語の「後悔する」に当たり、「悔やむ」や「残念に思う」に当たる aeseok ha ge saenggakhata (feel sorry) の場合にはコントロール現象が観察されない。この点は日本語と並行的であり、この事実は、主文述語の語彙的な特性がコントロール現象に関与していることを示している。

- (94) Chelswu-nun [ku-uy atul-i ku il-ul ha-n kes-ul]
 Chelswu-TOP he-GEN son-NOM that thing-ACC do-PAST.REL NML-ACC
 aeseok ha ge saenggak-haek-da
 feel sorry-PAST-DECL

- (95) ヒロシは[彼の息子が筑波大学に落ちたこと]を残念に思った。

Stiebels (2007) は、本質的コントロール述語として、局面述語 (phasal predicates)、含意述語 (implicative predicates)、モーダル述語 (modal predicates)、指示述語 (directive predicates) を挙げている。また、Gamerschlag (2007) は、韓国語の観察を踏まえて、hwuhoyhata (regret) など本質的コントロールに含めており、こうした観察は本研究における日本語のコト節補文を選択する述語の意味と共通している。

そこで、本研究では、Stiebels (2007) および Gamerschlag (2007) にしたがって、日本語のコト節補文におけるコントロール性は、主文述語の意味によって引き起こされるタイプの本質的コントロールであると主張する。すなわち、コト節補文に見られるコントロール現象は、英語の非定形節コントロールとは全く性質の異なるもので、定形節ではあるが、主文述語の意味によって英語のコントロールと似たふるまいをするということになる。

Stiebels (2007) は、以下のように述べ、上記の意味を持つ述語が「イベント依存性」という観点からまとめられると示唆している。

- (96) These predicates share the property that the event denoted by the SOA-argument is in some way dependent on the event denoted by the control predicate (being, for instance, a bring-about relation or a implicative relation). This kind of event dependency seems to require argument sharing (as in the case of event coherence in serial verb constructions)²⁷.

(Stiebels 2007: 54)

意味的に一致する。語彙の詳細は Gamerschlag (2007: 123) を参照されたい。

²⁷ SOA は state of affairs の略。

本研究では、Stiebels (2007) の示唆が日本語のコト節補文におけるコントロール現象でも有効であると考ええる。しかし、この点に関してはより厳密な議論が要求されるので今後の研究に委ねることとし、日本語のコト節補文に観察されるコントロール現象は、Stiebels (2007) や Gamerschlag (2007) の主張する本質的コントロールに分類されるものであると述べるに留めておく。

以上、本節では、Stiebels (2007) および Gamerschlag (2007) の提案する本質的コントロールと言う観点から、日本語のコト節補文におけるコントロール現象をコントロール分析の中に位置づけた。こうした述語の意味に基づいてコントロール現象を分析すると、イベント名詞句補部におけるコントロール性も無理なく説明することが可能になり、節と名詞句における並行性が捉えられるようになる。これは、補文時制に着目した分析を展開する先行研究は捉えられなかった事実である。

3.4.2.3. 補文時制と主文述語の意味

本節では、先行研究で観察されてきた補文時制とコントロール現象の関係が擬似現象であることを、Landau (2004, 2006) の時制の議論に基づいて論じる。

既に記述的な観察で見えてきたように、補文述語の時制形態とコントロール現象の間にはある程度の相関性が見られる。それは、Fujii (2006) のルタ交替の一般化に代表される。

(97) ある文がコントロール性を生じるのであれば、補文の述語はルカタで固定されている。

((9)の再掲)

Uchibori (2000) でも T[-past]が PRO を認可すると主張されており、多くの先行研究が補文時制とコントロール現象を結びつけて考えてきた。しかし、既に述べたように、こうした一般化には、補文時制がルタで交替可能でありながらコントロール性を生じる「後悔する」等の述語や、ルで固定されていながらコントロール性を生じない「決定する」等の述語が存在するという問題がある。また、こうした補文時制の時制形態に基づいた分析では、イベント名詞句補部の場合にもコト節補文と同様のコントロールと非コントロールの対立が見られるということを説明できない。そこで、本研究では、先行研究で指摘されてきたような補文時制はコントロール現象に関係せず、主文述語の意味こそが重要であると論じてきた。

それでは、補文時制の選択はどのような説明が与えられるだろうか。この問いに対して、本研究では、主文述語と補文時制の選択関係は Landau (2004, 2006) の時制の議論から説明可能であると考ええる。

既に指摘したように Landau (2000, 2004) は、補文時制を非選択時制 (non-selected tense) と選択時制 (selected tense) の二種類に分け、さらに選択時制を依存時制 (dependent tense) と照応時制 (anaphoric tense) の二種類に分類し、全部で以下の三種類を認めている。

(98) 補文時制の種類

[非選択時制 (non-selected tense)]

a. 独立時制 (independent tense)

[選択時制 (selected tense)]

b. 依存時制 (dependent tense)

c. 照応時制 (anaphoric tense)

これらの時制の詳細は既に述べたので割愛するとして、ここでは、述語の意味と (98) との関係について言及する。

「試行」「アスペクト」「含意」「モーダル」タイプの述語は、その語彙意味上、照応時制を選択する。これは各々の意味からの帰結であるイベントの非分離性という観点から無理なく説明可能である。そして、日本語では照応時制の具現形としてル形が選択される。これは、日本語のル形が非過去形と基本形の両方を兼ねることから自然に導かれる。

非現実タイプの述語で、指示・操作性を語彙意味として持つ述語は、その語彙的性質上、補文のイベントが主文のイベントの後に発生するので、その点で依存時制を選択する。そして、この場合、非過去のル形が選択される。

再帰性を持つ述語の場合も同様で、「後悔する」であれば、後悔できるイベントは、過去の事実か現在の確定イベントなので、独立時制を選択し、補文のイベントの内容に応じてル形とタ形を選択する。「決心する」であれば、その語彙的性質上、未来のことしか決心できないので、非過去のル形を選択する。

上記の議論に基づくと、コト節補文における補文時制に対する制約も主文述語の意味から無理なく説明可能であることがわかる。したがって、本研究では、コト節補文におけるコントロール現象と関連して見える補文時制の対応関係は疑似現象であると考ええる。

3.4.2.4. 節のまとめ

以上、コト節補文の統語的特徴および主文述語の意味とコントロール現象の関わりを論じた。また、主文述語の意味と補文時制の間の関係性も捉えた。

具体的には、コト節補文の空主語の統語的実態を、王 (2011) にしたがって *pro* であると考え、述語の意味によって補文の空主語の位置に *pro* [+a(naphoric)] が出現すると主張した。そして、主文述語の意味がコントロール現象に与える影響は、Stiebels (2007)、Gamerschlag (2007) の本質的コントロール (*inherent control*) の観点からうまく捉えられると論じた。また、補文時制の選択に関しては、Landau (2004, 2006) の時制の分類が有効であることを示した。

3.5. まとめ

本章ではコト節補文を選択する述語を対象に、そこに観察されるコントロール現象の考察に分析を加えた。

まず、Fujii (2006) のルタ交替の一般化というコントロール現象に関わる記述的一般化が妥当でないことを示し、より主文述語の意味からコト節補文のコントロール現象を明らかにするべきであることを示した。

そして、Landau (2000)、Grano (2015) のコントロールに関わる述語の意味分類にしたがって、コト節補文を選択する述語を意味分類し、コントロール現象には「イベントの非分離性」「指示・操作性」「再帰性」という語彙意味が関与していることを明らかにした。

コト節補文に見られるコントロール現象に対する理論的含意として、先行研究での補文時制に基づいたコントロール現象の分析を退け、主文述語の意味に基づいた本質的コントロール (Stiebels 2007; Gamerschlag 2007) という観点から分析することが妥当であると論じた。また、補文主語の統語的実態としては王 (2011) の照応的 *pro* 分析に従った。

従来、日本語のコト節補文のコントロール現象は、英語の非定形節補文の分析と並行的に扱われることが多く、コト節の定形節としてのふるまいとの矛盾の解決が研究課題であったと言ってよい。このような事情から補文時制に基づいた分析が多くなされてきた。しかし、本章では、補文時制の特徴はコントロール現象には関与しておらず、主文述語の意味こそがコントロール現象に関わっていると考えた。この分析方法をとることで、英語との差異およびその他の言語との共通点を的確に捉えることができる。また、コト節の定形節としての特徴、動詞連用形節補文との相違も無理なく捉えることができ、よりコントロール現象の本質に近づくことが可能となる。本章での分析は、コントロー

ル現象の理解およびその体系化の一助となると考えられる。

第4章 統語的複合動詞と長距離の受け身化

4.1. はじめに

本章では、統語的複合動詞（影山 1993）を分析対象とする。統語的複合動詞は、以下の(1)に挙げられるようなもので、補文主語の解釈は必ず主文主語と一致していなければならない。

- (1) a. ヒロシ_iは[$\Delta_{i/*j}$ ケーキを食べ]過ぎた。
- b. ヒロシ_iは[$\Delta_{i/*j}$ 転倒し]かけた。
- c. ヒロシ_iは[$\Delta_{i/*j}$ 電池を買い]忘れた。
- d. ヒロシ_iは[$\Delta_{i/*j}$ 父親に電話し]直した。

上記の(1)は全て統語的複合動詞の例であり、表面上の形式は同じであるが、伝統的には(1ab)は繰り上げ構造を持ち、(1cd)はコントロール構造を持つと分析されている。すなわち、表面上は同形だがその背後にある統語構造は異なると主張されてきた。

本章では、上記のような統語的複合動詞を対象として、そこに見られる長距離の受け身化現象に焦点を当てる。そして、当該の現象に関する先行研究での提案を整理し、カートグラフィー的視点が有効であることを示す。さらに、統語的複合動詞が Cinque (2006) や Grano (2012, 2015) の機能範疇分析に当てはまることを明らかにし、統語的複合動詞のコントロール性は、繰り上げ構造によって導かれると論じる。

また、Fukuda (2012) の議論に基づきながら、統語的複合動詞の意味と構造の間の対応関係を探る。なお、以下では、複合動詞の前項動詞を V1、後項動詞を V2 と呼ぶ。

4.2. 統語的複合動詞

日本語は膠着言語であるために、文法カテゴリーを表示するための多種多様な接辞の形態を持つ。その中で最も数が多く、そして長い間議論されてきた現象が、「書き殴る」や「書き始める」のような、動詞の連用形（動詞の語幹）に別の動詞が直接後続するこ

とで作られる V-V 型の複合動詞である。複合動詞に関しては、日本語学においても生成文法の理論の枠組み内においても多くの分析が提出されてきたが、その中でも影山 (1993) の複合動詞に関する研究は当該の分野に多大な影響を与えたと言えることができる。

影山 (1993) の分析によれば、日本語の複合動詞は二つのタイプに分かれる。一つは「語彙的複合動詞」であり、一つは「統語的複合動詞」である。前者は形態的には二つの動詞が出現しているにもかかわらず通常の一つの語彙項目と全く同じ統語的ステータスを持つのに対し、後者は形態的にも統語的にも二つの語彙としてのステータスを持つとされている。この二つのカテゴリーの分類を測るテストはいくつかあるが、そのうちの一つは複合動詞の V1 の位置に漢語サ変動詞を挿入するものである¹。以下の(2)に示されるように、語彙的複合動詞の場合は V1 の位置に「購入する」のような漢語サ変動詞が現れないが、(3)に見られるように、統語的複合動詞の場合にはそれが可能である。漢語サ変動詞は統語部門でイベント名詞が軽動詞「する」に編入することによって派生されると考えられている。したがって、V1 の位置に漢語サ変動詞が出現することは、その複合動詞が統語のモジュールで生産されていることを示しており、それが統語的複合動詞であることを示している。

- (2) a. 学生が本を買い漁った。
b. *学生が本を購入し漁った。
- (3) a. 学生が本を買い始めた。
b. 学生が本を購入し始めた。

こうした統語的複合動詞のいくつかは「長距離の受け身化 (long passive)」を許すことが知られている (影山 1993; 岸本 2013; 由本 2005; Matsumoto 1996a; Nishigauchi 1993; Zushi 2005 等)。例えば、以下のような例である。

- (4) a. 本が全て読み終えられた。
b. この一帯には住宅が建て続けられた。

通常、英語などに見られるように、複文は長距離の受け身化を許さない (*All books are

¹ 語彙的複合動詞と統語的複合動詞を区別する他のテストの詳細は、影山 (1993) および Kageyama (1999) を参照されたい。

finished reading)。 (4a)の例では、受け身化の接辞「られ」は V2 の「終える」に接続しているにもかかわらず、V1 の「読む」の項である「本」の移動を引き起こしている。この長距離の受け身化の操作は局所性に違反しており、先行研究では特異な現象であるとされてきた。

そこで以下では、統語的複合動詞を対象に、長距離の受け身化現象が起こる環境を統語的・意味的な観点から記述的に明らかにし、その理論的帰結を論じる。具体的には、Cinque (2006) の長距離の受け身化に対するカートグラフィー的アプローチが日本語の長距離の受け身化にも有効であることを示す。

4.3. 先行研究の概観

本節では、長距離の受け身化に関する先行研究を概観する。主に、影山 (1993) と岸本 (2013) を取り上げる。

4.3.1. 影山 (1993)

本節では影山 (1993) の長距離の受け身化に関する議論を概観する。影山は、統語的複合動詞を、以下のような統語的観点から分類している^{2, 3}。

表 1 影山 (1993) の統語的複合動詞の分類

コントロール	V 終える、V 尽くす、V 損ねる、V 損じる、V 損なう、V 忘れる、V 残す、V 抜く、V 直す、V 慣れる、V 飽きる
繰り上げ	V かける、V 出す、V 過ぎる、V まくる
コントロールと 繰り上げで曖昧	V 始める、V 終わる、V 続ける、V きる

影山の分析の詳細に入る前に、アスペクト動詞の「V 終える」の長距離の受け身化に言

² 影山 (1993) では、この他にも統語的複合動詞が挙げられているが、本節では本章で扱うもののみ挙げる。より詳細な統語的複合動詞のリストに関しては影山 (1993: 143) を参照されたい。

³ ここでは「コントロール」「繰り上げ」「コントロールと繰り上げで曖昧」という用語を用いているが、影山 (1993) ではこれらは「他動詞型補文構造」「自動詞型補文構造」「両型が可能」と名付けられている。ただし、本質的には両者は同様の概念を表しているので、ここでは「コントロール」「繰り上げ」という用語を用いることとする。

及している Nishigauchi (1993) の分析を確認しておきたい。

Nishigauchi (1993) はコントロールと繰り上げの対立から長距離の受け身化に分析を与えている。Nishigauchi (1993) は、受け身化の接辞は接続した動詞の対格素性と外項の意味役割を吸収するという前提のもと、繰り上げ動詞の場合に長距離の受け身化が不可能なのは、繰り上げ動詞が外項に意味役割を与えられないためだとしている。

影山の分析も、この Nishigauchi (1993) と同様の仮定に基づいており、繰り上げ動詞が受け身化できないのは、繰り上げ動詞が対格素性を持っていないからであるとしている。この点において、影山の分析は Nishigauchi (1993) の分析と類似している。しかし、影山はさらに観察を進め、コントロール動詞には長距離の受け身化が可能なものと不可能なものの二種類に分けられることを指摘している。長距離の受け身化が不可能なコントロール動詞としては以下の(5)の例が挙げられる。

- (5) a. *雑誌が買い損ねられた。
- b. *りんごが食べ残された。

「V 損ねる」と「V 残す」は、(6)に見られるように無生物主語を選択することができないので、従来からコントロール動詞であると考えられてきた。また、その事実に加えて、(7)の例からこれらの動詞は対格素性を持っていると考えられる。しかし、それにもかかわらず長距離の受け身化が不可能である。

- (6) a. *雨が降り損ねた。
- b. *嵐が北九州を襲い残した。
- (7) a. ヒロシは機嫌を損ねた。
- b. ヒロシはメモを残した。

以上の観察に基づいて、影山は長距離の受け身化が可能な動詞には以下の(8)のような構造を、長距離の受け身化が不可能な動詞には(9)のような構造を仮定している⁴。

- (8) [_{VP} [_{VP} [_{VP} Obj. V1] V2]v]
- (9) [_{VP} [_{VP} [_{VP} PRO [_{VP} Obj. V1]v] V2]v]

⁴ ここで示している統語構造は、現代の理論モデルに基づいた形で若干表記に変更を加えている。影山 (1993) では、前者は「V'補文」、後者は「VP 補文」と名付けられている。

影山はこの構造を仮定することで、名詞句の移動に関わる制約から長距離の受け身化の可否を説明しようと試みている。

長距離の受け身化が不可能な動詞は、(9)に見られるように V1 が外項まで投射しており、これは一般的に仮定される構造であると考えられる。この場合、V1 が外項まで投射しているので、仮に V2 に受け身化の接辞「られ」が付加されて受け身化すると、V1 の項である目的語が PRO を越えて主語位置に移動してしまう。これは、Rizzi (1990) の「相対化最小性 (Relativized Minimality) ⁵」に違反することとなり、その結果非文となる。一方(8)では、外項の導入に関わる機能範疇 *v* を欠いており、V1 が外項を投射していない。こうした構造を仮定すれば、長距離の受け身化の NP 移動に際して、「相対化最小性」に違反しないので、長距離の受け身化が可能になる。こうした影山の分析は、対格素性と NP 移動の制限を組み合わせたものと捉えることができる。

4.3.2. 岸本 (2013)

岸本 (2013) は、影山 (1993) とは異なり、統語的複合動詞の長距離の受け身化の可能性を NP 移動における相対化最小性という制約から説明せず、当該の現象の可否は、V2 が対格素性を持つか否かで決定すると主張している。

岸本は、統語的複合動詞を「繰り上げタイプ」「他動詞タイプ」「非能格タイプ」に分類している。この中でも他動詞タイプと非能格タイプは両方ともコントロール動詞として分類されるが、後者は対格素性を持たないため、長距離の受け身化が不可能であるという主張を展開している⁶。

⁵ 相対化最小性 (Relativized Minimality) の規定は以下の通り (Rizzi 1990: 7)。

(i) [...X...[...Z...Y...]]の構造において、Z が次の条件を満たさない場合にのみ、X は Y を α 統率する。

a. Z が Y に対して潜在的な α 統率子であり、かつ

b. Z は Y を c 統御するが X を c 統御しない

ここでの α 統率は、項位置と項位置の A 連鎖、非項位置に関わる A' 連鎖、主要部と主要部の連鎖における統率を指している。補文の目的語が主語位置に移動すると、残された目的語の痕跡と移動した主語の間に PRO が介在してしまうため非文となる。

⁶ 岸本 (2013) は影山 (1993) のような長距離の受け身化の NP 移動では説明できないいくつかの言語事実を挙げている。詳細は岸本 (2013) を参照。

表 2 岸本 (2013) の統語的複合動詞の分類

繰り上げ	V かける、V 出す、V 過ぎる、V まくる	
コントロール	非能格タイプ	V 損ねる、V そびれる、V 終わる、V 損なう
	他動詞タイプ	V 終える、V 直す、V 尽くす

しかし、V2 の対格素性のみでは、長距離の受け身化に見られる局所性の違反について説明がつかない。

そこで、岸本は、他動詞タイプの統語的複合動詞において長距離の受け身化が可能であるのは、V2 が対格素性を持つ場合には、V1 が V2 に主要部移動し、この主要部移動の結果、V1 と V2 で再構造化が引き起こされ、長距離の受け身化が可能になるためであると論じている⁷。この再構造化によって局所性の違反がなくなるというのである。したがって、岸本の長距離の受け身化に関する分析は、V2 の対格素性に加えて、主要部移動と再構造化を組み合わせたものと言える。

4.3.3. 先行研究の理論的・記述的問題点

前節で概観した先行研究を踏まえ、本節では、統語的複合動詞の長距離の受け身化がもたらす理論的含意に言及しながら、先行研究の分析では扱えない問題を整理する。

長距離の受け身化を捉えるにあたって、おさえておかなければならない事実として、英語では長距離の受け身化が許されないのに対し日本語ではそれが許されるという事実がある。多くの先行研究は、長距離の受け身化は複文が単文化していることを示す言語事実であるとしており、長距離の受け身化現象は単文化現象である「再構造化 (restructuring)」と密接に関わっているとされる (Bruzio 1986; Cinque 2006; Wurmbrand 1998, 2001; Zushi 2005 等)。

そして、日英の間で長距離の受け身化の可否が異なるのは、日本語は再構造化現象が見られる言語であるのに対して、英語はそれが見られない言語であるという違いに帰せられている⁸。例えば、ドイツ語やイタリア語は再構造化が認められる言語で、実際にこれらの言語には長距離の受け身化が観察されている (Burzio 1986; Cinque 2006; Wurmbrand 1998, 2001 等)。したがって、長距離の受け身化は単なる一言語内の問題と

⁷ 岸本 (2013) の用語は「再構成」であるが、再構造化と変わりないと考えてよい。

⁸ ただし英語にも再構造化現象があると論じている先行研究もある。詳細は Grano (2012, 2015) を参照されたい。

して捉えるべきではなく、対照言語学的な観点も含めて議論されるべきである。

影山 (1993) の分析は、コントロール動詞がその補文サイズに基づいて、vP 補文タイプと VP 補文タイプの二種類に分けられるとするものであった。その分析によると、補文サイズが小さい VP 補文タイプは長距離の受け身化が可能であるが、大きい vP 補文タイプは長距離の受け身化が不可能であるということになる。再構造化の観点から見ると、影山 (1993) の分析は補文のサイズに注目している点で、補文サイズと再構造化とを結びつけて考えた Wurmbrand (2001) の分析と似通っている。

岸本 (2013) においても、再構造化という操作が長距離の受け身化の前提となっており、統語的複合動詞は再構造化と密接に結びついていると考えて支障はない。

こうした再構造化現象は様々な言語に見られることが報告されているが、再構造化を引き起こす再構造化動詞の意味は、主に、モーダル、アスペクト、移動を表す表現に限られることが観察されている。再構造化それ自体は、複文の見せる単文性という構造的な概念と結びついた用語であるが、その再構造化を引き起こす動詞が意味的に制限されているという事実は、再構造化という現象が統語と意味のインターフェイスに関わる現象であることを示している。したがって、日本語の統語的複合動詞の受け身化の問題を考える際は、「意味」を分析の射程に入れる必要がある。

しかし、影山 (1993) は統語的複合動詞を意味的に分類してはいるものの、あくまでも便宜的な分類に過ぎず、長距離の受け身化の分析ではそれを度外視している。岸本 (2013) にも、統語的複合動詞の意味と長距離の受け身化の関連性に関しての言及は特にない。

以上が再構造化という議論と結びつけた上での理論的な問題であるが、統語的複合動詞の受け身化の分析にはまだいくつかの具体的な問題も残っていると考えられる。例えば、岸本 (2013) は、V2 の対格が長距離の受け身化に直接関わっているとしているが、非能格型コントロール動詞の対格の認定の仕方が明確ではない。岸本 (2013) では非能格型コントロール動詞として、以下のようなものが挙げられている。

(10) 非能格型コントロール：損ねる、そびれる、終わる、そこなう

例えば、「V 損ねる」が複合動詞の後項としてではなく本動詞として用いられた際には、以下の(11)に見られるように対格をとり、また、受け身化も同時に可能である。岸本 (2013) の分析がこの事実をどう捉えるのかは不明である。

(11) a. その小屋が景色を損ねている。

b. 景色が損ねられている。

また、岸本 (2013) には具体的な例として出てきていないが、「V 忘れる」も問題となりうる。「忘れる」は(12)に見られるように、対格をとりかつ受け身化が可能であるが、「V 忘れる」は(13b)に見られるように長距離の受け身化ができない。

(12) a. ヒロシは約束を忘れた。

b. 約束が忘れられた。

(13) a. ヒロシは本を買い忘れた。

b. *本が買い忘れられた。

「V 損ねる」や「V 忘れる」は、主語の意味役割が「動作主」というよりも「経験者」とでもいうべきものであり、この意味の違いが受け身化に関与していると仮定することもできる。しかし、この意味役割は、特に「忘れる」の場合は本動詞のときも維持されており、その本動詞「忘れる」の受け身化が可能であるという事実から明らかなように、意味役割に受け身化の可能性を帰することはできない。上記の観察が正しければ、V2 の対格素性だけでは長距離の受け身化は説明できないことになる。

4.3.4. 節のまとめ

本節では、影山 (1993) と岸本 (2013) という二つの先行研究を概観し、残された理論的・記述的問題点を整理した。影山 (1993) が長距離の受け身化に対して V2 の対格素性と NP 移動の制約から説明を与えたのに対し、岸本 (2013) は、長距離の受け身化は V2 の対格素性によってのみ説明できるとした。

分析方法の詳細は異なるが、どちらも後項動詞の特性に着目しているという点では共通している。しかしながら、影山 (1993) の提案ではなぜ長距離の受け身化が可能な V2 は VP 補文構造をとるのかという点が説明できず、また、岸本 (2013) の提案では V2 の対格素性の認定の仕方に問題が残る⁹。

⁹ 岸本 (2013) は、統語的複合動詞の V2 は、本動詞の場合と複合動詞として用いられた場合とで異なることがあるとしている。この前提のもと、岸本 (2013) では、非能格タイプのコントロール動詞が対格素性を欠いていることを、可能文、難易構文等に見られる格交替で確認している。しかし、岸本 (2013) が用いているテストは動作主性に影響を受けており、V2 の対格素性の有無が測れているかは定かではない。詳細は岸本 (2013) を参照されたい。

4.4. 現象の整理

本節では、統語的複合動詞と長距離の受け身化に関する経験的なデータをまとめる。

4.4.1. 統語的複合動詞の意味的分類

影山 (1993) でも便宜的な意味分類は行われているが、その意味と統語現象を結びつけての議論は展開されていない。統語的複合動詞を、影山 (1993) の分類を参考にしながら分類すると以下ようになる。以下の分類は影山 (1993) のものに若干の変更を加えている。

表 3 V2 の意味的特性による分類

過剰 (Excess)	V 過ぎる
起動 (Inception)	V 出す、V 始める
予期 (Prospectiveness)	V かける
継続 (Continuation)	V まくる、V 続ける
習慣 (Habit)	V 慣れる、V 飽きる
未遂 (Failure)	V 忘れる、V 損ねる、V そびれる、V 残す
完了 (Completion)	V 尽くす、V 抜く、V 終える、V 終わる、V 通す、V きる
反復 (Repetition)	V 直す

上記の表を見ると、全ての複合動詞がアスペクト的意味を表しているか、その周辺的意味を表していることがわかる。「未遂」に所属する動詞に関してはそのアスペクト的特性を疑うこともできるかもしれない。しかし、未遂タイプは補文で表されているイベントを開始させられない、または完了させられないということを意味している点で、開始や完了というアスペクト的概念と関わっており、アスペクトの一種として捉えることができる。このアスペクト的概念は、Cinque (2006) の仮定する未遂に関わるアスペクトの *frustrative aspect* に該当するものであると考えられる¹⁰。

¹⁰ V2 のアスペクト的特性に関しては、影山 (2013) も参照。

4.4.2. 統語的複合動詞と長距離の受け身化

以下では、前節での V2 の意味分類をもとに、統語的複合動詞の長距離の受け身化の可能性を整理する。

(14) a. 過剰 (Excess)

*リンゴが食べ過ぎられた。

b. 起動 (Inception)

本が読み{出された/始められた}。

c. 予期 (Prospectiveness)

*太郎が殴りかけられた。

d. 継続 (Continuation)

ビルが建て{*まかれた/続けられた}。

e. 習慣 (Habit)

*デザインが見{慣れられた/飽きられた}。

f. 未遂 (Failure)

*論文が書き{忘れられた¹¹/損ねられた/そびれられた/残された}。

¹¹ 「V 忘れる」は影山 (1993) では受け身化できるとされている。確かに、以下の(i)のような例が実際に認められる。

(i) 傘が置き忘れられた。

しかし、このような例は別物と扱うべき理由がある。すでに影山 (1993) 自身が指摘しているように、形態的には同じであっても、語彙的・統語的複合動詞で曖昧な動詞が存在する。たとえば(ii)に見られる「V 残す」が代表的な例である。

(ii) a. ヒロシは遺言を書き残した。

b. ヒロシはセンター試験のマークを消し残した。

直感的にも明らかのように、(ii-a)は太郎が遺言を「書いて残した」であり、実際に「太郎は遺言を書いて残した」と言い換えることができる。一方、(ii-b)の「消し残した」は「消して残した」ではなく、「消すことに失敗した」と言い換えられるような意味である。つまり、前者は本来の「残す」の意味を残している語彙的複合動詞である一方、後者は未完了の意味を表す「残す」という意味に変化していることになる。

これと並行的な事実、(i)の「V 忘れる」にも当てはまる。(i)に対応する能動文「太郎が傘を置き忘れた」には二つの意味が存在する。一つは「太郎が傘をどこかに放置して忘れてきた」とでもパラフレーズできる意味であり、一つは、「太郎が傘を置くということをしなかった」という意味である。そして、受け身化された(i)は前者の意味しか出ないので、これは明らかに語彙的複合動詞の「V 忘れる」が受け身化している例である。実際に漢語サ変動詞を用いた場合にはこの違いが明確になる。

(iii) a. ヒロシは傘を放置し忘れた。

b. *傘が放置し忘れられた。

実際に(iii-a)の例から明らかのように、語彙的複合動詞の「V 忘れる」の意味である「傘を忘れてきた」という意味は生まれない。また、この場合、長距離の受け身化も不可能である。したがって、統語的複合動詞の「忘れる」は受け身化できないと結論づけられる。「忘れる」の長距

g. 完了 (Completion)

- i) その案は吟味し尽くされた。
- ii) その容疑者は調べ抜かれた。
- iii) 論文が書き{終えられた/*終わられた}。
- iv) その見解は貫き通された。
- v) 牛乳が飲みきられた。

h. 反復 (Repetition)

オリンピックのロゴは作り直された。

4.4.3. 節のまとめ

本節では、統語的複合動詞をその意味的特性から分類し、それらの長距離の受け身化の可能性を観察した。本節での動詞の意味と長距離の受け身化の関係は以下の表にまとめられる通りである。

表 4 長距離の受け身化の可否と V2 の意味

長距離の受け身化可能	起動 (Inception)、継続 (Continuation) 「V 続ける」、完了 (Completion)、反復 (Repetition)
長距離の受け身化不可能	過剰 (Excess)、予期 (Prospectiveness)、継続 (Continuation) 「V まくる」、習慣 (Habit)、未遂 (Failure)、完了 (Completion) 「V 終わる」

4.5. 提案

前節までの観察に基づいて、本節では長距離の受け身化を Cinque (2006) の機能的主要部の階層を用いた説明を援用して分析する。

4.5.1. 再構造化動詞としての統語的複合動詞

Cinque (2006) は、長距離の受け身化は再構造化動詞に見られるとしている。一般に再構造化現象とは、複文にもかかわらず単文現象が見られる場合のことを指す。本章で扱っている統語的複合動詞も再構造化の議論と密接に関わっている。

離の受け身化に関しては、岸本 (2013: 180) の脚注での観察も参照されたい。

日本語において、複文が単文構造を持っていることを示すテストとしては、NPI (Negative Polarity Item) である「しか」が挙げられる。例えば、以下の(15ab)の対立に見られるように NPI は否定辞が同一節内になければならないが、(16)に示されるように移動動詞に見られる目的節ではその同一節内の条件が守られておらず、単文化していると考えられている (Muraki 1978; Kato 1985; Miyagawa 1987 等) ¹²。

(15) a. ヒロシは[カオリが野菜しか食べない]ことを伝えた。

b. *ヒロシは[カオリが野菜しか食べること]を伝えなかった。

(16) ヒロシは[図書館に雑誌しか借りに]行かなかった。

ここで、この単文特性を示す NPI テストを用いて統語的複合動詞を見てみると、それらが全て単文として認められることがわかる。

(17) a. ?ヒロシは[牛肉しか食べ]過ぎない。

b. ?ヒロシは[リンゴしか食べ]かけなかった。

c. ?ヒロシは[推理小説しか読み]まくらない。

d. 結局ヒロシは[一杯分のご飯しか食べ]終わらなかった。

e. ヒロシはいつまでたっても[論文の冒頭しか書き]{始めない/出さない}。

f. ヒロシは[その映画しか見]{慣れなかった/飽きなかった}。

g. ヒロシは[その雑誌しか買い]続けない。

h. ?ヒロシは[小説しか読み]{忘れ/そこね/そびれ/残さ} ない。

i. ヒロシは[小説しか読み]{尽くさ/抜か/終え/通さ/きら} ない。

上記の観察が正しければ、統語的複合動詞は全て再構造化を引き起こす再構造化動詞であるということが言える¹³。

¹² 再構造化の有無を測るテストには主格目的語と V2 の可能形に関わるものも存在するが、統語的複合動詞では動作主性の観点からこのテストをかけづらいためここでは扱わない。

¹³ 一部の複合動詞は「しか～ない」と相性が悪く、この相性の悪さを基に、Oprina (2014) は、複合動詞は再構造化を起こしているものと起こしていないもので分けられるとしている。しかし、明らかに「しか～ない」が節をまたぐ際に容認できなくなるコト節補文と比較すると、複合動詞の場合は容認可能である。したがって、本研究では、「しか～ない」テストを基に複合動詞を二種類に分類するのは妥当ではないと考える。一部の統語的複合動詞と「しか～ない」の相性が悪いのは、V2 の語彙的意味との相性の悪さ（おそらく、V2 の非意図性が関与している）によると考えられる。

4.5.2. 長距離の受け身化の機能範疇分析

Cinque (2006) はイタリア語の再構造化動詞が、Cinque (1999) で提案された機能範疇の階層に生成される機能動詞であると主張している。Cinque (2006) は再構造化の議論の中で長距離の受け身化を取り上げており、長距離の受け身化は、機能範疇の位置と機能的主要部 Voice の間の構造的上下関係から説明できるとしている。

Voice とは、90 年代前半頃から提案され出した機能的主要部のことを指し、外項の導入や対格の付与に関わるとされている (Kratzer 1996 等を参照)。Voice は主に外項の導入に関わる主要部であるので、使役や受け身の操作に密接に関与している。Cinque (2006) による長距離の受け身化に対する主張は以下の通りである。

- (18) If, following current assumptions, we assume that for a verb to be passivized it must raise to Voice^o, either overtly or covertly, to pick up passive morphology (alternatively, to check the features of its passive morphology), it follows that only those verbs that are generated lower than Voice^o will be passivizable.

(Cinque 2006: 69)

つまり、Cinque (2006) によると、受け身化に関わる機能的主要部である Voice^oより構造的に下に生成される機能動詞は長距離の受け身化が可能であるが、Voice^oより上に生成される場合にはそれが不可能であるということになる。その一部であるが、Cinque (2006) では、以下の(19)のような階層があると主張されている。

- (19) Asp_{conative}/Asp_{frustrative/success}

>Voice^o>Asp_{inceptive}/Asp_{continuative}/Asp_{completive}/Asp_{repetitive}

上記の階層が正しければ、Asp_{conative}/ Asp_{frustrative/success} に生成されると考えられる動詞 *provare* (try) および *riuscire* (manage) は長距離の受け身化を許さず、Asp_{inceptive}/Asp_{continuative}/ Asp_{completive}/ Asp_{repetitive} に生成されるものはそれを許すことを予測する。実際に(20)に示されるように、その予測通りの結果が得られる¹⁴。

¹⁴ この階層は、Asp_{inceptive}/Asp_{continuative}/Asp_{completive}/Asp_{repetitive} では長距離の受け身化が可能であるということを示しており、本文中に示される通り、Asp_{inceptive}/Asp_{continuative}/Asp_{completive} においては実際にその通りの結果が得られるが、Asp_{repetitive} に関しては若干の問題がある。以下の例を見られ

- (20) a. *Fu provato ad aggiustare (da Gianni).
 (Lit.) It was tried to mend (by Gianni).
 b. *Non fu riuscito a vedere da nessuno.
 (Lit.) It wasn't managed to see by anybody.
 c. La casa fu finita di costruire il mese scorso.
 (Lit.) The house was finished building the last month.
 d. Quelle case furono iniziate/cominciate a costruire negli anni '20.
 (Lit.) Those houses were started to build in the '20s.

(Cinque 2006: 67-68)

ここで重要なのは、イタリア語においても対格素性が長距離の受け身化を決定づけていないという点である。例えば、(20a)に見られる *provare* (try) は他動詞で対格素性を持つが、長距離の受け身化は不可能である。

ここで、日本語に目を転じてみると、統語的複合動詞は再構造化を引き起こす動詞であり、その一部は長距離の受け身化を許すという点でイタリア語での観察と似通っていることがわかる。統語的複合動詞のうち、長距離の受け身化を許すものは、「起動 (Inceptive)」「継続 (Continuative)」「完了 (Compleitive)」「反復 (Repetitive)」という意味を持っている。また、特記すべき事実として、「未遂 (Frustrative)」を表すアスペクトの「V 忘れる」「V 損ねる」「V 残す」などは対格素性を持っているにもかかわらず、長距離の受け身化が不可能であるという事実があった (以下の例は(14)からの再掲)。

たい。

- (i) a. La casa fu ricostruito.
 the house was rebuilt
 b. *Quelle case furono tornate a costruire.
 these houses were again to build

(i-a)に関しては、Cinque の機能動詞の階層の予測通りに長距離の受け身化が可能である。しかし、ここで長距離の受け身化が可能なのは、*ri* (re) が接頭辞として形態的に動詞に接続してしまっているためであるという批判が考えられる。実際に(i-b)で示されるように、形態的に独立した別の動詞では長距離の受け身化は許されない。この点に関しては今後の課題とせざるを得ない。しかし、この点に関して、Guglielmo Cinque 氏 (個人談話) は、(i-a)に見られる *ri* (re) は形態的には接頭辞であるが、統語的には主要部であると捉えられる可能性があるとしており、*Asp_{repetitive}* は *Voice^o* の上下に生成される可能性を示唆している。

- (21) 本が読み{出された/始められた}。 (起動)
- (22) ビルが建て続けられた。 (継続)
- (23) a. その案は吟味し尽くされた。 (完了)
 b. その容疑者は調べ抜かれた。 (完了)
 c. 論文が書き終えられた。 (完了)
 d. その見解は貫き通された。 (完了)
 e. 牛乳が飲みきられた。 (完了)
- (24) オリンピックのロゴは作り直された。 (反復)
- (25) *論文が書き{忘れられた/損ねられた/そびれられた/残された}。(未遂)

そこで本節では、Cinque (2006) の主張に基づいて、日本語の長距離の受け身化も Voice との上下関係を仮定することで説明可能であると主張する。すなわち、日本語においても、長距離の受け身化が可能な動詞は Voice より構造的に下の位置に生成される一方で、それが不可能なものは Voice より構造的に上の位置に生成されると仮定できるということである。ここでは「未遂」のアスペクトは、Cinque (2006) における *Asp_{frustrative/success}*、「開始」は *Asp_{inceptive}*、「継続」は *Asp_{continuative}*、「完了」は *Asp_{completive}*、「反復」は *Asp_{repetitive}* にそれぞれ当たると考えられ、実際に、(19)に示される Cinque (2006) の機能動詞の階層と並行的である。

この主張が正しければ、既に多くの先行研究で指摘されているように、統語的複合動詞の構造は一様ではないことが、意味との対応関係から明らかになる（統語的複合動詞の構造がいくつか仮定されることに関しては、影山 1993; Kishimoto 2014; Nishiyama and Ogawa 2014; 由本 2005 等を参照）。

また、こうした分析方法を採用すると、日本語の長距離の受け身化が問題なく説明できるだけでなく、イタリア語の再構造化動詞としての共通性も捉えることができる。また、統語的複合動詞の持つ補文構造が異なることに関しては、Cinque (1999) で主張されているような言語普遍的な機能動詞の階層の帰結として解答を与えることが可能となる。

4.5.3. 統語的複合動詞における V2 の機能動詞的特徴

上記の議論で、統語的複合動詞の V2 が単文化現象を見せる再構造化動詞であることを確認した。そして、Cinque (2006) の主張に基づいて、統語的複合動詞における長距離の受け身化の可能性は機能的主要部の階層性から説明可能であると主張した。この分

析に基づく、統語的複合動詞の V2 が外項を持たないことが導かれ、統語的複合動詞における伝統的な繰り上げ対コントロールの対立が認められなくなるということになる。

複合動詞の V2 が、語彙的であるか機能的であるかを判断するのは困難であるが、既に様々な先行研究で議論されているように、統語的複合動詞はいくつかの点において機能動詞的な特徴を持つことが知られている (Fukuda 2012; Nishiyama and Ogawa 2014 等)。本節でもその点について言及したい。

統語的複合動詞の補文は動詞連用形節であり、形態的に V2 は V1 の語幹に接続する拘束形態素である。これは V1 と V2 の間にとりたて詞などの要素が入らないことから判断できる。

(26) a. ヒロシはついに[ご飯を食べること]をさえ忘れた。

b. *ヒロシはついに[ご飯を食べ]さえ忘れた。

(26ab)では、どちらも「忘れる」が主文動詞として用いられている点では共通している。しかし、(26a)のようにコト節を選択する場合には「さえ」というとりたて詞を間に介入させることが可能である一方、(26b)のように複合動詞の場合にはそれが不可能である。もし「さえ」を介入させるのであれば、「[食べさえ]し忘れた」のように「する」という軽動詞を挿入しなければならない。これは「忘れる」が複合動詞においては拘束形態素になっていることを示している。本来は独立形態素である「忘れる」が、複合動詞の場合には拘束形態素となっており、こうした事実是一種の機能化を果たしていることを示唆している。

また、本動詞の場合と複合動詞の場合を比較すると、意味が明らかに変化していると考えられる。例えば以下の(27)の例を見られたい。

(27) a. ヒロシはパソコンを直した。

b. ヒロシはパソコンを作り直した。

上記の(27a)での「直す」は「モノをもとの状態に戻す」という意味があるのに対して、(27b)では「直す」がアスペクト的な「反復」の意味になっている。こうした意味の違いは、複合動詞の場合には機能化が進んでいることを示している。

以上のように、形態や意味機能の観点からは統語的複合動詞がある種の機能化を果た

していることがわかるが、従来の統語的複合動詞の分析からも明らかにされているように、統語的複合動詞は繰り上げとコントロールの対立で分けられ、特にコントロールは語彙的性質を持つことが知られてきた。

例えば、主語の選択制限がその一つとして挙げられる。具体例を挙げると、「過ぎる」は従来から繰り上げ動詞と考えられており、主語に選択制限を課さないのに対し(=(28))、「直す」はコントロール動詞であるとされ、主語に選択制限を課すとされてきた(=(29))。

(28) a. この一帯では雨が降り過ぎた。

b. ヒロシはジュースを飲み過ぎた。

(29) a. *この一帯では雨が降り直した。

b. ヒロシはジュースを飲み直した。

こうした事実は統語的複合動詞が語彙的な側面を残していることを示している。

Cinque (2006) や Grano (2012, 2015) は、再構造化動詞は全て機能動詞であると考えているが、こうした主語の選択制限に対しては独立した特殊な要因があると考えている。例えば、Cinque (2006) は、再構造化動詞の主語の選択制限は、以下の(30)の副詞の例と並行的に、付加的意味役割 (adjunct theta role) を与えるということから説明がなされるとしている (Cinque 2006: 29)。

(30) a. *The house willingly belonged to Bill.

b. *The house hid the horizon carefully.

(30a)は willingly を、(30b)は carefully を用いたものであるが、これらの副詞も主語に一種の「選択制限」を課す。すなわち、Cinque (2006) によれば、再構造化動詞に見られる主語の選択制限はこれと並行的に捉えられるということである。こうした事実は日本語でも観察される。

(31) a. *雨がうっかり降った。

b. *雨が慎重に降っている。

したがって、主語の選択制限は付加的意味役割に影響されているとすることができる¹⁵。

また、コントロールと繰り上げを分類する別のテストとして、補文の受け身化とイディオム表現が挙げられるが、付加的意味役割はこれらのテストにも影響を与えると考えられる。

- (32) a. ヒロシはカオリをうっかり殴ってしまった。

うっかりしていた人＝ヒロシ/*カオリ

- b. カオリはヒロシにうっかり殴られてしまった。

うっかりしていた人＝*ヒロシ/カオリ

- (33) a. ヒロシはカオリを慎重に殴った。

慎重な人＝ヒロシ/*カオリ

- b. カオリはヒロシに慎重に殴られた。

慎重な人＝*ヒロシ/カオリ

- (34) a. #ミイラとりがうっかりミイラとりになった。

- b. #ミイラとりが慎重にミイラとりになった。

(32)(33)は補文述語の受け身化の例であるが、ここで共起する副詞は主語指向性を持つので、能動態と受動態で副詞の指す対象が変わり、表す最終的な意味が異なる。また、(34)はイディオム表現の例であるが、「うっかり」や「慎重に」という副詞が出てくるとイディオム解釈ができなくなる。これは、イディオム表現の動作主体は意志性を持っているものではないことから説明される。

上記の議論が正しければ、コントロール構造を持つことの証左として挙げられてきたテストが、実は、それらの動詞の付加的意味役割を測っていたということになり、従来のコントロール動詞を機能動詞的に捉えることは十分可能である¹⁶。

4.6. 構造と意味の対応関係

以上、本章では、長距離の受け身化という現象を取り上げることで、統語的複合動詞

¹⁵ Zushi (2008) も、主語に選択制限があることが必ずしも主語位置に必ず項が投射されていることを意味していないとしている (Zushi 2008: 347)。

¹⁶ Wurmbrand (2001) は、主にドイツ語のデータをもとに、再構造化を引き起こす動詞を、語彙的 (lexical)、準機能的 (semi-functional)、機能的 (functional) に分類しているが、この分類が日本語にも有効であるかは判断が難しい。また、Wurmbrand (2001) の議論の説明装置としての問題点は Cinque (2006) を参照 (Cinque 2006: 46)。

の意味的特徴とその補文構造の間に見られる関係を捉えてきた。上記の議論が正しければ、統語的複合動詞は全て広義のアスペクト的意味を持ち、一種の機能化を果たしており、Cinque (1999) の主張する機能的な主要部に具現化するということになる。Cinque (1999, 2006) の主張は、述語の意味によって具現化する機能的な主要部の位置が異なるというもので、これはすなわち、述語の意味と（補文）構造の間に一定の関係があるということを示しているものである。

Cinque (1999, 2006) は、これらの主要部は細かく分類され、その区別が厳格に守られており、これが語順にも反映すると主張している。これは、線形順序と構造的な上限関係が対応しているということであり、構造的に下の位置に現れるものが V1 の近くに、構造的に上の位置に現れるものが V1 からより遠くに現れるということである。したがって、同様の構造と意味との対応関係が日本語の複合動詞にも期待されるところである。

しかし、日本語の複合動詞においてこのような厳格な線形順序があるか否かは定かではなく、動詞の僅かな意味の違いに大きな影響を受けるので例文の判定も難しい。よって、実際に V2 の細かな意味の違いと構造の間に対応関係があるかどうかは判断できない。

ただし、統語的複合動詞にも大まかな構造的上下関係が認められることが既にいくつかの先行研究で指摘されている。本章でも、長距離の受け身化との関わりの中で、一部の V2 は Voice より下の機能的な主要部に具現化すると主張した。Voice より下に位置する V2 の意味は「起動」「継続」「完了」「反復」であった。しかし、より原理的な説明を求めるとすれば、これらが単に Voice より下に位置すると規定しただけでは足りない。

そこで本節では、長距離の受け身化が可能な「V 始める」「V 続ける」「V 終わる」「V 直す」、そして「V 終わる」と形態的対応関係にある「V 終わる」に着目し、これらと受け身化の関係を今一度整理し直す。そして、長距離の受け身化が可能な V2 に共通する意味的特徴がどのようなものであるかを明らかにすることで、より明確な形で構造と意味との間の対応関係を提示する。

既に数多くの先行研究で指摘されてきたように、統語的複合動詞にはその補文述語の受け身化ができる場合（短距離の受け身化）と、主文述語の受け身化（長距離の受け身化）が可能な場合が存在する（柴谷 1978; Fukuda 2012; Matsumoto 1996a; Nishigauchi 1993; Shibatani 1973 等）。これらの動詞に関する詳細な統語的分析は Shibatani (1973) によって始まったと言ってもよいが、こうした Shibatani らの観察は、Fukuda (2012) によって整理され新たな分析が提出されるに至った。以下では Fukuda (2012) の議論を概観することでこれらの動詞の意味と構造との間の対応関係を見ていくことにする。

Fukuda (2012) は、それ以前の先行研究をまとめながら、受け身化に関しては以下の表のような事実が得られるとしている。

- (35) a. 店のガラスは暴徒に割られ{始めた/続けた}。
 b. この本が読み{始められた/続けられた}。
- (36) a. その街が攻撃され終わった。
 b. *その本はようやく書き終わられた。
- (37) a. *夏子と穀の靴が磨かれ終えるには、間があった。
 b. その論文が（ジョンによって）読み終えられた。

((35a); Shibatani 1973: 85/ (35b); Nishigauchi 1993: 94 を一部改変/ (36); Matsumoto 1996: 176, 178/ (37a); 柴谷 1978 : 152/ (37b); Nishigauchi 1993: 79)

表 5 アスペクト動詞と長距離・短距離の受け身化

	長距離の受け身化	短距離の受け身化
始める、続ける	OK	OK
終わる	NO	OK
終える	OK	NO

Fukuda (2012) は、これらの四つの動詞が機能動詞であると主張している。そして、Voice を境に、上下に機能的な主要部である H(igh)-Asp(ect)と L(ow)-Asp(ect)が存在するとし、長距離の受け身化が許される述語は L-Asp に、短距離の受け身化が許される述語は H-Asp に具現化すると主張している。これは前節で見た Cinque (2006) の主張と並行的である。

加えて、Fukuda (2012) は、L-Asp は補文のイベントが限界点を持っていないなければならないという制約を課すとしている。彼の主張によれば、「V 終わる」と「V 終える」は補文イベントに限界点があるか否かという点で異なり(=(38))、「V 終わる」は H-Asp に、「V 終える」は L-Asp に具現化する。「V 始める」や「V 続ける」は H-Asp にも L-Asp にも具現化しているが、その場合にも「V 終わる」「V 終える」で見られるようなアスペクト的な差異が見られる(=(39))。

- (38) a. 子供が歩き{*終えた/終わった}。
 b. 子供が坂道を歩き{終えた/終わった}。
 (39) a. この本は読み{始められた/続けられた}。
 b. *政府が国民に批判し始められた。
 c. *太郎がしつこい記者に追いかけて続けられた。

(Fukuda 2012: 986, 989, 990, 992)

(38)の補文動詞は「歩く」であり、歩くというイベントは限界点を持たない。しかし(38b)のように「坂道を」という項によって限界点が設定されれば歩くというイベントにも限界点ができる。「V 終える」は(38ab)の対立に見られるように補文のイベントが限界点を持っていなければならないが、「V 終わる」にはそのような補文に対するアスペクト的な指定は存在しない。(39)は「V 始める」と「V 続ける」の長距離の受け身化の例である。これらの動詞が長距離の受け身化を起こしている場合は **L-Asp** に具現していることになるので、補文のイベントが限界点を持つようなものでなければならない。実際に(39a)のような「本を読む」というイベントであれば限界点が存在するので問題なく容認可能であるが、(39bc)に見られる「批判する」「追いかける」は限界点が存在しないので容認できない。

以上の Fukuda (2012) の主張は、イタリア語とも並行的である。イタリア語の「始める」に対応する動詞である *iniziare* と *cominciare* は短距離の受け身化も長距離の受け身化も許される。すなわち、これらの動詞は構造的に **Voice** の上下に具現化しうることである。そして、Cinque (2006) は、**Voice** の下に具現化した場合には補文のイベントに限界点がなければならないことを観察している。

- (40) a. Furono {iniziate/?cominciate} a costruire solo due case.
 (Lit.) Were begun to build only two houses.
 b. *Furono {iniziate/cominciate} a costruire case.
 (Lit.) Were begun to build houses.

(Cinque 2006: 70)

(40a)では *due case* (two houses) という数量が限定されているために補文のイベントが限定的になっているが、(40b)では数量が限定されない *case* (houses) であり補文イベントが非限定的である。したがって前者では長距離の受け身化が許されるが、後者はそれが

許されないというわけである。

以上、Fukuda (2012) の H-Asp と L-Asp という構造的差異と意味が対応関係にあるという主張を概観してきた。ここで「V 直す」に目を転じてみると、「V 直す」の場合にも長距離の受け身化の環境下では補文のイベントが限定的でなければならないことがわかる。(41a)は補文動詞が「叱る」、(41b)は「書く」であり、前者はイベントが限定的でないのに対し、後者は限定的である。そして補文イベントが限定的でない(41a)の場合は容認されない。

- (41) a. *ヒロシは叱り直された。
b. この論文は書き直された。

「V 直す」はイベントの繰り返しを意味しており、イベントが繰り返されることは補文のイベントが限定的であることを含意する。したがって、「V 直す」も Fukuda の主張する L-Asp に対応すると考えられる¹⁷。

以上、主に Fukuda (2012) の主張をまとめるとともに、受け身化との関連から、構造的差異と意味との間の対応関係を確認した。ここでの H-Asp および L-Asp に具現化する動詞の特徴を便宜的に[±completive]で表すこととし、上記の事実をまとめると以下の表のような結果が得られる。

表 6 V2 の意味と構造的位置

V2 の意味	構造的位置
V 始める I[+completive]	L-Asp
V 始める II[-completive]	H-Asp
V 続ける I[+completive]	L-Asp
V 続ける II[-completive]	H-Asp
V 終わる[-completive]	H-Asp
V 終わる[+completive]	L-Asp
V 直す[+completive]	L-Asp

¹⁷ 「V 直す」の場合は、「先生がヒロシを叱り直した」も容認しにくいので、「V 終わる」と同様、必ず L-Asp に具現化すると考えられる。

ここでの議論の帰結としては、長距離の受け身化を起こす動詞は[+completive]という意味的特徴を持つものであり、構造的には Voice の下に位置するということが得られる。

4.7. 統語的複合動詞におけるコントロール性

最後に、簡単にではあるが、統語的複合動詞に観察されるコントロール性について述べておく。

序論での Stiebels (2007) に基づいたコントロール現象の定義にしたがえば、統語的複合動詞も、主文主語と補文の空主語の解釈が一致するので、コントロール現象の対象となる。本章では、統語的複合動詞における長距離の受け身化を取り上げ、分析を行い、V2 が機能動詞であると主張した。この主張が正しければ、V2 は機能動詞であるために、独自の主語を持たないことになり、最終的な主語は V1 の主語ということになる。すなわち、補文の空主語が主文の位置に繰り上がるということである。したがって、従来のように、統語的複合動詞の補文の空主語には PRO が仮定されるのではなく、移動の痕跡である *t* が存在することになる。

(42) ヒロシ_iは[t_i 筑波大学を受験し]直した。

↑

統語的複合動詞の補文は定形節ではないので、補文の主語が主文の主語位置に繰り上がることは問題ない¹⁸。

上記の議論に基づいて、統語的複合動詞のコントロール性のメカニズムは、照応的 *pro* が空主語の位置に仮定されるようなコト節補文のそれとは本質的に異なったものであると結論づける。

4.8. まとめ

本章では、統語的複合動詞を対象に、長距離の受け身化の分析を試みた。従来の先行研究では、長距離の受け身化は繰り上げとコントロールの二項対立や V2 の対格素性によって説明がなされてきた。こうした分析は統語的複合動詞 V2 の特性をかなりの程度明らかにしてきたと言えるが、統語的複合動詞の再構造化動詞としての特性およびそれを引き起こす意味との関係性を捉えたものは少なかった。

¹⁸ 統語的複合動詞におけるコントロール性には、Hornstein (1999, 2003) に代表されるコントロールの移動分析が関与していることを示唆している。

本章では、統語的複合動詞の意味に着目し、その意味と長距離の受け身化の可否の関係性を整理し、Cinque (2006) の機能的な主要部の階層を用いた分析を援用して日本語の長距離の受け身化に説明を与えた。本章での主張は、主に、統語的複合動詞が再構造化動詞であり、ある種の機能化を果たしていること、そして、Cinque (1999) の機能動詞の階層から長距離の受け身化が説明可能であることの二点に集約される。すなわち、全ての統語的複合動詞が繰り上げ動詞として捉えられ、統語的複合動詞に見られる主文主語と補文主語の解釈の一致は、その帰結として導かれることとなる。また、本章では、Fukuda (2012) の議論に基づきながら、V2 の意味的特性と構造の間に一定の関係があることを確認し、構造と意味との間の関係性を整理した。ただし、本章での機能動詞分析の妥当性は、別の独立した言語事実等で検証する必要性が残されている。

本章の議論が正しければ、統語的複合動詞に見られるコントロール性は、繰り上げ構造によって導かれることとなり、空主語の統語的ステータスは移動の痕跡ということになる。

第5章 イベント名詞句からの抜き出し

5.1. はじめに

本章では、コントロール述語がイベント名詞句を選択する場合を対象として、そこに見られる統語現象と述語の意味の関わりについて考察を加える。

命題を内項に選択する項構造を持つ述語は、コト節だけでなくイベント名詞句も選択することができる。例えば以下の「試みる」と「報告する」の例を見られたい。

- (1) a. ヒロシ_iは[Δ_{ij} 筑波大学に編入すること]を試みた。
b. ヒロシ_iは[Δ_{ij} 筑波大学への編入]を試みた。
- (2) a. ヒロシ_iは[Δ_{ij} 筑波大学に編入すること]を報告した。
b. ヒロシ_iは[Δ_{ij} 筑波大学への編入]を報告した。

「試みる」はコントロール述語であり、補文の空主語は必ず主文主語の「ヒロシ」と一致しなければならない。また、「報告する」は非コントロール述語であり、補文の空主語と主文主語の間に解釈上の一致関係はない。イベント名詞句補部の場合は、節ではなく名詞であるという点でコト節補文とは異なるが、(1b)(2b)の例から明らかなように、イベント名詞句においてもコントロール性と非コントロール性の対立が確認できる。

本章では、このイベント名詞句補部を対象とし、そこに見られるコントロールと非コントロールの対立と、項転移 (Argument Transfer) 現象と数量詞遊離 (Quantifier Floating) 現象の関係性を記述し、述語の意味がこれらの現象に与える影響を解明することを目的とする。

なお、本章でも序論で述べた Stiebels (2007) のコントロールの定義に基づいて議論を進める。Stiebels (2007) ではイベント名詞句補部に関する言及はないが、コントロール現象が二つのイベントの主語の解釈が一致することを指すという観点からすれば、イベント名詞句補部も補文と同様の扱いをすることができる。したがって、本章では、述語が選択する主語（または目的語）とイベント名詞句補部の意味上の主語の解釈の一致が

見られる場合をコントロール現象と考えることになる。

5.1.1. 項転移とコントロール性

述語の持つコントロール・非コントロール性といった特徴は、補文といった節の場合だけでなく、イベント名詞句補部といった名詞句の場合にも維持されることを見た。本節では、イベント名詞句特有の統語現象である「項転移現象」に関するデータを確認し、コントロールと非コントロールの対立と項転移現象の関わりを見る。

日本語では、軽動詞「する」がイベント名詞句を選択した際、(3)に見られるように、イベント名詞の意味上の項が表面上は述語の項として現れる場合がある (Grimshaw and Mester 1988、以下 G&M)。

(3) a. ジョンが[メアリーとの相席]_{VN}をした。

b. ジョンがメアリーと[相席]_{VN}をした。

(G&M 1988: 206)

「する」は軽動詞であり、項に意味役割を与えることができないので、(1b)の「メアリーと」はイベント名詞「相席」の項ということになる。しかし、「メアリーと」が「の」を伴わないで出現していることからわかるように、表面上は「する」の項として現れている。G&M (1988) は、こうしたデータを説明するために、イベント名詞の意味上の項が軽動詞「する」に転移し具現化する「項転移 (argument transfer)」というメカニズムを仮定している。

このような項転移現象は、実質的意味を持たない「軽動詞」に限られず、主文の主語 (または目的語) と補文の主語の一致を求める一部のコントロール述語においても観察されることが、すでに Matsumoto (1996a, b) によって指摘されている。以下の(4)(5)に見られる「試みる」「忘れる」は、どちらも主語に選択制限を課し、また、イベント名詞句に対格を付与しているのでコントロール述語であると考えられる。こうしたコントロール述語は実質的意味を持つので、軽動詞とは明らかに異なるが、軽動詞の「する」に見られるのと同様の項転移が許される。

(4) a. ジョンはそのスパイと[接触]を試みた。

b. ジョンは[そのスパイとの接触]を試みた。

- (5) a. ジョンは家に[連絡]を忘れた。
- b. ジョンは[家への連絡]を忘れた。

(Matsumoto 1996b: 119, 123)

(4a)の「そのスパイ」はイベント名詞「接触」の項であるが、「の」を伴わずに出現しており、(5a)では「家」という「連絡」の項が「の」を伴わずに出現している。これらの事実は、「そのスパイ」と「家」が「試みる」「忘れる」の項として出現していることを示している。したがって、(4)(5)に見られる現象も項転移現象と並行的であることがわかる。

興味深いことに、項転移は非コントロール述語では起きない。以下の非コントロール述語である「報告する」の例を見られたい。

- (6) a. *ジョンはそのスパイと[接触]を報告した。
- b. ジョンは[そのスパイとの接触]を報告した。

したがって、項転移はコントロール性と密接に結びついた現象であることがわかる。このコントロール性と項転移との間の関係は、先行研究の節でもう一度詳細に議論する。

5.1.2. 問題の所在

イベント名詞句補部における項転移現象は、先行研究においていくつかの分析が提出されているが、コントロール述語と項転移の関係性を網羅的に記述したものは管見の限り見当たらない。

例えば、コントロール述語と項転移の関係をはじめに指摘した Matsumoto (1996a, b) では、項転移を起こすコントロール述語は挙げられているものの、項転移を起こさないコントロール述語に関しての記述はない。一つ例を挙げるのであれば、「後悔する」は主文主語と補文主語が一致するという観点から見れば、明らかにコントロール述語であるが (Fujii 2006)、項転移と相容れない。これは、項が転移した(7a)が、項が転移していない(7b)と比較すると明らかに容認できないことからわかる。

- (7) a. *ヒロシはそのスパイと[接触]を後悔した。
- b. ヒロシは[そのスパイとの接触]を後悔した。

先行研究では、主にコントロール述語にのみ項転移が観察されるので、そこに見られる「コントロール性」が項転移に関わっているとされているが、(7a)はコントロール性を備えていながら項転移を許さない例であり、問題となる。したがって、本章では、このようなコントロール述語における項転移現象を出発点として、以下の二点の問題を設定し、主に記述的な観点から答えを与えることを目的とする。

(8) 本章での問題設定

- a. コントロール述語における項転移の条件は何か。
- b. 当該の項転移現象はより一般性の高い文法現象に還元できるか。

本章では、これらの問題設定に対し、「前提性」という概念が有効であることを示し、この概念がイベント名詞句からの数量詞遊離にも関わっていることを明らかにする。そして、当該の現象とコントロール性との間の関わりについて考察を加える。

5.2. 先行研究

本節では、コントロールの観点から項転移現象を扱った先行研究である Matsumoto (1996a, b) および Saito and Hoshi (1998, 2000) を取り上げ、項転移に関する現象の記述語と分析方法を整理する。

5.2.1. Matsumoto (1996a, b) の観察と分析

Matsumoto は、非コントロール述語では項転移が起きないことを、コントロール述語と比較しながら示し、項転移現象にはコントロール性という制約が存在することを確認している。

ここでは「出産する」およびそのイベント名詞「出産」という語彙を用いて述語のコントロール性を測ることにする¹。「出産する」、またはそのイベント名詞「出産」は、主語に女性でなければならないという選択制限を課す。これは(9)の例から明らかである。

¹ コントロール性を測る詳細なテストの概要は、第2章の先行研究を参照されたい。なお、本章では距離を問題とするコントロールのテストのみを採用するが、当該のテストでコントロールと判定されたものは、第2章で挙げた別のテストでもすべてコントロールと判定されることを付記しておく。

- (9) a. 娘が出産した。
 b. *息子が出産した。
- (10) a. 娘の出産
 b. *息子の出産 (「の」の前項は動作主の解釈に限る)

(9a)の主語「娘」は[+女性]という素性を持っているが、(9b)の「息子」は[-女性]という素性を持っている。したがって、(9b)の場合には「出産」の意味と相容れないので容認できない文となる。これと並行的な事実が(10)のように「出産」というイベント名詞句のみの場合にも存在する。

ここで「試みる」と「報告する」というイベントを補部を選択することができる述語を見てみると、「試みる」は「出産」というイベントを選択する場合に主語に選択制限を課すのに対し、「報告する」はそのような制限を課さないという違いがあることが明らかとなる。

- (11) a. *ヒロシは[息子が[Δ 出産]を試みる]と思っている。
 b. ヒロシは[息子が[Δ 出産]を報告する]と思っている。
- (12) a. ヒロシは[娘が[Δ 出産]を試みる]と思っている。
 b. ヒロシは[娘が[Δ 出産]を報告する]と思っている。

したがって、「試みる」はイベント名詞句の空主語 Δ と主文主語の解釈が一致しなければならないコントロール述語であり、「報告する」は主文主語とイベント名詞句の主語が一致しなくてもよい非コントロール述語であることがわかる。この事実を踏まえて項転移現象との関係性を観察すると、「試みる」が項転移を起こすのに対し、「報告する」が項転移を起こさないことが見てとれる。

- (13) a. ジョンはそのスパイと[接触]を試みた。
 b. ジョンは[そのスパイとの接触]を試みた。(再掲(4))
- (14) a. *ジョンはそのスパイと[接触]を報告した。
 b. ジョンは[そのスパイとの接触]を報告した。(再掲(6))

以上の事実に基づくと、以下のような記述的一般化が得られる。

(15) コントロール述語では項転移が起きるが、非コントロール述語では起きない。

こうした項転移現象は、「思考・計画」「可能」「依頼・命令」といった意味をもつコントロール述語に見られることが、Matsumoto で観察されている。例えば以下のような例である。

A. 思考・計画タイプ

(試みる、企てる、忘れる、考える、望む、願う、等)

- (16) a. ジョンは札幌から東京へ[転勤]を望んでいる。
b. ジョンは家に[連絡]を忘れた。(再掲(5a))

B. 可能タイプ

(できる、可能だ、等)

- (17) ジョンは東京へ[出張]ができる。

C. 依頼・命令タイプ

(命じる、義務付ける、求める、許す、認める、許可する、等)

- (18) a. 警察は彼に警察署まで[出頭]を命じた。
b. ジョンはメアリーに大阪へ[出張]を認めた。

(Matsumoto 1996b: 123)

Matsumoto は、以上の項転移現象に関して、G&M (1988) の仮定するような項転移というメカニズムを想定せず、コントロール述語の場合には補文（または補部）からの要素の抜き出しが可能であるとしている。

5.2.2. Saito and Hoshi (1998, 2000) の分析

Saito and Hoshi (1998, 2000) も、Matsumoto (1996a, b) と同様、「コントロール性」が項転移において重要な役割を果たしているとしている。彼らの提案は、「コントロール性」と G&M (1988) の主張する「意味役割の階層性」を組み合わせたものである。項転移における意味役割の階層性とは、「動作主 (Agent) / 起点 (Source) > 着点 (Goal) > 対象 (Theme)」といった階層で、より上位に位置しているものから転移されなければならないという制約である。

彼らの分析によると、イベント名詞句は LF でそれを選択している述語に編入されることによって項転移が可能になる。しかし、コントロール述語であるために、イベント名詞句には顕在的ではないが動作主という意味役割をもった空主語 Δ が存在する。したがって、このままでは G&M (1988) の「意味役割の階層性」の制約のために項転移は阻止される。

そこで、Saito and Hoshi は、イベント名詞句の意味役割「動作主」が、コントロール述語の「動作主」にコントロール関係を通じて「吸収 (absorption)」されるとしている。これによってイベント名詞句内に具現すべき動作主がなくなることになり、項転移における意味役割の階層の順序を守ることができるという分析である。

分析に違いはあれども、Saito and Hoshi の観察も、Matsumoto (1996a, b) の観察同様、「項が転移するためには、イベント名詞句を選択する述語のコントロール性が条件である」という記述の面では共通している。

5.3. 項転移に関するコントロール性以外の制約

前節では、項転移にはコントロール性が関わっていることを確認したが、本節では、新しいデータを観察することで、コントロール性以外の条件が項転移現象に関わっていることを示す。

5.3.1. 叙実コントロール述語と項転移

コントロール述語の一部には、以下の(19)で示すような、補部の内容が真であることを前提とする叙実性 (factivity; Kiparsky and Kiparsky 1970) を持つものが存在する。これらを以下では「叙実コントロール述語」と呼ぶ。

(19) 後悔する、反省する、自白する、打ち明ける、自覚する、等

まず、(19)に挙げた述語群がコントロール性を備えていることを、以下の(20)の「出産(する)」を用いた例で確認する。

- (20) a. {私の娘/*私の息子}は[Δ その病院で出産したこと]を後悔している。
 b. {私の娘/*私の息子}は[Δ その病院で出産したこと]を反省している。
 c. {私の娘/*私の息子}は[Δ 勝手に自宅で出産したこと]を自白した。
 d. {私の娘/*私の息子}は[Δ 勝手に自宅で出産したこと]を打ち明けた。
 e. {私の娘/*私の息子}は[Δ 病院ではなく自宅で出産したこと]をようやく自覚した。

「息子」が容認不可能となる(20)の例で確認できるように、(19)で挙げた述語群はコントロール性を備えていることがわかる。

この事実に加えて、これらの述語は補文のイベントが真であることを前提としなければならないという「叙実性」も備えている。(19)で挙げた述語は、補部にくるイベントが真であることを前提としているので、補部のイベントが真でないことを示す文脈では容認できない。これは、以下の(21)の例で確認できる。

- (21) a. [ケン is 息子に大金の仕送りなどしていないが]
 #ケン is 息子に大金の仕送りをしたことを後悔している。
 b. [ヒロシ is 友人に秘密をばらしてなどいないが]
 #ヒロシ is 友人に秘密をばらしたことを反省している。
 c. [犯人 is 被害者宅に侵入などしていないが]
 #犯人 is 被害者宅に侵入したことを自白した。
 d. [首相 is 官邸から脱出などしていないが]
 #首相 is 官邸から秘密裏に脱出したことを打ち明けた。
 e. [ケンスケ is 弱小クラブに移籍などしていないが]
 #ケンスケ is まだ弱小クラブに移籍したことを自覚していない。

この叙実コントロール述語が重要な意味を持つのは、これらの述語が項転移におけるコントロール性の制約を満たすにもかかわらず、(22)から(26)の例に見られるように項転移を許さないためである。

- (22) a. *ケン is 息子へ[大金の仕送り]を後悔している。
 b. ケン is [息子への大金の仕送り]を後悔している。

- (23) a. *ヒロシは友人に[秘密の暴露]を反省している。
 b. ヒロシは友人への秘密の暴露]を反省している。
- (24) a. *犯人は被害者宅へ[侵入]を自白した。
 b. 犯人は被害者宅への侵入]を自白した。
- (25) a. *首相は官邸から[脱出]を打ち明けた。
 b. 首相は官邸からの脱出]を打ち明けた。
- (26) a. *ケンスケはまだ弱小クラブに[移籍]を自覚していない。
 b. ケンスケはまだ弱小クラブへの移籍]を自覚していない。

以上の事実に基づくと、叙実コントロール述語は、コントロール性を備えているのにもかかわらず、項転移を起こさないということになる。

5.3.2. 指示的表現と項転移

すでに Fujii (2006) でも指摘されているように、イベント名詞句は指示的表現（指示詞「その」や連体詞「例の」）を伴うことができるが、コントロール述語であっても、指示的表現を伴うと項転移が許されない。

- (27) a. ?結局、ケンは京都への例の転勤]を望んでいるようだ。
 b. *結局、ケンは京都へ例の転勤]を望んでいるようだ。
- (28) a. ?ついに、社長は部下にアメリカへのその出張]を許可した。
 b. *ついに、社長は部下にアメリカへその出張]を許可した。
- (29) a. ?ヒロシは[その DC への旅行]を計画している。
 b. *ヒロシは DC へ[その旅行]を計画している。

((29)の例は Fujii 2006: 90 より引用)

したがって、上記の例に見られるように、イベント名詞句を選択する述語がコントロール性を備えていたとしても項転移が起きない場合がある²。

² イベント名詞句が指示詞を伴う場合と伴わない場合とで容認性に差が出ることは基本的には認められるようであるが、この対立を認めない話者も存在する。しかしいずれの例の b を容認する場合でも、項転移が起きている例と起きていない例は同義ではない。

(i) a. ケンは京都への転勤]を望んだ＝ケンは京都へ転勤]を望んだ。
 b. ケンは[その京都への転勤]を望んだ≠ケンは京都へ[その転勤]を望んだ。
 特に(i-b)の「京都へ」は、文外の別の要素との対比の関係なくしては成立せず、焦点解釈を受

5.3.3. 節のまとめ

ここまでの観察をまとめると、以下のような記述的一般化が得られる。

(30) コントロール述語は項転移を起こす。ただし以下の場合を除く。

- a. 叙実コントロール述語である場合
- b. イベント名詞句が指示的表現を伴う場合

コントロール性にのみ着目している先行研究の分析では、(30)の記述的一般化を捉えられない。以降の節では、「前提性」という概念がコントロール性以外の制約として働いていることを明らかにする。

5.4. 提案

本節では、前節の(30)で得られた記述的一般化に対して、Diesing (1992) と Erteschik-Shir (1973) の「前提性」という概念が有効であることを示す³。

5.4.1. 前提性と抜き出し

既に多くの先行研究で指摘されているように、名詞句からの要素の抜き出しには前提性に関わっているとされている。本研究では、その中でも特に、Diesing (1992) と Erteschik-Shir (1973) を取り上げ、前提性と抜き出しの関係を見ていく。

Diesing および Erteschik-Shir によれば、前提性とは「指示対象が文脈内に存在するか否か」であり、この概念を用いることにより以下の抜き出しに関するデータが説明でき

けていると考えられる。事実、「京都へ」が対比のとりたて詞「は」「なら」を伴う場合に容認度はかなり高くなる。

(ii) ケンは京都へ{は/なら}[その転勤]を望んだ。

ここでは具体的な統語的操作の分析に踏み込むことはできないが、一つの可能性として、(i-a)の場合は「京都」がイベント名詞句の内側から外側に移動していると考え、(ii)の場合は「京都」がもともと名詞句の外側の焦点位置に現れていて、名詞句内に空範疇が存在していることによってイベント名詞句との意味的關係が保証されていると考えることができるかもしれない。

この点に関して、軽動詞「する」を用いた場合には、イベント名詞句が指示的表現をともなっているにもかかわらず抜き出しがしやすい。

(iii) 結局、日本チームはアメリカへ[その遠征]をすることになった。

ここでも名詞句の外側の要素「アメリカ」は焦点解釈を受けていると考えられる。本研究では、軽動詞「する」の方が容認度が高いのは、「する」が「望む」等のコントロール述語と比較して意味的に軽く、名詞句の外側の要素の焦点解釈がしやすいためであると考えておく。

³ 前提性については、Jackendoff (1972) やそれに基づいた分析を試みている中島 (2016) 等も参照。

るとされている。

(31) a. *?Who did you see [the picture of ___]?

b. Who did you see [a picture of ___]?

(Diesing 1992: 97、[] および下線は筆者による)

(31)の例は、冠詞の *the* と *a* の違いによって容認度が変わることを示している。(31a)では *picture* は前提的であるためその名詞句から要素を抜き出すことができない一方、(31b)はそれが前提的ではないので、抜き出しが可能である。

上記の(31)の例は冠詞の区別による前提性と抜き出しの例であるが、名詞句を選択する述語の意味によっても抜き出しの可能性が変わることが指摘されている。

(32) a. Who did you see [a picture of ___]?

b. *Who did you destroy [a picture of ___]?

(Diesing 1992: 100、[] および下線は筆者による)

(32)の例が示しているのは、*see* と *destroy* で抜き出しの可能性が異なるということである。Diesing (1992) は、後者を「破壊動詞 (verbs of destruction)」と呼び、「何かを破壊するためには、その存在が前提的でなければならない」とし、そのために抜き出しが不可能になるとしている。以上の(31)と(32)の事実からわかるのは、名詞句からの要素の抜き出しの可否は、冠詞によって決まる名詞句側の観点と、名詞句を選択する動詞側の観点とに分けられるということ、そして、そのいずれもが前提性という概念でまとめられ、説明可能であるということである。

これらの事実を踏まえて Diesing (1992) では以下の(33)のような一般化が提出されている。

(33) 前提的名詞句制約 (Presuppositional NP Constraint) ⁴

抜き出しは前提的な名詞句からは起きない。

(Diesing 1992: 103)

⁴ これは Erteschik-Shir (1973) で観察されていることを Diesing (1992) が定式化したものである。Erteschik-Shir では、意味している概念は同じであるが、*presupposition* ではなく *semantic dominance* という術語が用いられている。

5.4.2. 前提性と項転移現象

ここで、再び項転移現象に目を向けてみると、項転移現象とは、イベント名詞句内の要素が名詞句外に存在しているという現象であることがわかる。そこで、本研究では、前節の Diesing (1992) と Erteschik-Shir (1973) の主張を踏まえて、項転移が叙実コントロール述語および指示的表現と相容れないのは、「前提的な名詞句は要素の抜き出しができない⁵」という一般化に還元できると主張する。

指示的表現は、イベント名詞句が前提的であることを明示するものであり、叙実コントロール述語はその「叙実性」からイベント名詞句は前提的であると捉えられる。つまり、コントロール述語における項転移現象には前提性が関わっていることとなる。したがって、本章での問題設定に対する答えは以下の通りとなる。

(34) 本章での問題設定（再掲(8)）

- a. コントロール述語における項転移の条件は何か。
- b. 当該の項転移現象はより一般性の高い文法現象に還元できるか。

(35) 本章での観察と主張

- a. 「コントロール性」と「名詞句が前提的でないこと」が項転移の条件である。
- b. 項転移現象は、「前提的な名詞句からの要素の抜き出しが不可能」であるという文法現象に還元可能である。

5.5. 前提性と数量詞遊離

前節までの議論で、コントロール述語の項転移現象を捉えるにはコントロール性だけでなく、前提性という概念も重要であることを明らかにした。本節では、本章での主張が項転移とは全く独立した現象である数量詞遊離現象にも有効であることを示す。

既に多くの先行研究で指摘されているように、「属格名詞句+N」という構造において、属格名詞句からの数量詞遊離は基本的に不可能である (Miyagawa 1989)。まず、以下の(36)の例を見られたい。

⁵ 本研究では、他の現象との関わりも視野に入れて、便宜的に「抜き出し」という用語を用いている。これが実際にイベント名詞句内からの「名詞句移動」として捉えられるかは今後の研究に委ねたい。ただし、本章での理論的含意の節で述べるように、ここでの統語的操作が「移動」である可能性は十分考えられる。

- (36) a. 花子は車を三台買った。
 b. *花子は[友達の車]を三人買った。
 cf. 花子は[三人の友達の車]を買った。

(36b)が容認不可能であるのは、「友達の」という属格名詞句からの数量詞遊離ができな
 いためである。しかし、佐藤 (2002) および Kikuchi (1994) で指摘されているように、
 補部にイベント名詞句が来た場合は数量詞遊離が可能な場合がある。

- (37) a. ホンダが[アメリカでの車の生産]を 10 万台計画している。
 b. ホンダが[アメリカでの 10 万台の車の生産]を計画している。
 (38) a. その大学は受験生に[参考書の持ち込み]を 3 冊許した。
 b. その大学は受験生に[3 冊の参考書の持ち込み]を許した。

((37a): Kikuchi 1994: 83, (38a): 佐藤 2002: 118)

そして、佐藤 (2002) は、イベント名詞句からの数量詞遊離には、イベント名詞句を
 選択する述語のコントロール性が関わっているとしており、非コントロール述語である
 「報告する」「知らせる」等では数量詞遊離が不可能であることを観察している。

- (39) a. *太郎は社長に[社用車の購入]を 3 台報告した。
 b. 太郎は社長に[部下が社用車を購入したこと]を報告した。
 (40) a. *社長は秘書に[レーザープリンタの導入]を 4 台知らせた。
 b. 太郎は社長に[部下がレーザープリンタを導入したこと]を知らせた。

(佐藤 2002: 117)

(39b)(40b)では、補文に主文主語とは別の主語が出現していることから、明らかにコン
 トロール述語ではないことがわかる。そして、この場合、(39a)(40a)に示されるように、
 イベント名詞句内の数量詞が名詞句の外側に遊離することはできない。

したがって、数量詞遊離現象は、(A)イベント名詞句内の要素を名詞句外に抜き出す
 点、(B)コントロール性が関わっている点の二点において、項転移現象と並行したふる
 まいを見せる。そして、項転移現象と同様に、叙実コントロール述語を用いた(41)から
 (45)に見られるように、数量詞遊離は許されない。

- (41) a. *日本政府は[留学生の受け入れ]を 30 万人後悔している。
 b. 日本政府は[30 万人の留学生の受け入れ]を後悔している。
- (42) a. *社長は[ハイブリット車の生産]を 300 台反省している。
 b. 社長は[300 台のハイブリット車の生産]を反省している。
- (43) a. *容疑者は[凶器の購入]を 3 つ打ち明けた。
 b. 容疑者は[3 つの凶器の購入]を打ち明けた。
- (44) a. *学生は[本の窃盗]を 3 冊自白した。
 b. 学生は[3 冊の本の窃盗]を自白した。
- (45) a. *犯人はまだ[子供の誘拐]を 3 人自覚していない。
 b. 犯人はまだ[3 人の子供の誘拐]を自覚していない。

また、項転移はイベント名詞句が指示的な表現を伴った際には不可能であるが、これと同様の事実が数量詞遊離にも確認される。

- (46) a. *ホンダが[そのアメリカでの車の生産]を 10 万台計画している。
 b. ?ホンダが[そのアメリカでの 10 万台の車の生産]を計画している。
- (47) a. *その大学は受験生に[参考書の例の持ち込み]を 3 冊許した。
 b. ?その大学は受験生に[3 冊の参考書の例の持ち込み]を許した。

イベント名詞句からの数量詞遊離に前提性が関わっていることは、以下の「可能だ」と「予想外だ」を用いた(48)と(49)の例からも示される。「可能だ」の場合は、主語の表すイベントは非前提的であるが、「予想外だ」の場合は前提的である。これは、あるイベントが予想外であるためには、そのイベントが真であることを前提としていなければならないためである⁶。

- (48) a. [3 千人の留学生の受け入れ]が可能であること
 b. [留学生の受け入れが]3 千人可能であること

⁶ イベントが非前提的である「NP が可能だ」においても、例えば「例の」等の前提的であることを示す連体詞がつくとイベント名詞句からの数量詞遊離は不可能になる。以下の例文中の「例の」は「留学生」ではなく「受け入れ」を修飾するものとする。

(i) *[例の留学生の受け入れ]が 3 千人可能であること
 この点でも、項転移現象と並行性を見せている。

- (49) a. [3 千人の留学生の受け入れ]が予想外であること
 b. *[留学生の受け入れ]が 3 千人 予想外であること

本節で扱っている遊離数量詞は、本来イベント名詞句内の要素であるにもかかわらず、イベント名詞句外に存在している点で項転移現象と並行的である。以上の観察を踏まえると、イベント名詞句からの数量詞遊離にも、項転移同様、前提性の制約が関与していることがわかる⁷。

本節では、イベント名詞句からの数量詞遊離に関する現象を観察し、この現象にも項転移と同様の制約が見られることを明らかにした。本研究での観察が正しければ、これらの現象は、両方とも、「前提的な名詞句からは要素の抜き出しができない」という一つの制約に還元できるということになる。

5.6. 他の現象との関わり：描写二次述部

前節までは、イベント名詞句を補部に選択する述語を対象に、項転移現象と数量詞遊離現象、そしてそこに見られるコントロール性という概念と前提性について議論してきた。本節では、本章での主張が応用できる可能性のある現象について述べる。

5.6.1. 描写二次述部

既に Kikuchi (1994) で指摘があるように、イベント名詞句からの抜き出しとして、描写二次述部もその射程に入ってくると考えられる。描写二次述部も数量詞遊離同様、名詞句内の要素と関係を持つことはできない (Koizumi 1994)。

⁷ 数量詞遊離と前提性の関連で、個体レベル述語 (Individual-level predicate) に見られる主語の「前提性」と、場面レベル述語 (Stage-level predicate) に見られる主語の「非前提性」と数量詞遊離について言及したい (数量詞遊離と前提性に関する議論は例えば Homma et al. (1992) を参照)。例えば、個体レベル述語と数量詞遊離は相容れない (三原 1998)。

- (i) a. *学生が 3 人聡明だ。
 b. 学生が 3 人元気だ。

これは、「聡明だ」のような個体レベル述語の場合には、主語が前提的でなければならないので数量詞遊離が許されないのに対し、「元気だ」のような場面レベル述語の場合にはその主語の前提性が不要いため数量詞遊離が可能であると説明できるかもしれない。

また、Bianchi and Chesi (2012) では、個体レベル述語からの抜き出しが厳しいことが指摘されている。

- (ii) a. *?Of which masterpiece is [one reproduction_] absolutely perfect?
 b. Of which masterpiece is [one reproduction_] already available?

(Bianchi and Chesi 2012: 32, 下線は筆者による)

しかし、本章で扱う「イベントの叙実性による前提性」と個体レベル述語による「モノの存在の前提性」を同様に扱えるかは不明である。これは今後の課題とする。

- (50) a. *花子が[カツオの箱]を生で運んだ。
 b. 花子が[生のカツオの箱]を運んだ。

(Koizumi 1994: 28)

言い換えると、描写二次述部も名詞句内からの抜き出しができないということになる。

しかし Kikuchi (1994) で指摘され、佐藤 (2002) が補足しているように、イベント名詞句の場合には描写二次述部の抜き出しが可能になる場合がある。これが可能になるのはコントロール述語の場合だけで、非コントロール述語の場合には通常の名詞句と同様不可能である。

- (51) a. 太郎はケンに[カツオの試食]を生で勧めた。
 b. 太郎はケンに[生のカツオの試食]を勧めた。
 (52) a. 太郎は妻に[卵の調理]を半熟で頼んだ。
 b. 太郎は妻に[半熟の卵の調理]を頼んだ。
 (53) a. *太郎はケンに[カツオの試食]を生で伝えた。
 b. 太郎はケンに[生のカツオの試食]を伝えた。
 (54) a. *太郎は妻に[卵の調理]を半熟で知らせた。
 b. 太郎は妻に[半熟の卵の調理]を知らせた。

(佐藤 2002: 125)

(51)(52)の主文述語はコントロール述語の「勧める」や「頼む」であるので、描写二次述部のイベント名詞句からの抜き出しが可能である一方、非コントロール述語の「伝える」「知らせる」が用いられている(53)(54)ではその抜き出しが不可能である。

ここで本章での観察と合わせて見てみると、叙実コントロール述語や、イベント名詞句が指示的表現を伴う際には描写二次述部の抜き出しが不可能になることがわかる。

[叙実コントロール述語]

- (55) a. *日本政府は[外国人の受け入れ]をビザ無しで後悔した。
 b. 日本政府は[ビザ無しの外国人の受け入れ]を後悔した。
 (56) a. *社長は[ハイブリット車の販売]を中古で反省している。
 b. 社長は[中古のハイブリット車の販売]を反省している。

- (57) a. *容疑者は[凶器の購入]を新品で打ち明けた。
 b. 容疑者は[新品の凶器の購入]を打ち明けた。
- (58) a. *学生は[マグロの試食]を生で自白した。
 b. 学生は[生のマグロの試食]を自白した。
- (59) a. *犯人はまだ[薬の取引]を高値で自覚していない。
 b. 犯人はまだ[高値の薬の取引]を自覚していない。

[イベント名詞句と指示的表現]

- (60) a. *太郎はケンに[カツオのその試食]を生で勧めた。
 b. ?太郎はケンに[生のカツオのその試食]を勧めた。
- (61) a. *太郎は妻に[卵のその調理]を半熟で頼んだ。
 b. ?太郎は妻に[半熟の卵のその調理]を頼んだ。

上記の観察が正しければ、イベント名詞句からの描写二次述部の抜き出しにも本章での主張が応用できる。

5.6.2. 分裂文

本章の主張は分裂文にも応用できる可能性がある。Hoji (1987, 1990) は、分裂文には二種類あることを明らかにしているが、一つは焦点要素が格や後置詞を伴っている分裂文 (Cleft Construction) で、一つは焦点要素がそれらを伴わない疑似分裂文 (Pseudo-Cleft Construction) である⁸。

- (62) a. ヒロシが_公園で会ったのはカオリにだ。 (分裂文)
 b. ヒロシが_公園で会ったのはカオリだ。 (疑似分裂文)

Hoji (1987, 1990) は、分裂文と疑似分裂文の差異は、島の効果 (Island Effect) にあり、分裂文は島の効果を見せるのに対して、疑似分裂文はそれを見せない(=(63))。

- (63) a. *[実際に_会った人]が熱狂的なファンになったのは、AKB48にだ。
 b. [実際に_会った人]が熱狂的なファンになったのは、AKB48だ。

⁸ 分裂文の分析に関しては平岩 (2005) も参照されたい。

Hoji (1987, 1990) は、分裂文には何らかの移動が関わっており、擬似分裂文の場合にはそのような移動がないとし、それぞれ以下のような構造を仮定している。

(64) a. 分裂文

[_{CP} Op_i [_{TP}.....t_i.....]]のは FOCUS_i だ。

b. 擬似分裂文

[_{NP}[_{CP}[_{TP}.....pro_i.....]]]のは FOCUS_i だ。

ここで、イベント名詞句を選択するコントロール述語と非コントロール述語を用いて分裂文と擬似分裂文を観察してみると、コントロール述語はどちらも可能であるのに対して(=(65))、非コントロール述語は擬似分裂文のみが許されることがわかる(=(66))。

(65) a. その雑誌の記者が[_接触]を試みたのは企業スパイとだ。

b. その雑誌の記者が[_接触]を試みたのは企業スパイだ。

(66) a. *その雑誌の記者が上司に[_接触]を報告したのは企業スパイとだ。

b. その雑誌の記者が上司に[_接触]を報告したのは企業スパイだ。

また、叙実コントロール述語およびイベント名詞句が指示的表現を伴う場合を観察してみると、このどちらも擬似分裂文しか許されることがわかる。以下の(67)は叙実コントロール述語「後悔する」の例、(68)はイベント名詞句が「例の」という指示的表現を伴う例である。

(67) a. *その雑誌の記者が[_接触]を後悔しているのは企業スパイとだ。

b. その雑誌の記者が[_接触]を後悔しているのは企業スパイだ。

(68) a. *その雑誌の記者が[_例の接触]を試みたのは企業スパイとだ。

b. その雑誌の記者が[_例の接触]を試みたのは企業スパイだ。

上記の観察が正しければ、イベント名詞句からの抜き出しに、コントロールと前提性が関わっていることが分裂文の事実からも明らかとなる。

5.6.3. 節のまとめ

本節では、二次述部の抜き出しと分裂文における項の抜き出しを議論することで、本章での主張が別の現象とも関係しうることを観察した⁹。

5.7. 理論的含意

本章ではコントロール述語における項転移および数量詞遊離現象を一種の「抜き出し」と捉え、そこには「前提性」という概念が関わっていることを明らかにした。

本章では、コントロール性、前提性、抜き出しという三つの概念を用いたが、本節では、これらの三つの概念が意味的・統語的にどのようなつながりを持っているかに関して、その理論的含意に言及しながら述べる。

5.7.1. 抜き出しと前提性

まず、「抜き出し」という概念について言及したい。「抜き出し」の具体的な統語操作については踏み込むことができないが、項転移現象、数量詞遊離現象、またそれと並行的に分析できる可能性がある描写二次述部、分裂文を統一的に捉えるための方策として、イベント名詞句内からの「移動」という操作が有効であると考ええる。既に観察したように、Hoji (1987, 1990) の分裂文に関する分析では、移動が関わっているとされている。この Hoji の分析が妥当であるとする、これと並行的な形で別の現象も全てイベント名詞句からの移動として扱うことができる。

⁹ 他にも関わりが考えられる現象として、とりたて詞「ダケ」のスコープが考えられる。この点については佐野 (1998) に言及がある。佐野では以下の(i)に示されるようにある特定の述語がイベント名詞句を選択した際に、イベント名詞句内のダケの解釈に曖昧性が見られることを指摘している (佐野 1998: 4)。

(i) 先生は生徒たちに[動物園だけの見学]を許した。

a. 先生は動物園以外は見学しないことを許した。 (ダケのスコープが狭い)

b. 先生は動物園以外は見学することを許さなかった。 (ダケのスコープが広い)

叙実コントロール述語およびイベント名詞句が指示的表現を伴った場合は、ダケのスコープが文全体に及ぶことはない。

(ii) 日本政府は[ワインだけの輸入]を後悔した。

a. 日本政府はワイン以外は輸入しないことを後悔した。

b. #日本政府はワイン以外は輸入することを後悔しなかった。

(iii) ?日本政府は[ワインだけの例の輸入]を試みた。

a. 日本政府はワイン以外は輸入しないことを試みた。

b. #日本政府はワイン以外は輸入することを試みなかった。

上記の観察に基づくと、ダケのスコープにも前提性が関わっていることがわかるが、ダケのスコープはコントロール現象とは関わっていないので (「日本政府は報道陣に[ワインだけの輸入]を報告した」には二種類の解釈が見られる)、ダケのスコープに関する議論は今後の研究に委ねたい。

項の転移、数量詞の遊離、描写二次述部の抜き出し、分裂文の全てに共通している記述的事実は、「イベント名詞句内の要素を外側に抜き出す」ということである。Saito and Hoshi (1998, 2000) の意味役割の階層に基づいた項転移の分析では、意味役割が関与しない数量詞遊離や二次述部の抜き出しといった現象が扱えないため、この統一性は捉えられない。また、Kikuchi (1994) の c 統御に基づいた数量詞遊離・二次述部の分析も、叙述が関与しない項転移現象を捉えることができない。したがって、本研究ではイベント名詞句からの要素の移動という分析が最も妥当性が高いと考える。

仮に移動分析が正しいとすると、上述の記述的一般化はどのように説明されるであろうか。以下に本章での記述を再掲する。

(69) コントロール述語は項転移を起こす。ただし以下の場合を除く。

- a. 叙実コントロール述語である場合
- b. イベント名詞句が指示的表現を伴う場合

(再掲(30))

(69)の一般化は、イベント名詞句を選択する述語が叙実述語である場合には項転移が起きないという動詞句側からの観点と、イベント名詞句が指示的表現を伴う場合には項転移が起きないという名詞句側からの観点の二つの視点が項転移に関わっていることを述べている。こうした二つの観点を統一的に扱うために、本章では前提性という概念を用いて叙実述語が持つ特性と指示的表現が持つ特性を捉えた。ここでは(69)の項転移の一般化が他の三つの現象にも同様に当てはまるとし、(69)の項転移は「要素の移動」と同義であると考えておく。

まず、叙実述語と移動との関係性であるが、Kiparsky and Kiparsky (1970) の古典的な分析以来、叙実述語はその叙実性が補文の統語構造に反映されているとされ、移動の障壁になることが指摘されている。また、指示的表現であるが、これもイベント名詞句を定的にしていると考えられ、ここから要素の抜き出しができないと考えることができる。このような議論に沿った形で、叙実性や指示的表現のもつ前提性が統語構造に反映されていると考えることは十分可能である。本章で扱ったイベント名詞は、動詞的でありかつ名詞的であるという二つの側面を持っており (影山 1993; Dubinsky 1997; Hoshi 2014 等)、前提性がイベント名詞句の統語範疇を名詞とし、これが抜き出しの障壁となると

考えれば、前提性と抜き出しは決して無関係なものではなくなる¹⁰。

5.7.2. コントロール性と抜き出し

以上が前提性と抜き出しの間の関係の理論的含意であるが、(69)の記述的一般化にはまだコントロール性という概念が残されている。本節ではその点に関して簡単に述べておきたい。

既に第3章で述べたように、コト節補文におけるコントロール現象には述語の意味が関与している。その意味とは以下のようなものであった。

(70) コト節補文を選択する述語のコントロール性が生じる条件

- a. 述語が語彙的に主文と補文のイベントが非分離であることを要求する場合
- b. 述語が語彙的に指示・操作性を備えている場合
- c. 述語が語彙的に再帰性を備えている場合

これらは、Stiebels (2007) や Gamerschlag (2007) が述べるように、それぞれ何らかの形で主文と補文のイベントが依存関係にある。イベントが非分離の場合はもちろん、指示・操作性、再帰性を備えている場合も、主文の語彙的意味によって主文と補文のイベントが関係づけられている。

本節ではイベント名詞句補部を考察対象としてきたが、コト節も名詞的特徴を備えている点で並行的に扱える部分が多いと考えられる。実際に、コントロール現象に関しては全く同様の事実が認められる。そこで、イベント名詞句補部にも(70)のような述語の意味が関与しているとすると、述語が表すイベントと補部が表すイベントが依存関係にあることになる。

こうした二つのイベントの依存関係が要素の抜き出しに密接に関与していると考えられる。イベントが依存関係にあるために、補部にある要素を抜き出しても意味的な差異が生じず、そのためコントロール述語においては種々の抜き出しが可能であると説明が可能である。したがって、今後は、イベントの依存性という概念と抜き出しをより形式的に捉える必要がある。

以上の議論に基づけば、コントロール性・前提性・抜き出しという三つの概念は、述

¹⁰ イベント名詞句の統語範疇と述語の意味の関係に関する議論は Dubinsky (1997) を参照されたい。ここでの議論に沿う形で述べると、「後悔する」等の述語が選択するイベント名詞句は必ず名詞として統語上は扱われるということになる。

語の意味を介しながら互いに結びついていることがわかる。

5.8. まとめ

本章では、コントロール現象の分析対象をイベント名詞句まで拡張し、イベント名詞句補部からの抜き出しとコントロール性の関わりを先行研究にしたがって観察した。コントロール性に関わる抜き出し現象として、項転移、数量詞遊離を取り上げ、述語の意味がこれらの統語現象に与える影響を分析した。

具体的には、叙実コントロール述語および指示的表現を伴ったイベント名詞句を観察することで、二つの独立した現象に「前提性」という概念が関わっていることを示し、これらの現象が「前提的名詞句制約 (Diesing 1992)」の観点から統一的に捉えることができることを主張した。また、この前提性の観点から分析を進めると、イベント名詞句からの描写二次述部の抜き出しも並行的に扱え、また分裂文に対しても新たなデータが提供できることを示した。

本章での記述の理論的含意として、抜き出しが統語的には移動操作で捉えられる可能性を示唆し、述語の意味がイベント名詞句に与える影響と移動の間の関係を考察した。その結果、イベント名詞句からの抜き出しに関する現象には、述語の意味が大いに関与することがわかった。

今後の課題としては、本章での記述を踏まえ、「前提性」という意味的概念と統語構造の関係を精緻化し、「抜き出し」でまとめられたここでの現象を統語的な観点から説明すること、また、コントロール性と「抜き出し」の間の関係をより具体的な形で明らかにしていくことなどが挙げられる。

第6章 補部形式の選択と述語の意味

6.1. はじめに

本章では述語の意味と補文形式選択の関係性を論じる。一部の述語は、以下に見られるように、コト節補文と動詞連用形節補文の両方を選択することができる。また、補文ではないが、イベント名詞句を選択することもある。

- (1) a. ヒロシは健康のために[毎朝運動をすること]を続けた。
b. ヒロシは健康のために[運動をし]続けた。
c. ヒロシは健康のために[運動]を続けた。
- (2) a. ヒロシは[新幹線で出勤すること]に慣れた。
b. ヒロシは[新幹線で出勤し]慣れた。
c. ヒロシは[新幹線での出勤]に慣れた。
- (3) a. ヒロシは[書類を提出すること]を忘れた。
b. ヒロシは[書類を提出し]忘れた。
c. ヒロシは[書類の提出]を忘れた。

「続ける」「慣れる」「忘れる」は、以下のような項構造を持ち、全て命題を補部に選択することができる動詞である。これは以下の(4)のように表すことができる。

- (4) a. 続ける[動作主, 命題]
b. 慣れる[経験者, 命題]
c. 忘れる[経験者, 命題] (下線部は外項であることを意味する)

そして、コト節・動詞連用形節・イベント名詞句の三つの補部形式が、命題という意味役割に対応すると考えられ、どれを選択するかによって得られる表面形式が異なる。上記の(1)はアスペクトの「続ける」の例で、他にも「始める」「終わる」が同様に複数の

補文形式を選択しうる。(2)はいわゆる叙実 (factive) の「慣れる」で、同じグループに入るものとして「飽きる」が挙げられ、この動詞も「慣れる」同様、複数の補文形式を選択することができる。(3)は「忘れる」が用いられた例である。また、(1)から(3)のそれぞれの b は、影山 (1993) の統語的複合動詞に当たる。これは前項動詞である V1 の位置に漢語サ変動詞が出現していることからわかる。加えて、(1)から(3)に見られる a から c の対立は、時制の有無でも異なることから、定形と非定形の対立の観点からも捉えることができる。

アスペクト複合動詞の研究をはじめとして、複合動詞に関しては多数の先行研究が存在するが、アスペクト動詞や叙実動詞を対象として補文形式の選択関係に分析を加えた先行研究は管見の限り見当たらない。ただし、「忘れる」に関しては、動詞連用形補文とコト節の間の選択関係を視野に入れた先行研究の分析がある。

そこで、本章では命題を補部を選択する「忘れる」を対象に、「忘れる」を用いた文を一括して「忘れる文」と呼ぶことにし、「忘れる」の意味と補部形式の関係を記述的な観点から明らかにする。そして、アスペクト動詞や叙実動詞も観察することで、これらの述語に見られる意味と補部形式の選択関係を再構造化の観点から捉える。

6.2. 先行研究の分析と問題点

本節では先行研究での観察と分析方法を概観し、本章で扱う問題の所在を明らかにした後、先行研究の問題点を指摘する。

6.2.1. 先行研究

本節では、先行研究の観察を踏まえて観察対象のデータを整理し、問題の所在を明らかにする。前節で既に述べたように、「忘れる」は複数の補文形式をとることが可能である¹。

- (5) a. ヒロシは[部屋に鍵をかける{こと/の}]を忘れた。
- b. ヒロシは[部屋に鍵をかけ]忘れた。

これらの文は、補文における時制の有無、複合化の有無など様々な点で異なっているが、

¹ 前節では、文を名詞化する補文化辞として「こと」のみを挙げたが、「忘れる」は「の」も選択することができる。こうした「こと/の」の選択に関する問題は本研究では立ち入らない。「こと」と「の」の選択関係に関する議論としては、例えば橋本 (1990) を参照。

そういった差異とは一見関係ないように見える現象が、Tomioka (2006) および岸本 (2015) で観察されている。

Tomioka (2006) や岸本 (2015) で観察されているのは、補文動詞への付加詞の修飾の可否である。これらの先行研究では忘れる文が主な観察対象とされ、様々な補文形式を選択できる「忘れる」の補文動詞に対する付加詞の修飾の可能性についての議論が展開されている。

Tomioka (2006) は「美術館で」という付加詞を用いた例を挙げ、補文形式によって補文動詞の付加詞修飾の可能性に違いが出ることを観察している。以下の(6)の例を見られたい。

(6) a. 太郎は美術館で写真を撮るのを忘れた。

→OK 太郎は美術館に行っていない

→OK 太郎は美術館に行っている

b. 太郎は美術館で写真を撮り忘れた。

→NO 太郎は美術館に行っていない

→OK 太郎は美術館に行っている

上記の(6)の例は「のを忘れた」の形式と、「し忘れた」の形式で、場所句「美術館で」が補文動詞を修飾できるか否かを示した例である。(6)の対立は、(6a)では、「太郎が美術館に行っていない」という解釈が可能な一方、(6b)ではその解釈が不可能であることを示している。すなわち、(6a)においては、「美術館で」が「写真を撮る」を修飾できるのに対して、(6b)では不可能であるという対立を表していることになる。つまり、前者では、「太郎は公園でアイスを食べる」「海で泳ぐ」「美術館で写真を撮る」などのたくさんあったやるべきことのうちの一つの「美術館で写真を撮る」ということを忘れたという解釈が可能であるということである。一方の(6b)ではそのような解釈が不可能であり、「美術館で」自体は「忘れた」を修飾していると考えられ、「美術館で何かをすることを忘れた」は「美術館にすること」を含意しているので、「美術館に行っていない」という解釈が不可能であるということになる。この解釈はすなわち、前者では「美術館で」が補文動詞を修飾できるのに対して、後者ではそれが不可能であることを示している。

分析方法は異なるが、Tomioka (2006) と同様の観察を岸本 (2015) が行っている。Tomioka (2006) では「美術館で」という、補文動詞も主文動詞である「忘れる」も修飾

可能な付加詞が用いられており、それに基づいた解釈の違いによる観察が扱われている。一方、岸本 (2015) は、「忘れる」を修飾不可能な付加詞を用いて同様の観察を行っている。(7)の例を見られたい。

- (7) a. *店員は品物を包装紙で包み忘れた。
b. 店員は品物を包装紙で包むことを忘れた。

(岸本 2015: 84)

「包装紙で忘れる」は意味的に容認不可能であるから、「包装紙」は「忘れる」を修飾することができず、「包む」を修飾しなければならない。これを前提とすると、(7a)が容認不可能であるという事実は、付加詞「包装紙で」が「包む」を修飾できないことから導き出せることになる。つまり、複合動詞である「V 忘れる」においては補文動詞を付加詞が修飾できないことになる。

以上が、忘れる文における付加詞修飾の可能性の可否である。付加詞が時制や複合化の有無とは関係ないことは以下の(8)が容認可能なことから明らかである (岸本 2015 も参照)。

- (8) ヒロシはプレゼントを包装紙で包み直した。

複合化した「直す」は「反復」を意味しており、「包装紙で直す」は容認不可能であることから、(8)の「包装紙」は「包む」を修飾していると考えられる。(8)は(7a)と形式的には同じであるが、容認可能性においては逆の結果が得られる。

上記の先行研究の観察をまとめると、以下のような一般化が得られる。

- (9) 「{こと/の}を忘れる」の形式では付加詞が補文動詞を修飾できるが、「～し忘れる」の形式では付加詞が補文動詞を修飾できない。

以上、忘れる文において、補文形式が補文動詞への付加詞修飾の可能性に影響を与えることを見た。以下ではこれらの現象に対しての先行研究の分析を概観する。

Tomika (2006) は、付加詞の修飾可能性に対して、忘れる文の構造からの説明を試みている。「美術館で」などの場所句は、イベント項を修飾する要素で、このイベント項が統語的には Voice に相当するものであるという前提の下、「V 忘れる」の補文動詞は

Voice を構造的に欠いているとしている。この分析は、「V 忘れる」と「する{こと/の}を忘れる」の統語構造の違いに基づいた説明である。

一方、岸本 (2015) は、Tomioka (2006) とは対照的に意味的な観点から説明を与えている。具体的には、忘れる文の構造が付加詞の修飾可能性に関わっているのではなく、「忘れる」の意味自体が付加詞の修飾を許さないという考えに基づいて分析を行っている。岸本は複合動詞のうち、「忘れる」、「残す」、「落とす」、「漏らす」などを「出来事の不成立を表す動詞」とよび、これらの動詞は、補文動詞が表すイベントの生起を動詞の意味構造のレベルで否定するものだとしている。

具体的に言うと、例えば「食べ忘れる」の場合、「食べる」というイベントそのものが発生しなかったということである。それと対照的なのが「損じる」で、「書き損じる」は「書く」という行為自体は発生している。岸本は付加詞が動詞を修飾した際、付加詞が出来事にある種の限定を加える機能を持っており、ここには、「動詞で表す出来事が成立するという前提」が存在すると述べている (岸本 2015: 85)。したがって、「忘れる」の補文動詞が付加詞の修飾を許さないのは、「忘れる」がその補文イベントが発生していないことを意味するためであるとしている。実際に「名前を鉛筆で書き損じた」などは、「鉛筆で」が「書く」を修飾することができ、容認可能である。

さらに、このような補文動詞のイベントの発生の有無には、「忘れる」の「複合化」の有無に関わっているとしている。複合化している場合は、「動詞句のレベル」でイベントの成立が否定されるため付加詞の修飾が不可能であり、「する{こと/の}を忘れる」の場合には複合化が起きておらず、「文レベル」で出来事の否定が可能になり、付加詞を含んだイベントの否定ができる。つまり、複合化が起きた際にのみ補文動詞のイベントが動詞句レベルで「不成立」を意味するため、補文動詞への付加詞修飾が不可能であるという主張である²。

以上が、Tomioka (2006) と岸本 (2015) の分析方法の概観である。Tomioka (2006) が構造的な分析を試みたのに対し、岸本 (2015) は「忘れる」の意味的な分析を行ったという点で、両者の分析は対照的である³。

² こうした相違を生む意味的メカニズムに関する具体的な提案は岸本 (2015) を参照されたい。

³ 岸本 (2015) では、複合化が付加詞の修飾に関わっているとしているので、正確には意味だけに基づいた分析ではない。しかし Tomioka (2006) が、「忘れる」を例に挙げその意味的特性を考慮に入れなかった点を鑑みると、岸本 (2015) は他の複合動詞との差異を説明するために「忘れる」の意味的な特異性に言及しており、意味的な分析と言ってよいと考えられる。

6.2.2. 先行研究の問題点

前節では忘れる文に関して、補文形式と補文動詞に対する付加詞の修飾の可否を、Tomioka (2006) と岸本 (2015) にしたがって確認したが、本節ではそれらの先行研究の分析の問題点を指摘する。

まず、Tomioka (2006) の構造的分析であるが、「忘れる」と付加詞修飾の関係を考察するにあたって、構造的分析がどこまで有効かは明らかでない。Tomioka (2006) は Voice とイベント項を関係づけており、この Voice がないことが付加詞の修飾を阻んでいると説明しているが、この分析は経験的に間違った予測をする。Voice が外項に関わる統語範疇であるとし (Kratzer 1996)、これと日本語の使役の接辞「させ」が外項を導入する働きをすることを合わせて考えると、「し忘れる」は「させ忘れる」とすることはできないと予測することになるが、以下の(10)の例で確認できるように、「させ忘れる」は容認可能である⁴。

(10) 太郎は花子に写真を撮らせ忘れた。

Tomioka (2006) は場所句に関してのみ言及しており、実際に場所句が他の付加詞より構造的に高い位置に現われるため、「忘れる」の補文動詞を修飾できないという可能性はある (付加詞の種類と複合動詞の関係の構造的な分析は Kishimoto (2014) を参照)。しかし、後の節で指摘するように、「忘れる」の意味的特徴に言及しなければ説明できないような現象が存在する。

そこで本稿では、岸本 (2015) の分析にしたがって「忘れる」の意味的な面に着目する必要があると考える。すなわち、本研究では、「忘れる」が意味的に前項動詞の表すイベントの不成立を表すために、イベントの成立を前提とする付加詞の修飾が不可能であるという分析を基本的に踏襲することにする。しかし、岸本 (2015) の分析では考慮に入れられていない点がある。それは、「忘れる」に見られる二種類の意味である。「忘れる」には「あるイベントが未成立」であるという意味と、「あるイベントの成立の忘却」という二種類の意味が認められる。本章ではこの二つの意味を考慮に入れて、この二種類を認めることが、忘れる文における付加詞の修飾関係の問題を解決するにあたって重要であることを示す。

⁴ これと同様の批判が Takahashi (2013) にも見られる。詳細は Takahashi (2013) を参照。

6.3. 二種類の「忘れる」と付加詞の修飾

本節では、まず、英語の *forget* の二種類の意味を確認した上で、日本語でも「忘れる」に二種類の異なった意味が認められることを確認する。

6.3.1. 二種類の「忘れる」

英語の *forget* は定形の *that* 節、非定形の *to* 不定詞節の二種類の補文形式をとることが可能である⁵。そしてそれらの補文形式に対応して意味的に異なった二種類の *forget* があることが広く認められている (Karttunen 1971, Grano 2015 等⁶)。

- (11) a. John forgot to send the letter to Mary.
- b. John forgot that he sent the letter to Mary.

日本語でパラフレーズするならば、(11a)は「ジョンが手紙を送ることをしなかった」という意味で、(11b)は「手紙を送ったという事実をジョンが忘れた」ということになる。いわば、(11a)は、否定と似た意味を表しており、(11b)は、「事実の忘却」を意味している。

これらの意味的な差異は、論理関係を視野に入れることでうまく捉えることができる。Kiparsky and Kiparsky (1970) は、補文イベントが真であることを前提とする動詞を「叙実動詞 (factive verb)」とよび、非叙実動詞と区別している。また、Karttunen (1971) は、叙実動詞とは異なった動詞群として、補文イベントの成立が主文動詞に依存している動詞を挙げ、これらを「含意動詞 (implicative verb)」と呼んでいる。これらに基づくと、(11a)が Karttunen (1971) の「含意動詞」であり、(11b)が Kiparsky and Kiparsky (1970) の「叙実動詞」ということになる。したがって、前者の *forget* は選択するイベントの成否に関わっているのに対して、後者の *forget* はイベントの成立を前提としている。つまり、*forget* の否定的意味特徴から、含意動詞の *forget* は補文のイベントが成立していないことを意味することになる。それに対して、叙実動詞の *forget* は補文のイベントは成立していることを意味する。こうした定形・非定形の違いによる *forget* の意味の相違は、主文動詞 (*forget*) が否定された時に顕著に現れる。

⁵ *forget* は動名詞節も取り得るが、ここでは割愛する。

⁶ 二種類の「忘れる」に関しては、イタリア語の *dimenticare* (忘れる)、ドイツ語の *vergessen* (忘れる) も参照 (Cinque 2006, Wurmbrand 1998 等)。

- (12) a. John didn't forget to send the letter to Mary.
 b. John didn't forget that he sent the letter to Mary.

(12)では主文動詞の *forget* が否定されているので、含意動詞である(12a)では補文イベントの成否が逆転し、「ジョンは手紙を送った」ということを意味する。これは、否定辞の有無で補文の内容の肯否が逆転するということの意味している。これに対し、(12b)では「ジョンが手紙を送った」という事実には変わらず肯否の逆転は見られない。これは叙実動詞が補文イベントの成立を前提としているためである。(12)で見られる真偽値の差異は、*forget* に含意動詞・叙実動詞という異なった二つの意味を仮定することでもよく捉えることができる。

それでは、以上の議論を踏まえて、日本語の「忘れる」に目を転じてみよう。日本語にも英語と同様の差異が認められるが、これは特に複合動詞の「忘れる」と「こと/のを忘れる」を比較するとわかりやすい。

- (13) a. 太郎は[部屋の鍵をかけ]忘れた。 (→鍵はかけなかった)
 b. 太郎は[部屋の鍵をかけた{こと/の}]を忘れた。 (→鍵はかけた)
 (14) a. 太郎は[部屋の鍵をかけ]忘れなかった。 (→鍵はかけた)
 b. 太郎は[部屋の鍵をかけた{こと/の}]を忘れなかった。 (→鍵はかけた)

(13a)が「鍵をかけなかった」という意味になるのに対して、(13b)は、「鍵をかけたという事実を忘却した」という意味になる。この差異は(14)のように、主文動詞「忘れる」を否定することによって明らかになる。(14a)では「鍵をかけなかった」から「鍵をかけた」へと肯否が逆転しており、(14b)ではそのような肯否の変化は見られない。したがって、「忘れる」は、動詞連用形節を選択する場合には含意動詞、「～たこと」「～たの」という形式を選択する場合には叙実動詞の「忘れる」ということになる。

6.3.2. 二種類の「忘れる」と付加詞の修飾の可能性

前節では、英語同様日本語にも二種類の「忘れる」が認められることを確認した。本節では、補文動詞への付加詞修飾の可能性が、この二種類の「忘れる」と密接に関わっていることを明らかにする。

岸本 (2015) は、「付加詞の修飾はイベントの成立を前提とする」とし、動詞連用形節を選択する複合動詞の「忘れる」は補文動詞のイベントの不成立を意味的に指定する

ため、付加詞の修飾が許されないとした。本研究では、基本的にこの主張を踏襲するが、複合化の有無は付加詞の修飾に直接は関わっておらず、純粹に「忘れる」の意味、すなわち「補文イベントの不成立を表す」という意味から説明可能であると論じる。つまり、ここでの主張は、含意動詞の「忘れる」は、「補文イベントが不成立」であることを意味するので付加詞の修飾が不可能であるというものである。以下に岸本 (2015) の例を再掲する。

(15) a. *店員は[品物を包装紙で包み]忘れた。

b. 店員は[品物を包装紙で包むこと]を忘れた。(再掲 (7))

(15a)は容認不可能であるが、これは「忘れる」が含意的意味を表しているためであり、イベントが不成立であることを意味するためである。一方(15b)の容認可能性は叙実の意味を表していることから導かれる。叙実性は過去に起きたイベントのほか、未来での確定イベントや恒久的イベントにも認められるものであり、(15b)は過去のイベントの実現が確定しているということではなく、非過去の確定的イベントを前提としていることによる叙実性であり、補文で表されているイベントが確定的であるということになる。以降の節では、「忘れる」の含意・叙実の意味が付加詞の修飾に関して重要であり、複合化の有無は関係ないことを、数量詞遊離現象とイベント名詞句からの項転移現象を観察することで明らかにする。

6.3.3. 「忘れる」の意味と数量詞遊離

佐藤 (2002) では、イベント名詞句およびコト節からの数量詞遊離に関する観察がなされているが、そこでは以下のようなデータが挙げられている。

(16) a. ?教授は太郎に[論文を書き直すこと]を 3 本命じた。

b. *教授は太郎に[論文を書き直したこと]を 3 本報告した。

(佐藤 2002:119)

数量詞はホスト名詞句と構造的に相互 c 統御関係になければならないが (Miyagawa 1989)、(16a)のように例外的に容認可能な例が存在する。佐藤 (2002) は、(16)の容認可能性の差異は「補文イベントの確定性」によっており、「未確定のイベント」からは数量詞遊離が可能であり、「確定イベント」からはそれが不可能であると結論づけている。

佐藤によるイベントの確定性の規定は以下の通りである。

- (17) 補文末に「スル」形しか許されないイベントを「実現が未確定なイベント」、「スル」形以外の形式が許されるイベントを「実現が確定されたイベント」と呼ぶ。

(佐藤 2002: 119)

「命令する」は、「～したことを命令する」ということができず、「スル」形しか補文末に許されないで、ここでは「実現が未確定なイベント」ということになる。一方で「報告する」は「～したことを報告する」と「～することを報告する」の両形式が可能であり、「実現が確定されたイベント」ということになる。したがって、(16a)は「論文を書き直すこと」というイベントがまだ未確定であるのに対して、(16b)は補文イベントが確定しているという事実から(16)の数量詞遊離の文法性の差異が生まれるということになる。

ここで「忘れる」に目を転じてみよう。「忘れる」は以下の例で見てとることができるように、補文末にはスル形以外の形式が問題なく現れる。

- (18) カオリは[朝食を食べ{る/た/ている}{こと/の}]を忘れた。

したがって、佐藤 (2002) の分析が正しければ、コト節、ノ節を選択する「忘れる」は数量詞遊離を許さないはずであるが、実際にはそれが可能である。以下の例を見られたい。

- (19) a. ヒロシは[3つの電球を外す{こと/の}]を忘れた。

- b. ?ヒロシは[電球を外す{こと/の}]を 3つ忘れた⁷。

一見(19)の事実は佐藤 (2002) の分析の反例かのように見えるが、これは「忘れる」に「確定」「未確定」の二種類の意味が認められるとすることで問題なく扱うことができる。ここでは、この確定的イベントを選択する「忘れる」が叙実の「忘れる」に当たり、

⁷ 当該の文の文法性は完璧ではないが、補文が過去形の場合と比べると明らかに容認度に差があることがわかる。

(i) *太郎は[電球を外した{こと/の}]を 3つ忘れた。
また、「の」の方が「こと」よりも数量詞遊離が起こりやすく、「こと/の」の選択によって容認のしやすさが変わるようであるが、この点の分析に関しては今後の課題としておく。

未確定的イベントを選択する「忘れる」が含意の「忘れる」に当たる。そして、数量詞遊離が起きた環境下での付加詞の修飾を観察してみると、文の容認可能性が低いことがわかる。

(20) a. ヒロシは[3つの電球を手で外す{こと/の}]を忘れた。

b. *ヒロシは[電球を手で外す{こと/の}]を 3つ忘れた。

上記の(20b)では、「忘れる」は複合化していないため、岸本 (2015) の分析では付加詞が補文動詞を修飾できると予測するが、実際には不可能である。これは、数量詞がコト節やノ節から外に出ている場合は、「忘れる」の補文動詞の表している内容が「未確定イベント」、つまり含意的意味を持っていないからである。そしてこの事実、含意の「忘れる」の場合には付加詞が補文動詞を修飾できないためである、ということから説明可能である。したがって、付加詞の修飾に関する問題は、複合化した「忘れる」にのみ生じるのではなく、複合化していない「忘れる」の場合にも生じうることが明らかになる。コト節やノ節において付加詞の修飾が可能なのは、これらが叙実的意味も表しうるためであり、付加詞の修飾の可能性を検討するにあたっては、「忘れる」の含意と叙実の二種類の意味に焦点を当てる必要がある。

本節では、補文動詞に対する付加詞修飾の可能性は「忘れる」の二種類の意味から説明できると論じた。以下がその記述的なまとめである。

(21) 補文イベントが不成立（未確定）であることを表す含意の「忘れる」の場合は、補文動詞に対する付加詞の修飾が不可能である。補文イベントが確定的であることを表す叙実の「忘れる」の場合には付加詞の修飾が可能である。

6.3.4. 「忘れる」の意味とイベント名詞句

前節では、補文形式に関係なく、二種類の「忘れる」の意味自体が補文動詞に対する付加詞修飾の可能性に関与していると論じ、数量詞遊離現象と関係づけることでその事実を示した。本節では、この差異を認めるべき別の独立した証拠を、イベント名詞句を選択する「忘れる」と項転移に関するデータで示す。

既に指摘したように、「忘れる」はイベント名詞句も補部を選択することができる。これは例えば(22)のような例である。

(22) ヒロシは[連絡]_{VN}を忘れた。

本節ではこの例を用いて、イベント名詞句を選択する場合においても付加詞の制約が働くことを見る。ここでは、その具体的な例の検証に入る前に、「忘れる」に見られる項転移現象に関する事実を先行研究にしたがって確認したい。

既に第 5 章で確認した通り、日本語では、「[イベント名詞句]をする」という環境においてイベント名詞の意味上の項が「する」の項として現れうることが指摘されている (Grimshaw and Mester 1988; Matsumoto 1996a, b; Saito and Hoshi 1998, 2000 等)。例えば以下のような例である。

(23) a. 太郎は[花子との相席]をした。

b. 太郎は花子と[相席]をした。

「花子」はイベント名詞「相席」の意味上の項であり、「する」の意味上の項ではないが、(23b)はその「相席」の項である「花子」が、表面上は「する」の項として現れている例である。したがって、(23b)のような例の場合は、「相席」から「する」への「項転移 (Argument Transfer)」が起きているとされている。

このような項転移現象は「する」のような軽動詞のみに限られず、一部の意味的に重い動詞においても認められることが Matsumoto (1996a, 1996b) によって観察されている。例えば以下の「始める」「試みる」のような例である。

(24) a. 彼らは東京へ[物資の輸送]を始めた。

b. ジョンはそのスパイと[接触]を試みた。

(Matsumoto 1996a: 77)

しかし、このような項転移現象は全ての動詞において観察できるわけではない。以下の(25)では「発表する」が用いられているが、この場合は項転移が生じない。

(25) a. *ジョンは東京へ[旅行]を発表した。

b. ジョンは[東京への旅行]を発表した。

(Matsumoto 1996a: 82)

佐藤 (2002) の数量詞遊離の説明が項転移現象にも有効であるとするのであれば、「発表する」と「始める」「試みる」で差が生まれるのは、前者の補文が確定イベントであるのに対し、後者の補文が未確定イベントであるからということになる。

さて、ここで「忘れる」を見てみよう。Matsumoto (1996a) は、「忘れる」も項転移を引き起こす動詞であることを指摘している。

(26) ジョンは家へ[連絡]を忘れた。

(Matsumoto 1996a: 80)

ここでは具体的な項転移のメカニズムの分析には入らずに、イベント名詞句を選択した際の「忘れる」の意味と項転移を起こした際の「忘れる」の意味を確認したい。「忘れる」が単にイベント名詞句を選択した際には「含意的意味」「叙述的意味」のどちらも表すことができるが、項転移が起きた際には「含意的意味」しか表さなくなる。

(27) a. ヒロシは家への連絡]を忘れた。

b. ヒロシは家へ[連絡]を忘れた。

(28) a. ヒロシは家への連絡]を忘れなかった。

b. ヒロシは家へ[連絡]を忘れなかった。

(27a)では、「太郎は家へ連絡をしたが、その事実を忘却した」という叙実的解釈も、「太郎は家へ連絡しなかった」という含意的解釈も可能である。これらの事実は(28)の否定の文脈で明らかになる。(28a)では、家への連絡を忘却した解釈（叙実的解釈）と家への連絡が未達成の解釈（含意的解釈）の両方が可能であるが、(28b)では家への連絡の忘却という解釈（叙実的解釈）は不可能であり、家への連絡を達成したという解釈（含意的解釈）のみが可能である。したがって、項転移が起きた(27b)の環境では、「忘れる」が補文イベントの未成立を意味する含意動詞であり、付加詞の修飾が不可能であることが予測されるが、(29)に見られるように、実際にその通りの結果が得られる。

(29) a. *ヒロシは家へ[携帯電話での連絡]を忘れた。

b. ヒロシは家への携帯電話での連絡]を忘れた。

ちなみに、「連絡」という名詞句は通常は問題なく付加詞と共起でき(=30a))、さらに、

項転移を引き起こす別の動詞、例えば「試みる」などは、「忘れる」とは対照的に、選択する名詞句が付加詞を伴うことが問題なく可能である(=(30b))。

- (30) a. [家への携帯電話での連絡]が災害時には難しい。
b. ヒロシは家へ[携帯電話での連絡]を試みた。

以上の事実は、付加詞の修飾の有無に「忘れる」の複合化が関与していないことを示しており、これらの事実からは、むしろ「忘れる」そのものの意味が関与していることが明らかとなる。

上記のイベント名詞句を選択する「忘れる」に関する事実は、イベント名詞句からの数量詞遊離（佐藤 2002）を用いても明らかにすることができる。佐藤（2002）はコト節と数量詞遊離の関係を「補文イベントが確定しているか否か」という「イベントの確定性」で捉えているが、これはイベント名詞句の際も同様である。

- (31) a. 日立が[学生の採用]を 300 人中止した。
b. *太郎は社長に[社用車の購入]を 3 台報告した。

（佐藤 2002: 114, 117）

(31)に見られるように、「中止する」は補文イベントが未確定であるが、「報告する」は補文イベントが確定的である。これが正しければ、イベントが未成立の含意的「忘れる」ではイベント名詞句から数量詞が遊離でき、一方の叙実的「忘れる」からはイベント名詞句から数量詞の遊離ができないということになる。実際に、(32)に見られるように付加詞と遊離数量詞は共起不可能である。

- (32) a. *大学は[学生の推薦入学での受け入れ]を 300 人忘れた。
b. 大学は[300 人の学生の推薦入学での受け入れ]を忘れた。
cf. 大学は[学生の受け入れ]を 300 人忘れた。

したがって、イベント名詞句を選択する「忘れる」の項転移現象ならびに数量詞遊離現象を観察することで、「忘れる」の二種類の意味と付加詞の修飾の可能性が明らかにな

る⁸。

以上本節では、主に項転移現象に基づいて、複合化していない「忘れる」に、本章の問題設定で提出したものと同一付加詞の修飾の制約が見られることを明らかにした。そして、これらは「忘れる」に「～しなかった」というイベントの不成立を意味する含意的「忘れる」と、ある確定イベントの忘却を意味する叙実的「忘れる」の二種類の意味を認めることで説明可能であることを見た。この事実は、先行研究で主張されたような「複合型」対「非複合型」という対立だけでは説明できず、「忘れる」そのものの二種類の意味を認め、その意味に基づいた付加詞の修飾の可能性を論じなければならないことを示唆している⁹。

6.3.5. 「忘れる」の意味と補部の形式

本節では、岸本 (2015) の意味が付加詞の修飾の可能性の有無に関わっているという主張を踏襲しつつも、「忘れる」の複合化はその可否の可能性には関わっていないこと

⁸ 本稿では項転移と数量詞遊離という独立した現象を扱っているが、この二つにはイベントを選択する述語の「コントロール性」も関わっていることが明らかにされている (Matsumoto 1996a, b; 佐藤 2002)。したがって、ここでの「忘れる」に関して述べるのであれば、項転移や数量詞遊離が可能な含意動詞としての「忘れる」はコントロール動詞であり、それが不可能なものは叙実動詞の「忘れる」で非コントロール動詞ということになる。コントロール性と含意・叙実性、さらには項転移・数量詞遊離といった現象の平行性に関する考察は、第5章を参照されたい。

⁹ 岸本 (2015) は「店員は品物を包装紙で包むことを忘れた」という例に基づいて、「忘れる」が補文動詞と複合していない場合には付加詞の修飾が可能であるとしている。本稿の立場では、この文の場合は叙実の「忘れる」であるため、付加詞の修飾が可能であるということになる。これが叙実の「忘れる」であることは、「忘れる」の意志性に注目することによって示すことができる。例えば、含意の「忘れる」は、(i)に見られるように、意志性を必要とする副詞「きっぱり」と共起できず、また命令形になることもない。一方で(ii)に見られるように、「ことを忘れる」は、同様のテストで意志性を持ち得ることがわかる。

(i) a. *店員はきっぱり品物を包み忘れた。

b. *品物を包み忘れろ。

(ii) a. 店員は品物を包装紙で包むことをきっぱり忘れた。

b. 品物を包装紙で包むことを忘れろ。

したがって、上記の例から、「包装紙で包むことを忘れる」が、複合動詞の場合の含意の「忘れる」とは異なっていることがわかる。本稿ではこれが叙実の「忘れる」であると主張する。ちなみに、「きっぱり」の例は青柳・張 (2014) の以下の例を参考している。

(iii) *太郎はきっぱり恋人のことを日記に書き忘れた。 (青柳・張 2014 : 431)

青柳・張 (2014) では「きっぱり」が様態副詞の例として挙げられ、「きっぱり忘れる」との容認可能性の違いに基づいて、複合動詞の「忘れる」においては文法化による意味変化が起きているとしている。しかし、本稿では、含意・叙実による「きっぱり」の修飾の可否は、「きっぱり」の持つ意志性の問題であるとしておく。こういった叙実の「忘れる」と含意の「忘れる」の意味的な差異の詳細な議論は今後の課題としたい。

を明らかにした。補文形式と「忘れる」の二種類の意味の関係は以下の通りである¹⁰。

表1 補文形式と意味の対応関係：「忘れる」

補部形式	意味
コト節（ノ節）	含意・叙実
動詞連用形節	含意のみ
イベント名詞句	含意・叙実

上記の観察が正しければ、含意の「忘れる」は全ての補部形式を選択することができ、叙実の「忘れる」は動詞連用形節以外の補部形式を選択することができるということになる。しかし、含意も叙述も同じ補部形式を選択するとしてよいのだろうかという疑問が残る。すなわち、ここでの含意の「忘れる」が選択するコト節（ノ節）と、叙実の「忘れる」の選択するコト節（ノ節）は同様の性質を持つものと考えられるだろうか、という疑問である。

そこで、コト節（ノ節）に関しては、補文内の時制形式にも着目したい。既に前節までで観察してきたように、含意の「忘れる」は補文動詞の時制形態が非過去のル形しか許されないが、叙実の「忘れる」は補文動詞の時制形態がルとタで自由に交替可能である¹¹。イベント名詞句に関しては、時制に関する指定は無指定であると考えておくと、「忘れる」の意味と補部形式の間には以下のような対応関係が考えられる。

¹⁰ イベントが不成立である場合に付加詞の修飾が不可能であるならば、否定をともなった含意動詞「忘れる」の場合にはイベントが成立することを意味しているので付加詞の修飾が可能になることを予測する。しかし実際には以下の(i)に見られるように容認可能性はかなり低い。

(i) *花子は[論文をパソコンで書き]忘れなかった。

含意動詞の「忘れる」の否定によるイベントの成立は、否定辞の「書き忘れる」というイベントそのものの否定によって出てくるものであり（「書く」というイベントが成立しないことが「ない」）、「忘れる」が「書く」というイベントの不成立を指定していること自体は変わらないため付加詞の補文動詞への修飾が依然として不可能であると考ええる。本稿での主張は「補文イベントの不成立」が付加詞の修飾に関与しているというものであり、ここでは「含意」という意味的特徴で代表させているが、必ずしもこの「含意」という論理的意味から付加詞の修飾の可能性が説明されるものではない。

¹¹ 非過去・過去の対立は、「ル」と「タ」という形態で必ず具現化するわけではないが、ここではそれぞれを「ル」と「タ」で代表させておく。

表 2 「忘れる」の意味と補部形式

意味	補部形式
含意の「忘れる」	I 補文時制がル固定のコト（ノ）節
	II 動詞連用形節
	III イベント名詞句
叙実の「忘れる」	I 補文時制がルタ交替可能なコト（ノ）節
	II イベント名詞句

以上本節では、「忘れる」の二種類の意味を確認し、それが補文動詞への付加詞修飾と関係していることを論じた。そして、コト（ノ）節、動詞連用形節、イベント名詞句という三種類の補部形式と「忘れる」の意味の対応関係を、数量詞遊離現象や項転移現象を観察することで整理した。

6.4. 他の動詞と補部の形式

前節までは、補部を選択する「忘れる」の意味と補部形式の間関係性を、含意・叙実という意味の観点から記述的に明らかにしてきた。本節では冒頭で示したアスペクト動詞「始める」「続ける」「終わる」および叙実動詞「慣れる」「飽きる」に関して若干の考察を加えたい。これらの動詞は、「忘れる」のように明確な意味の違いを確認するのが難しいが、補部形式の差異と述語の意味との間には相関関係が見られる。

まず、アスペクト動詞であるが、既に冒頭で述べたように、アスペクト動詞「始める」「続ける」「終わる」は、コト節（またはノ節）、動詞連用形節、イベント名詞句の三つの補部形式を選択することができる。以下の(33)から(35)を見られたい。

- (33) a. ヒロシは[毎朝同じ時間に出勤すること]を{始めた/続けた}。
b. ヒロシは無事定年となり[働くこと]を終えた。
- (34) a. ヒロシは[毎朝同じ時間に出勤し]{始めた/続けた}。
b. ヒロシは[その推理小説を読み]終えた。
- (35) a. ヒロシは[警戒]を{始めた/続けた}。
b. ヒロシは[読書]を終えた。

複合動詞における「始める」「続ける」には、イベントの開始・継続という一つのイ

イベントの局面に言及するものと、イベントの反復の開始・継続とでも名付けられるような、複数イベントを問題にするもののが存在する。例えば、イベントの開始や継続という一つのイベントの局面に言及するためには、そのイベントが語彙的に時間の幅を持っていなければならない（金田一 1950; Dowty 1979; Vendler 1967 等）。したがって、時間幅を持つ動作動詞ではイベントの開始・継続を表すことができるが、時間幅を持たない瞬間動詞ではイベントの反復の開始・継続を表すことしかできない。

- (36) a. ヒロシはジョギングをし{始めた/続けた}。
b. ヒロシは転倒し{始めた/続けた}。

(36a)は「ジョギングをする」という時間幅を持った動作動詞で、この場合にはジョギングという一つのイベントを開始した（または継続した）という解釈が可能である。一方の(36b)では「転倒する」が瞬間動詞であり時間幅を持たないため、ここでは転倒というイベントの反復が開始した（または継続した）という解釈しかできない。ここで、便宜的に、イベントの局面に言及する場合を「開始・継続」と呼び、イベントの反復の開始・継続を「反復」と呼んでおく。すると、興味深いことに、(33)で見られるようにコト節を選択した場合には必ず反復解釈でしかとれないことがわかる。コト節における反復解釈は「終える」に関しても同様である。ただし、「終える」に関しては、複合動詞の場合にはこの反復解釈は得られず、必ず一つのイベントの完了しか意味しない¹²。イベント名詞句の場合は、判断は必ずしも明瞭ではないが、一つのイベントの「開始・継続・終了」と「反復」の両方の意味が得られそうである。

上記の観察をまとめると以下の表のようになる。

¹² イベントの反復を指定する完了の複合動詞には「終わる」があるが（Matsumoto 1996a）、「終わる」は「～こと（の）を終わる」のようにコト（ノ）節を選択することができないのでここでは扱わない。

表3 補文形式と意味の対応関係：アスペクト動詞

補部形式	意味
コト節（ノ節）	反復の開始・継続・完了
動詞連用形節	開始・継続・完了/ 反復の開始・継続
イベント名詞句	開始・継続・完了/ 反復の開始・継続・完了

次に、叙実動詞の「慣れる」「飽きる」であるが、これらの動詞では動詞連用形節を選択した場合とコト節およびイベント名詞句を選択した場合で意味の違いが見られる。

- (37) a. ヒロシは[遠方まで出張すること]に{慣れた/飽きた}。
b. ヒロシは[遠方まで出張し]{慣れた/飽きた}。
c. ヒロシは[遠方までの出張]に{慣れた/飽きた}。

コト節およびイベント名詞句の場合には、補文イベントの発生が一度きりでも構わないが、動詞連用形節の場合は、補文イベントは必ず複数回発生していなければならない。これは以下の例で判断できる。

- (38) たった一度きりの遠方への出張であったが、
a. ヒロシは[遠方まで出張すること]に{慣れた/飽きた}。
b. #ヒロシは[遠方まで出張し]{慣れた/飽きた}。
c. ヒロシは[遠方までの出張]に{慣れた/飽きた}。

ここで、動詞連用形節を選択する「慣れる」および「飽きる」を叙実と区別して、反復的なアスペクトを意味するとしておくと、以下の表のようにまとめられる。

表 4 補文形式と意味の対応関係：「慣れる」「飽きる」

補部形式	意味
コト（ノ節）	叙実
動詞連用形節	反復
イベント名詞句	叙実

以上、「忘れる」以外の形式に見られる補部形式と主文動詞の意味の関係を記述した。

6.5. 理論的説明

前節までの議論で、「忘れる」をはじめとして、アスペクト動詞、叙実動詞の意味と補部形式の選択関係を明らかにしてきた。特に、「忘れる」に関しては、補文動詞への付加詞の修飾に関与していることが示され、その意味と補部形式の対応関係も提示した。

それでは、なぜ含意動詞の「忘れる」の場合に限り複合化できるのであろうか。これに関しては、本研究では複合化した「忘れる」を単文化の一種と捉え、「忘れる」が引き起こす再構造化現象として捉えられると主張したい。ここでは再構造化現象の詳細な分析には立ち入らないが、Cinque (2006) や Wurmbrand (1998, 2001) は、イタリア語とドイツ語の「忘れる」に対応する *dimenticare*、*vergessen* の再構造化について、含意動詞の時のみ再構造化が起き、叙実動詞の場合には再構造化が起きないことを観察している。以下の(39)はイタリア語の接辞上昇 (*clitic climbing*)、(40)(41)はドイツ語のスクランブリングと長距離の受け身化の例である。どれも再構造化の環境下でしか起きない現象である。

- (39) a. *Lo dimenticò di spegnere.*
 it forgot to switched off
 ‘He/She forgot to switch it off’
 b. **Lo dimenticò di aver spento.*
 it forgot to have switched off
 ‘He/She forgot to have switched it off’

(Cinque 2006: 63)

(40) [scrambling]

- a. *weil Hans[die Blumen]_{SCR} vergaß [_{t_{SCR}} erst gestern gegossen zu
since John the flowers forgot [_{t_{SCR}} only yesterday watered to
haben].
have]

‘since John forgot that he had watered the flowers only yesterday’

- b. weil Hans[die Blumen]_{SCR} vergaß [_{t_{SCR}} zu gießen].
since John the flowers forgot [_{t_{SCR}} to water]

‘since John forgot to water the flowers’

→ he didn’t water the flowers (implicative)

→ he was watering the flowers (*factive)

(41) [passive]

- weil der Wagen _{t_i} zu reparieren vergessen wurde.
since the car-NOM _{t_i} to repair forgotten was

‘since somebody forgot to repair the car’

→ the car didn’t get repaired (implicative)

→ the car is getting repaired (*factive)

(Wurmbrand 1998: 208-209)

イタリア語の(39a)は含意の *dimenticare* (忘れる) で、本来は補文動詞の項である接辞の *lo* が主文の *dimenticare* の前の位置まで移動している。こうした接辞上昇は単文でしか起きないとされており、(39a)は単文化していると捉えられる。対照的に(39b)は、補文の *avere* (have) が示すように叙実の *dimenticare* (忘れる) で、この場合には接辞上昇は不可能である。したがって、*dimenticare* は含意動詞の場合には単文化しているが、叙実動詞の場合には単文化していないということがわかる。

ドイツ語の(40)(41)は、それぞれスクランブリングと長距離の受け身化の例である。(40a)は、*haben* (have) が補文に現れていることからわかるように、叙実の *vergessen* (忘れる) である。そのため、*die Blumen* (花) という補文の項をスクランブリングで主文に持ってくることはできない。一方で(40b)の場合にはそれが可能になっており、この文は含意の解釈でしかとることができず、この場合の *vergessen* は含意動詞であることがわかる。(41)は長距離の受け身化の例で、この場合も含意の意味でしか捉えられないので、*vergessen* が含意動詞であることがわかる。このイタリア語とドイツ語の例が示

しているのは、*dimenticare*（忘れる）と *vergeffen*（忘れる）において、叙実の場合には単文化していないが、含意の場合には単文化しているということである。

これは日本語の「忘れる」にも当てはまる事実であると考えられる。複合化を一種の再構造化と捉えれば、「含意」が再構造化を引き起こす意味的要因であるとすることができる¹³。Cinque (2006) は、再構造化動詞は機能範疇の具現形だとしており、Grano (2012, 2015) はそれに基づいて、Cinque (1999) の主張する機能範疇の階層の意味にそぐう動詞が機能動詞として具現することができ、再構造化を引き起こすと主張している。具体的には、イタリア語の *dimenticare*（忘れる）や 英語の *forget* は機能範疇のアスペクトの階層の未達成アスペクト（*Frustrative Aspect*）に具現化すると主張している。

日本語の統語的複合動詞である「忘れる」が接辞的特徴を持っていることを一種の機能化として捉えるのであれば、日本語の複合動詞の「忘れる」も、未達成アスペクトとして具現化するものであると考えられる。したがって、「忘れる」の意味から補部の形式（またはその構造）が予測可能であるということになる。

また、叙実動詞の「慣れる」「飽きる」に関しても同様の主張が可能になるかもしれない。Cinque (2006) では、*Asp_{habitual}* という機能的主要部が仮定されており、「～する習慣がある」という意味を表す *solere* (*use*) という動詞が再構造化動詞として認められている。実際に *solere* (*use*) は以下の例に見られるように接辞上昇が可能である。

- (42) *Lo solleva dire anche mio padre*
it used to say too my father
'My father used to say it too'

(Cinque 2006: 18)

「慣れる」「飽きる」がこの *Asp_{habitual}* に具現化すると考えれば、意味と構造との間の対応関係を、再構造化の観点から捉えることが可能になる。

6.6. まとめ

本章では、複数の補部形式を選択することができる動詞を対象として、意味と補部形式の間の対応関係を記述した。その中でも、特に「忘れる」を対象に、付加詞の修飾の可能性を議論し、「忘れる」の二種類の意味と補部形式の間の関係を記述的な観点から

¹³ 統語的複合動詞に見られる単文性に関する議論は第4章を参照されたい。

捉えた。具体的には、「忘れる」に「含意」と「叙実」の二種類のタイプを認めること、そしてそれによって補文動詞への付加詞の修飾の可否が説明可能であることを論じた。その結果、含意の「忘れる」の場合には全ての補部形式が選択可能であるのに対し、叙実の「忘れる」の場合には動詞連用形節が選択できないことを明らかにした。また、アスペクト動詞や叙実動詞の意味と補部形式の関係性も述べ、こうした補部形式の選択には、再構造化現象が関わっており、Cinque (2006) や Grano (2012, 2015) の分析が有効であることを本章での理論的含意として示した。

本章での議論が正しければ、動詞連用形節の選択には、典型的なアスペクト動詞の場合をはじめとして、反復や含意といった広義のアスペクト的意味が関与しているということになる。これは、既に第4章で論じたことの傍証となる。

第7章 結論

7.1. 本研究のまとめ

本研究では、英語のコントロールに関する観察と分析から出発し、日本語の補文（補部）コントロール現象に関わる構文に対して分析を加えてきた。具体的には、以下の(1)に見られる三つの補部形式を主な対象として、コントロール述語の意味的特徴およびその意味的特徴が関与する統語現象の分析を試みた。

(1) [コト節補文]

- a. ヒロシ_iは[$\Delta_{i/*j}$ 筑波大学を受験すること]を忘れた。

[動詞連用形節補文]

- b. ヒロシ_iは[$\Delta_{i/*j}$ 筑波大学を受験し]直した。

[イベント名詞句補部]

- c. ヒロシ_iは[$\Delta_{i/*j}$ 筑波大学の受験]を試みた。

以上の研究対象の分析にあたり、第 1 章の序論では以下の(2)に見られる研究目標と課題を掲げた。

(2) 本研究での目標と課題

[目標]

コントロール現象に関わる（主文）述語の意味的特徴と補文の統語的特徴を解明する。

[課題]

- a. コト節補文を含む複文にコントロール現象が観察される場合、その主文述語の意味特徴は何か。また、コト節補文の空主語の統語的実態およびその解釈の決定方法はどうなっているか。

- b. コントロール現象が観察される動詞連用形節補文を選択する主文述語の意味的特徴は何か。主文述語の意味によって補文構造に差異が存在するか。また、動詞連用形節に観察される空主語の統語的実態は何か。
- c. コントロール述語がイベント名詞句を選択する場合に、その述語の意味的特徴がどのような統語現象と関連性を持つか。その統語的ふるまいの背後にある述語の意味的特徴は何か。また、コントロール性と統語的ふるまいの関係はいかなるものか。
- d. 補部形式の選択と主文述語の意味にはどのような対応関係があるか。あるとすれば、その選択の背景にはどのようなメカニズムが関わっているか。

(2)で掲げた課題のaからdには第3章から第6章までが概ね順に対応する。以下では、上記の課題に解答を与える形で、各章で明らかにしたことを整理する。

第3章

コト節補文を主な対象として、構造上同形でありながらコントロールと非コントロールで対立が見られる事実に対して考察を加えた。

本研究では、コントロールと非コントロールの差異が、主文述語の意味によると考えた。そこで、主文述語の意味を Landau (2000) や Grano (2015) の意味分類にしたがって分類し、「イベントの非分離性」「指示・操作性」「再帰性」という語彙的な特徴がコントロールに関与していることを明らかにした。

コト節における空主語の統語的実態は、王 (2011) にしたがって、照応的 pro であり、その解釈の決定方法は通常の照応詞と同様であるとした。そして、照応的 pro の認可には、上記の主文述語が関与していると論じた。加えて、照応的 pro を認可する述語は、Stiebels (2007)、Gamerschlag (2007) が主張する本質的コントロール述語 (inherent control predicates) に当たることも見た。

上記の(2)で挙げられた研究課題に解答を与えると以下のようなになる。

- (3) コト節補文を含む複文にコントロール現象が観察される場合、その主文述語の意味特徴は何か。また、コト節補文の空主語の統語的実態およびその解釈の決定方法はどうか。(2a)再掲)

- (3') 主文述語の意味的特徴は「イベントの非分離性」「指示・操作性」「再帰性」であり、空主語の統語的実態は照応的 *pro* である。また空主語の解釈は、通常の再帰代名詞と同様のメカニズムで決定される。

第4章

コントロール現象が観察される統語的複合動詞を対象に、そこに見られる長距離の受け身化を分析対象とし、そのコントロール性のメカニズムに迫った。具体的には、統語的複合動詞の意味的特徴とその単文性を再構造化現象の観点から捉えた。

本章では、統語的複合動詞は全て単文性を備えていること、後項動詞の V2 が全て広義のアスペクトとして捉えられることの二点を主張し、Cinque (1999) の機能的主要部の階層に基づく、長距離の受け身化が説明できることを明らかにした。そして、統語的複合動詞に見られるコントロール性は、全て繰り上げ構造から導かれ、補文の空主語は移動の痕跡であると主張した。また、Fukuda (2012) の研究に基づきながら、V2 の意味と構造の間に一定の関係性があることを述べた。

上記の(2)の研究課題に解答を与えると以下の通りである。

- (4) コントロール現象が観察される動詞連用形節補文を選択する主文述語の意味的特徴は何か。主文述語の意味によって補文構造に差異が存在するか。また、動詞連用形節に観察される空主語の統語的実態は何か。((2b)再掲)
- (4') 主文述語はすべてアスペクト的意味を持つという特徴を持ち、意味によって補文構造に差が存在する。空主語は移動の痕跡である。

第5章

イベント名詞句補部を選択する述語を対象に、コントロールと非コントロールというコト節補文と同様の対立が見られることを、先行研究に従いながら確認した。本章では、こうした述語のコントロール性に関わる統語現象である項転移現象および数量詞遊離現象を取り上げ、当該の現象に関する新たな記述的事実を提出した。

具体的には、従来コントロール性が条件とされてきた上記の二つの現象に、イベント名詞句で表されるイベントが前提的である場合には上記の二つの現象が見られないということを観察し、「前提性」がコントロール性以外の条件として存在することを明らかにした。この前提性には、イベント名詞句に指示的表現がつくことによって前提になる場合と、述語の意味によってイベント名詞句が前提になる場合があることを指摘

し、述語の意味が構造に関わる項転移と数量詞遊離という現象と関連していることを示した。

本章では、項転移現象と数量詞遊離現象をイベント名詞句補部からの抜き出しと捉え、この抜き出しがコントロール述語においてのみ可能となるのは、補部のイベントと述語のイベントが、述語の語彙的な意味によってある種の依存関係にあるからであると考えた。

上記の(2)の研究課題に対する答えは以下のようになる。

- (5) コントロール述語がイベント名詞句を選択する場合に、その述語の意味的特徴がどのような統語現象と関連性を持つか。その統語的ふるまいの背後にある述語の意味的特徴は何か。また、コントロール性と統語的ふるまいの関係はいかなるものか。((2c)再掲)
- (5') コントロール性という述語の意味的特徴は、項転移現象や数量詞遊離現象という統語現象と関わりを持つ。そのふるまいの背景には、コントロールに関与する述語の意味および前提性がある。このような統語的ふるまいは、「補部イベントの要素を主文述語のイベントの中に組み込む」という点で共通している。そして、当該の統語現象は、補部と述語のイベントが何らかの形で依存関係にある場合に認められるという点で、コントロール性と関与している。

第6章

コト節、動詞連用形節、イベント名詞句という複数の補部形式を選択できる述語を対象に、その補部形式と述語の意味との対応関係を記述的な観点から明らかにした。特に、従来から種々の分析がなされてきた「忘れる」を取り上げた。

本章では、補文述語への付加詞修飾の可否という問題を取り上げ、「忘れる」が、英語と同様に含意と叙実の二種類に分類できることを示し、付加詞の修飾関係はこの二分類から説明可能であると論じた。そして、含意の場合はコト節、動詞連用形節、イベント名詞句の全てが選択できるのに対して、叙実の場合には動詞連用形節が選択できないことを明らかにした。

また、アスペクト動詞や「慣れる」「飽きる」などの述語も取り上げ、そこに見られる意味と補部形式の対応関係も記述した。そして、述語の意味と補部形式の選択関係は、再構造化現象の観点から説明を与えることが可能であると論じた。

上記の(2)での課題に対する解答は以下の通りである。

- (6) 補部形式の選択と主文述語の意味にはどのような対応関係があるか。あるとすれば、その選択の背景にはどのようなメカニズムが関わっているか。((2d)再掲)
- (6') 動詞連用形節補文の選択には、それを選択する述語に認められる広義のアスペクト的な意味が関与している。そして、その背後には再構造化というメカニズムが存在する。

7.2. 本研究の意義

本研究では、主に述語の意味という観点から、コントロール現象で括られる構文について分析を加えてきた。本節では本研究で明らかにしたことの意義を述べる。

述語の意味とコントロール性

コントロール現象は、英語の分析に端を発するという事情から、「定形」対「非定形」といった対立が重視されており、その中でも時制が大きな役割を果たすと見なされてきた。コントロール現象に対する時制の役割は、定形補文におけるコントロール現象の分析においても維持されることが多く (Landau 2004, 2006)、日本語でも時制が重要な意味を持つとされてきた (Fujii 2006; Uchibori 2000 等)。こうした背景の中、コントロール現象において述語の意味は等閑視されることが多かった。

しかし、述語の意味とコントロール現象は明らかに関連しており、英語の補文コントロールに話を限定しても、述語の意味が空主語の解釈に影響を与えることが指摘されている。

本研究では、日本語の定形節および非定形節におけるコントロール性を説明するためには、述語の意味という観点を取り入れなければならないことを明らかにし、コントロール現象には、構造と意味のどちらの観点も欠かすことができないことを明らかにした。

このような述語の意味に基づく分析は、時制が関与しない名詞句補部におけるコントロール性に関しても無理なく説明を与えることができる。こうしたイベント名詞句補部とコントロール現象との間の関係は、従来、分析の対象とされることが少なかったが、本研究では、イベント名詞句補部も積極的に研究課題として取り入れることで、コントロール性と述語の意味の間の関係を明らかにできることを示した。

コントロール性のメカニズム

一部のコントロール述語は、定形節補文だけでなく動詞連用形節という非定形節補文

を選択することもできる。コントロール性は補文形式に影響されないため、先行研究ではどちらもほぼ同様の特徴をもつコントロール現象として扱われており、両形式が並行して分析されることは少なかった。

本研究では、コト節補文（定形節）のコントロール性は、補文の主語位置に照応的 *pro* が出現することによって保証されると論じた。一方、統語的複合動詞（非定形節）のコントロール性には、定形節補文とは全く異なったコントロール性を生むメカニズム（繰り上げ構造）が関与していることを、長距離の受け身化の現象を分析することで明らかにした。

コントロール性が関わる統語現象

本研究では、コントロール性とその背景にあるメカニズムに対して考察を加えるとともに、イベント名詞句からの抜き出しという現象も取り上げ、述語の意味が与える統語現象への影響を考察した。そして、項転移現象・数量詞遊離現象に対して、コントロール性という概念に加えて、「前提性」という概念が重要な役割を果たすことを明らかにした。

本研究では、こうした補部のイベントの要素の抜き出しを可能にするのは、コントロール述語が語彙的な意味により、補部のイベントと述語のイベントが依存関係にあることによると考えた。先行研究では、そもそもイベント名詞句補部がコントロール現象の分析の中で扱われることが少なかったが、本研究ではこれを積極的に取り入れることで、述語の意味が統語現象に与える影響を明らかにした。

述語の意味と補部形式選択

本研究では、補文形式選択に関しても述語の意味から考察を加えた。特に、コト節補文、動詞連用形節補文、イベント名詞句補部を取り上げ、補部の種類と述語の意味との関係を探った。従来は上記の三つの形式が補部形式の選択という観点から分析されることは、管見の限りなかった。

本研究では、上記の三つの形式の選択の考察から、コト節とイベント名詞句はかなりの特徴を共有している一方で、動詞連用形節のみが他の二つと比べて異なる性質を持つことを記述した。そして、動詞連用形節の選択には再構造化が関与していると考えることが妥当であることを、他言語との比較から示した。

7.3. 今後の展望

本節では、本研究での成果を踏まえての展望を述べる。本節の今後の展望をもって、本研究の結語としたい。

コントロールの類型論的研究

本研究では、主に日本語のデータを扱ったが、Stiebels (2007) の示唆からも明らかのように、コントロール現象というものの本質に迫るためには、類型論的な視野が必要になる。特に、pro 脱落言語とそうでない言語との比較は重要な意味を持つ。また、pro 脱落言語であっても、日本語・韓国語・中国語のような東アジアの pro 脱落言語に見られるコントロール現象の特徴と、イタリア語やスペイン語等に見られる pro 脱落言語に見られるコントロール現象の特徴を記述していくことは、空主語、ひいては空範疇の特性の解明につながる。したがって、今後は、本研究で得られた知見を、類型論的な立場から捉えていく作業が求められる。

空範疇の特性の解明

本研究では、コントロール現象に分析を加えてきたが、当該の現象は、補文の空主語の特性、すなわち空範疇に関わる現象である。音形を持つ名詞句はその特性により[±a]と[±p]という素性によって四つのタイプに分類できるが、それと同様の分類が空範疇にも存在する。音形を持たない空範疇にも名詞句と同様の特性を持つという発見は、生成文法理論にとって重要な意味を持つ。これは、目に見えない要素が文法的には重要な役割を担っているという事実が、人間言語の背景にある心内メカニズムの解明につながると考えられているためである。本研究での成果は、空範疇一般に関わる研究に発展する可能性を秘めている。

空範疇の特性を明らかにすることは、人間言語の本質に迫る重要な意義を持っている。本研究では、コントロール現象を通して空主語の特性に考察を加えてきたが、まだ空主語の特徴が完全に明らかになったとは言い難い。日本語における空主語の複雑な特徴は、音形のある名詞句との比較を考えると見えてくる。例えば、(7)に見られるようなコト節補文を考えると、空主語の位置には、代名詞も再帰代名詞も出現可能であることがわかる。

- (7) ヒロシ_iは[Δ_{ij}/自分_{i/*j}/自分自身_{i/*j}/彼自身_{i/*j}/彼_{ij}が会議に出席すること]を望んだ。

一般的に、代名詞と再帰代名詞は、一方が生じる位置には一方が生じないという相補分布の関係にあるが、(7)の例からも明らかなように、日本語の空主語の位置にはそのどちらもが生起可能な場合がある。pro 脱落言語である日本語の空主語の特性に関しては様々な分析が提出されているが、まだその全貌が明らかになったとは言い難い。今後はこうした顕在的な名詞句との対応も含めながら、日本語における空範疇の特性について分析を進めていく必要がある。

構造と意味の接点

コントロール現象は、再構造化現象とも密接に関わっている。通言語的に再構造化を起こす意味は限られており、当該の現象は、構造と意味のインターフェイスの解明につながる現象であるとして注目を浴びてきた。

本研究では、述語の意味と補文構造の関係を解明するために、再構造化という考えを積極的に取り入れて分析を進めてきた。それと同時に、コントロール述語に関与する意味的特徴も記述してきた。しかし、それぞれの章で提示した意味的特徴が、相互にどのような関係にあるかについてはまだ議論を尽くしていない。本研究では、コントロール述語の意味的特徴にはアスペクトやモーダルといった意味があることを主張してきたが、これは伝統的には再構造化を起こすとされる意味概念である。したがって、両者は密接に結びつけることができる概念として捉え、分析を進めることが望ましい。

今後は、構造と意味とのインターフェイスの解明という観点からも、本研究で扱った述語の意味をより形式的な形で提示し、伝統的な再構造化の議論との関わりから補文構造を分析していく必要がある。

参考文献

- 青柳宏・張楠 (2014) 「中国語と日本語の結果複合動詞について」, 岸本秀樹・由本陽子(編)『複雑述語研究の現在』 pp. 411-437, ひつじ書房.
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語(上)』大修館書店.
- 王丹丹 (2011) 『pro-脱落言語におけるゼロ要素の統語的分析：日本語と中国語を中心に』筑波大学博士論文.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房.
- 影山太郎 (2013) 「語彙的複合動詞の新体系：その理論的・応用的意味合い」影山太郎(編)『複合動詞研究の最先端：謎の解明に向けて』 pp. 3-46, ひつじ書房.
- 岸本秀樹 (2009) 「補文をとる動詞と形容詞：上昇とコントロール」影山太郎(編)『日英対照形容詞・副詞の意味と構文』 pp. 152-190, 大修館書店.
- 岸本秀樹 (2013) 「統語的複合動詞の格と統語特性」影山太郎(編)『複合動詞研究の最先端：謎の解明に向けて』 pp. 143-183, ひつじ書房.
- 岸本秀樹 (2015) 「出来事の不成立を表す複合動詞について」由本陽子・小野尚之(編)『語彙意味論の新たな可能性を探って』 pp. 72-101, 開拓社.
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』15, pp. 48-63, 日本言語学会[金田一春彦(編) (1976) 『日本語動詞のアスペクト』 pp. 5-26, むぎ書房に再録].
- 久野暲 (1973) 『日本文法研究』大修館書店.
- 栞原和生・松山哲也 (2001) 『補文構造』研究社.
- 佐藤香織 (2002) 「イベント名詞句補部からの数量詞遊離現象」『日本語文法』2-2, pp. 112-127, 日本語文法学会.
- 佐野真樹 (1998) 「名詞句の中に現れるダケとその作用域について」『立命館大学言語文化研究』10-3, pp. 1-21, 立命館大学国際言語文化研究所.
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』大修館.
- 竹沢幸一 (1998) 「格の役割と構造」竹沢幸一・John Whitman(共著)『日英語比較選書 9 格と語順と統語構造』 pp. 2-102, 研究社.
- 竹沢幸一 (2001) 「日本語の状態記述二次述部と品詞分類：記述的考察を中心に」『東西言語文化の類型論』特別プロジェクト研究成果報告書, pp.237-264, 筑波大学.
- 竹沢幸一 (2016) 「日本語モーダル述語構文の統語構造と時制辞の統語的役割」藤田耕司・西村義樹(編)『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ 生成文法・認知

- 言語学と日本語学』 pp.55-76, 開拓社.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』 くろしお出版.
- 中島平三 (2016) 『島の眺望』 研究社.
- 中村捷 (1998) 「補文動詞の意味構造」 平野日出征・中村捷(編)『言語の内在と外在』 pp. 119-159, 東北大学文学部.
- 中村捷・金子義明・菊地朗 (2001) 『生成文法の新展開』 研究社.
- 仁田義雄 (1982) 「再帰動詞、再帰用法—Lexico-Syntax の姿勢から—」『日本語教育』 47, pp.79-90, 日本語教育学会.
- 橋本修 (1990) 「補文標識「の」「こと」の分布に関わる意味規則」『国語学』163, pp. 101-112, 国語学会.
- 長谷川信子 (1995) 「省略された代名詞の解釈」『日本語学』 14. pp. 27-34. 明治書院.
- 平岩健 (2005) 「分裂文」三原健一・平岩健(共著)『新日本語の統語構造』 pp. 131-151, 松柏社.
- 藤井友比呂 (2016) 「複文の構造と埋め込み補文の分類」村杉恵子・斎藤衛・宮本陽一・瀧田健介(編)『日本語文法ハンドブック 言語理論と言語獲得の観点から』pp. 2-37, 開拓社.
- 三原健一 (1998) 「数量詞連結構文と「結果」の含意〈上〉〈中〉〈下〉」『月刊言語』 27-6, 7, 8, pp. 86-94, 94-102, 104-113, 大修館書店.
- 三原健一 (2015) 『日本語の活用現象』 ひつじ書房.
- 由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語』 ひつじ書房.
- 由本陽子 (2008) 「複合動詞における項の具現—統語的複合と語彙的複合の差異—」 影山太郎(編)『レキシコンフォーラム NO.4』 pp. 1-29, ひつじ書房.
- Bianchi, Valentina and Cristiano Chesi (2012) Subject islands and the subject criterion. In Valentina Bianchi and Cristiano Chesi (eds.) *Enjoy Linguistics! Papers offered to Luigi Rizzi on the Occasion of his 60th Birthday*, pp. 25-53. Siena: CISCL Press.
- Bobaljik, Jonathan David and Landau, Idan (2009) Icelandic control is not A-movement: the case from case. *Linguistic Inquiry* 40. pp. 113-132.
- Bouchard, Denis (1984) *On the Content of Empty Categories*. Dordrecht: Foris.
- Bouchard, Denis (1985) PRO, pronominal or anaphor. *Linguistic Inquiry* 16. pp. 471-477.
- Burzio, Luigi (1986) *Italian Syntax*. Dordrecht: Reidel.
- Cecchetto, Carlo, and Renato Oniga (2004) A challenge to null case theory. *Linguistic Inquiry* 35. pp. 141-149.

- Chierchia, Gennaro (1990) Anaphora and attitude *De Se*. In Renate Bartsch, Johan van Benthem and Peter van Emde Boas (eds.) *Semantics and Contextual Expression*. pp. 1-32. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, Noam (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, MA.: MIT press. [翻訳 : 安井稔 (1970) 『文法理論の諸相』 研究社.].
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, Noam (1982) *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Chomsky, Noam, and Howard, Lasnik (1993) The theory of principles and parameters. In Joachim Jacobs, Arnim von Stechow, Wolfgang Sternefeld and Theo Vennemann (eds.) *Syntax: An international handbook of contemporary research*. pp. 506-569. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2000) Minimalist inquiries: the framework. In Roger Martin, David Michaels, Juan Uriagereka and Samuel Jay Keyser (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*. pp. 89-155. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2001) Derivation by phase. In Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Linguistics*. pp. 1-52. Cambridge, MA: MIT Press.
- Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Cinque, Guglielmo (2006) *Restructuring and Functional Heads, Oxford Studies in Comparative Syntax: The Cartography of Syntactic Structures Vol. 4*. Oxford: Oxford University Press.
- Culicover, Peter W., and Ray Jackendoff (2001) Control is not movement. *Linguistic Inquiry* 32. pp. 493-511.
- Culicover, Peter W., and Ray Jackendoff (2006) Turn over control to semantics. *Syntax* 9. pp. 131-152.
- Davies, William, and Stanley Dubinsky (2004) *The Grammar of Raising and Control. A Course in Syntactic Argumentation*. Oxford: Blackwell.
- Diesing, Molly (1992) *Indefinites*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Dowty, David (1979) *Word Meaning and Montague Grammar*. Dordrecht: Reidel.
- Dubinsky, Stanley (1997) Syntactic underspecification and light-verb phenomena in Japanese. *Linguistics* 35. pp. 627-672.

- Dubinsky, Stanley, and Shoko Hamano (2010) Framing the syntax of control in Japanese (and English). In Norbert Hornstein and Maria Polinsky (eds.) *Movement Theory of Control*. pp. 183–210. Amsterdam: John Benjamins.
- Erteschik-Shir, Nomi (1973) On the Nature of Island Constraints. Ph.D. dissertation, MIT.
- Fujii, Tomohiro (2006) Some Theoretical Issues in Japanese Control, Ph.D. dissertation, University of Maryland.
- Fujii, Tomohiro (2012) On the calculus of control and lack of overt agreement morphology. *Nanzan linguistics* 8. pp. 1-16.
- Fukuda, Shin (2012) Aspectual verbs as functional heads: evidence from Japanese aspectual verbs. *Natural Language & Linguistic Theory* 30-4. pp. 965-1026.
- Gamerschlag, Thomas (2007) Semantic and structural aspects of complement control in Korean. *ZAS Papers in Linguistics* 47. pp. 81-123.
- Grano, Thomas (2012) Control and Restructuring at the Syntax-Semantics Interface. Ph.D. dissertation, University of Chicago.
- Grano, Thomas (2015) *Control and Restructuring*. Oxford: Oxford University Press.
- Grimshaw, Jane, and Armin Mester (1988) Light verbs and theta-marking. *Linguistic Inquiry* 19. pp. 205-232.
- Hasegawa, Nobuko (1984-85) On the so-called 'zero pronouns' in Japanese. *The Linguistic Review* 4. pp. 289-341.
- Higginbotham, James (1980) Pronouns and bound variables. *Linguistic Inquiry* 11. pp. 679-708.
- Higginbotham, James (1992) Reference and control. In Richard Larson, Sabine Iatridou, Utpal Lahiri and James Higginbotham (eds.) *Control and Grammar*. pp. 79-108. Dordrecht: Kluwer.
- Hoji, Hajime (1987) Japanese clefts and chain binding/reconstruction effects. Ms., University of Southern California.
- Hoji, Hajime (1990) Theories of anaphora and aspects of Japanese syntax. Ms., University of Southern California.
- Homma, Shinsuke, Nobuhiro Kaga, Keiko Miyagawa, Kazue Takeda, and Koichi Takezawa (1992) Semantic properties of the floated quantifier construction in Japanese, *Proceedings of the 5th Summer Conference of Tokyo Linguistic Forum*. pp. 15-28, Tokyo: Tokyo Linguistic Forum.
- Hornstein, Norbert (1999) Movement and control. *Linguistic Inquiry* 30. pp. 69-96.

- Hornstein, Norbert (2003) On control. In Randall Hendrick (ed.) *Minimalist Syntax*. pp. 6-81. Oxford: Blackwell.
- Hoshi, Hiroto (2014) Underspecification, case and tense: a processing-based analysis of borrowing. In 『秋田大学教育文化学部研究紀要 人文科学・社会科学部門』 69. pp. 17-26.
- Huang, C. -T. James (1989) pro-drop in Chinese: A generalized control theory. In Osvaldo Jaeggli and Kenneth J. Safir (eds.) *The Null Subject Parameter*. pp. 185-214. Dordrecht: Kluwer.
- Huddleston, Rodney, and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. London: Cambridge University Press.
- Jackendoff, Ray S. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge, MA: MIT press.
- Jackendoff, Ray, and Culicover, Peter. W. (2003) The semantic basis of control in English. *Language* 79. pp. 517-556.
- Kageyama, Taro (1999) Word formation. In Natsuko Tsujimura (ed.) *The Handbook of Japanese Linguistics*. pp. 297-325. Oxford: Blackwell.
- Karttunen, Lauri (1971) Implicative verbs. *Language* 47. pp. 340-358.
- Kato, Yasuhiko (1985) *Negative Sentences in Japanese*, *Sophia Linguistica Monograph* 19. Sophia University.
- Kikuchi, Akira (1994) Extraction from NP in Japanese. *Current topics in English and Japanese*, 79-104. Tokyo: Hituzi.
- Kiparsky, Paul, and Carol Kiparsky (1970) Fact. In Manfred Bierwisch and Karl E. Heidolph (eds.) *Progress in Linguistics*. pp. 143-173. The Hague: Mouton.
- Kishimoto, Hideki (2007) Notes on syntactic compound verb constructions in Japanese. *Kobe Papers in Linguistics* 5. pp. 93-109.
- Kishimoto, Hideki (2014) The layered structure of syntactic V-V compounds in Japanese. *Kobe Papers in Linguistics* 9. pp. 1-22.
- Koizumi, Masatoshi (1994) Secondary predicates. *Journal of East Asian Linguistics* 3. pp. 25-79.
- Koizumi, Masatoshi (1995) *Phrase Structure in Minimalist Syntax*. Ph.D. dissertation, MIT.
- Koizumi, Masatoshi (1998) Invisible Agr in Japanese. *The Linguistic Review* 15. pp. 1-39.
- Kratzer, Angelika (1996) Severing the external argument from its verb. In Johan Rooryck and

- Laurie Zaring (eds.) *Phrase Structure and the Lexicons*. pp. 109-137. Dordrecht: Kluwer.
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Landau, Idan (2000) *Elements of Control: Structure and Meaning in Infinitive Constructions*. Dordrecht: Kluwer.
- Landau, Idan (2003) Movement out of control. *Linguistic Inquiry* 34. pp. 471-498.
- Landau, Idan (2004) The scale of finiteness and the calculus of control. *Natural Language & Linguistic Theory* 22. pp. 811-877.
- Landau, Idan (2006) Severing the Distribution of PRO from Case. *Syntax* 9. pp. 43–60.
- Landau, Idan (2013) *Control in Generative Grammar: A Research Companion*. New York: Cambridge university press.
- Landau, Idan (2015) *A two-Tiered Theory of Control*. Cambridge, MA.: MIT press.
- Lee, Kum Young (2009) Finite Control in Korean. Ph.D. dissertation, University of Iowa.
- Martin, Roger (1996) A Minimalist Theory of PRO and Control. Ph.D. dissertation, University of Connecticut.
- Martin, Roger (2001) Null case and the distribution of PRO. *Linguistic Inquiry* 32. pp. 141-166.
- Matsumoto, Yo (1996a) *Complex Predicates in Japanese: A Syntactic and Semantic Study of the Notion 'word'*. Tokyo and Stanford: Kurosio and CSLI.
- Matsumoto, Yo (1996b) A syntactic account of light verb phenomena in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 5. pp. 107-149.
- Miyagawa, Shigeru (1987) Restructuring in Japanese. In Takashi Imai and Mamoru Saito (eds.) *Issues in Japanese Linguistics*. pp. 273-300. Dordrecht: Foris.
- Miyagawa, Shigeru (1989) *Structure and Case Marking*. New York: Academic Press.
- Muraki, Masatake (1978) The shika nai construction and predicate restructuring. In John Hinds and Irein Howard (eds.) *Problems in Japanese Syntax and Semantics*. pp. 155-177. Tokyo: Kaitakusha.
- Nakamura, Masaru (1986/87) Japanese as a pro language. *The Linguistic Review* 6. pp. 281-296.
- Nakau, Minoru (1973) *Sentential Complementation in Japanese*. Tokyo: Kaitakusha.
- Newmeyer, Frederic J. (1975) *English Aspectual Verbs*. Paris: Mouton.
- Nishigauchi, Taisuke (1993) Long distance passive. In Nobuko Hasegawa (ed.) *Syntax in Japanese Comparative Grammar*. pp. 79-114. Tokyo: Kurosio.
- Nishiyama, Kunio (2008) V-V compounds. In Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito (eds.) *Japanese Linguistics*. pp. 320-347. New York: Oxford University press.

- Nishiyama, Kunio, and Yoshiki Ogawa (2014) Auxiliation, atransitivity, and transtivity harmony in Japanese V-V compounds. *Interdisciplinary Information Science* 20-2. pp. 71-101.
- Ohso, Mieko (1976) A Study of Zero Pronominalization in Japanese. Ph.D. dissertation, Ohio State University.
- Oprina, Florin D. (2014) V-V predicates and restructuring. In 岸本秀樹・由本陽子(編)『複雑述語研究の現在』 pp. 149-175, ひつじ書房.
- Perlmutter, David M. (1970) The two verbs begin. In Roderick A. Jacobs and Peter S. Rosenbaum (eds.) *Readings in English Transformational Grammar*. pp. 107-119. Waltham, MA: Blaisdell.
- Rizzi, Luigi (1982) *Issues in Italian Syntax*. Dordrecht: Foris.
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*. Cambridge: MIT Press.
- Rosenbaum, Peter (1967) *The Grammar of English Predicate Complement Constructions*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Saito, Mamoru, and Hiroto Hoshi (1998) Control in complex predicates. In 『筑波大学東西言語文化の類型論』 pp. 15-46. 筑波大学.
- Saito, Mamoru, and Hiroto Hoshi (2000) The Japanese light verb construction and the minimalist program. In Roger Martin, David Michaels, Juan Uriagereka and Samuel Jay Keyser (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*. pp. 261-295. Cambridge, MA: MIT Press.
- Sakaguchi, Mari (1990) Control structures in Japanese. *Japanese and Korean Linguistics* 1. pp. 303-317.
- Shibatani, Masayoshi (1973) Where morphology and syntax clash: A case in Japanese aspectual verbs. 『言語研究』 64. pp. 65-96.
- Sigurðsson, Halldór Ármann (1991) Icelandic case-marked PRO and the licensing of lexical arguments. *Natural Language & Linguistic Theory* 9. pp. 327-363.
- Stiebels, Barbara (2007) Towards a typology of complement control. *ZAS Papers in Linguistics* 47. pp. 1-80.
- Stowell, Tim (1982) The tense of infinitives. *Linguistic Inquiry* 13. pp. 561-70.
- Takahashi, Masahiko (2013) Adjunction, phases, and complex predicates in Japanese. *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 19. pp. 227-236.
- Takezawa, Koichi (1987) A Configurational Approach to Case-marking in Japanese. Ph.D.

- dissertation, University of Washington.
- Tomioka, Naoko (2006) The interaction of between restructuring and causative morphology in Japanese. In Claire Gurski and Milica Radisic (eds.) *Proceedings of the 2006 Annual Conference of the Canadian Linguistic Association*.
- Uchibori, Asako (2000) The Syntax of Subjunctive Complements: Evidence from Japanese. Ph.D. dissertation, University of Connecticut.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in philosophy*. Ithaca, NY: Cornell University Press.
- Williams, Edwin (1980) Predication. *Linguistic Inquiry* 11. pp. 203-238.
- Wurmbrand, Susanne (1998) Infinitives. Ph.D. Dissertation, MIT.
- Wurmbrand, Susanne (2001) *Infinitives: Restructuring and Clause Structure*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Wurmbrand, Susanne (2004) Two types of restructuring: lexical vs. functional. *Lingua* 114. pp. 991-1014.
- Xu, Lie-jiong (1986) Free empty category. *Linguistic Inquiry* 17. pp. 75-93.
- Yang, Dong-Whee (1984) Extended control theory. *Language Research* 20. pp. 19-30.
- Zushi, Mihoko (2005) Deriving the similarities between Japanese and Italian: a case study in comparative syntax. *Lingua* 115: 711-752.
- Zushi, Mihoko (2008) Some remarks on the lexical nature of restructuring predicates. *English Linguistics* 25. pp. 340-363.

各章と既発表論文および口頭発表との関係

第1章 序論

新規執筆

第2章 先行研究の概観と問題の所在

新規執筆

第3章 コト節補文におけるコントロール

阿久澤弘陽 (2017) 「コト節を選択するコントロール構文と述語の意味」関西言語学会 第42回大会口頭発表.

阿久澤弘陽 (2017) 「コト節を選択するコントロール述語の分類」第151回関東日本語談話会口頭発表.

第4章 統語的複合動詞と長距離の受け身化

Akuzawa, Koyo (2015) On long passives in Japanese syntactic V-V compounds: a cartographic approach, 『言語学論叢 オンライン版』8-34, pp. 51-70, 筑波大学大学院 応用言語学・一般言語学研究室.

第5章 イベント名詞句からの抜き出し

阿久澤弘陽 (2016) 「コントロール述語における項転移現象と前提性」『日本語文法学会 第17回大会発表予稿集』, pp.81-88.

阿久澤弘陽 (2017) 「イベント名詞句からの抜き出しと前提性」『日本語文法』17-2, pp. 115-129, 日本語文法学会.

第6章 補部形式の選択と述語の意味

阿久澤弘陽 (2016) 「二種類の「忘れる」と補文形式-付加詞修飾の可能性を中心に-」『筑波応用言語学研究』23, pp. 1-14, 筑波大学大学院 応用言語学研究室.

阿久澤弘陽 (2016) 「補文をとる動詞 “dimenticare” と再構造化現象—日本語の「忘れる」との比較から—」第143回イタリア語・イタリア文化研究会口頭発表.

第7章 結論

新規執筆